

群馬県歴史の道調査報告書第十集

歴史の道調査報告書

下仁田道

群馬県教育委員会

下  
仁  
田  
道

## 序

昭和五十年代における本県の社会開発の進展は著しいものがあります。関越自動車道・上武国道・上越新幹線の開通を控え本県の産業経済文化にとって飛躍の年代といえましょう。また、これら交通網の整備に伴う社会生活の変革は県民の生活にも大きな影響を与えてきております。

これら近代化の波は、ふるさとの香りともいうべき郷土の歴史的遺産を急速に減失させつつあり、バランスのとれた開発が望まれ、保存対策が強く叫ばれるようになってまいりました。

本県では、こうした要請に応じて、昭和五十三年度から国庫補助を得て、四か年計画で歴史の道調査を実施してまいりました。本年度はその第三年次にあたります。これまでの二か年の調査結果については既に報告書で紹介したとおり、多くの成果を挙げることができました。

本年度の調査対象街道は、下仁田道、清水峠越往還、佐渡奉行街道、古戸・桐生道、古河往還の五街道であります。下仁田道を除くと比較的短い街道であります。しかし、それらの街道はその地域にとって重要な役割を果たしてきた街道であり、また、それぞれ特色のある道でもあります。

中世の道の面影をとどめる清水峠越往還・佐渡奉行街道。我國のシルクロード及び低湿地帯の街道である古戸・桐生道及び古河往還。また、砥石、こんにやくの道としての下仁田道等、地域の特色を持っております。

本調査で得られたこれら貴重な成果を、本書で広く県民に紹介して活用していただくとともに、今後における保存対策の資料として参考にしてまいりたいと思ひます。

なお、末筆ながら、調査の実施と報告書の作成に御協力いただいた調査員の方々や、地元教育委員会並びに協力いただいた地元のみならず、深く御礼申し上げる次第です。

昭和五十六年三月一日

群馬県教育委員会教育長

横 山 巖

# 目次

序 群馬県教育委員会教育長 横山 巖

## 歴史の道調査要項

### I 下仁田道の概観

一、はじめに……………3

二、宿駅と関所……………4

三、砥石のみち……………6

四、こめのみち……………7

五、こんにやくとねぎ……………7

六、往来の人々……………9

### II 道の確定

一、道の確定……………11

二、下仁田道と地形……………21

三、沿線地帯……………23

### III 下仁田道の現状と文化財

一、神流川から藤岡町へ……………31

二、藤岡町から吉井宿へ……………35

三、吉井宿から富岡（鑛川）へ……………41

四、富岡（鑛川）から宮崎宿へ……………45

五、宮崎宿から下仁田町へ……………51

六、下仁田町から藤井関所へ……………58

七、藤井関所から和美峠・香坂峠へ……………64

八、藤井関所から市野萱集落へ……………67

九、市野萱集落から香坂通り日影新道へ……………73

十、市野萱集落から内山峠へ……………75

十一、下仁田町から磐戸宿へ……………76

十二、磐戸宿から雨沢集落へ……………79

十三、雨沢集落から砥沢宿へ……………81

十四、砥沢宿から余地峠へ……………83

あとがき……………87

## 歴史の道調査実施要項

### 一、目的

古来、人や文物の交流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や關所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいっべき由緒のある道や水路とそれらに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用に資することを目的とする。

### 二、調査主体者

群馬県教育委員会

### 三、調査の方法

#### (1) 指導

調査の方法・計画、まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

#### (2) 総務

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を統括する。

県教育委員会事務局管理部文化財保護課課長並びに担当職員

#### (3) 調査員

丸山知良 県議会図書室長

土屋喜英 文化財調査委員

松嶋行雄 前橋女子高等学校教諭

品川久 前橋女子高等学校教諭

徳江康 南牧村立尾沢小学校教諭

原田雅純 産業考古学会会員

#### (4) 調査協力機関

藤岡市教育委員会 高岡市教育委員会

吉井町教育委員会 甘楽町教育委員会

下仁田町教育委員会 南牧村教育委員会

#### (5) 調査方法

○一次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

○二次調査

一次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

#### (6) 調査対象

昭和五十五年度は、下仁田道及び他街道とする。

(調査事項)

① 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば一関・番所・一里塚・宿場・本陣・騎本陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御飯屋・城館・陣屋・奉行所・古戦場・会所・並木・石畳・橋梁・隧道・常夜燈・道

標・地藏・道祖神・井戸・河岸・渡船場・波止及び歴史的名所（杜寺・札所・霊場・温泉・宿坊等）・名勝（庭園等）―の分布状況と保存の実態。

㊦ 無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態。

㊧ 道・運河の歴史的意義・格・沿革。

㊨ 河川の歴史的変遷。

㊩ 沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

㊪ 江戸時代の国界・藩界（正保・元禄・天保）及び郡名。

#### 四、調査のまとめ

報告書は、A4版サイズとし、縦書き、二段組みとする。道、運河ごとに分冊として作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

# I 下仁田道の概観

## 一、はじめに

「下仁田道」は、上州と信州を結ぶ交通路の主要なものの一つである。この往來は中山道の脇往還として中山道本庄宿から分かれて上野国藤岡宿へ入り、甘樂の谷合いを西へ向かい、下仁田宿に至る。ここから一条に分かれ、北西に進むと本宿に至る。更に分かれて和美峠みちと内山峠みちとなる。他の一条は西に向かい余地峠みちとなる。

通称「信州姫街道」とか「女街道」と言われている。この名称は広く知られ、各種の印刷物に使用され、既成の事実のようになっているが、近世文書の中からは今までそうした名称を見る事ができない。

万治二年十一月の文書（富岡市佐藤治郎家文書）には「馬次事」として

下仁田、松井田其外方々も出し申候諸荷物、先年之通富岡を福島江次、福島吉井江次、吉井藤岡江次来り申候是実也

とあるように特別な名称でこの通行を呼んでいる。富岡宿において

一、当所往來筋之中仙道裏道、本庄宿より南牧西牧兩岡所通、並信州岩村田宿迄往來之継場ニ御座候（文化十一年、佐藤家文書「富岡史」から）

というように中山道裏道とあり、あるいは他の多くの文書にみるように「中山道脇道ニ而御座候」と記載されているのである。

藤岡宿の文化元年九月の道しるべに

右ノ宮五里半、妙儀、吉井二里半、富岡五里、下仁田八里

とある。吉井、富岡、一ノ宮、下仁田への道であり、藤岡宿からすれば下仁田への道、下仁田みちというのが最も適當なのであろう。

女街道という名称は、普通言われる男道、女道というように表街道、裏街道ということから言いだされたものであろう。

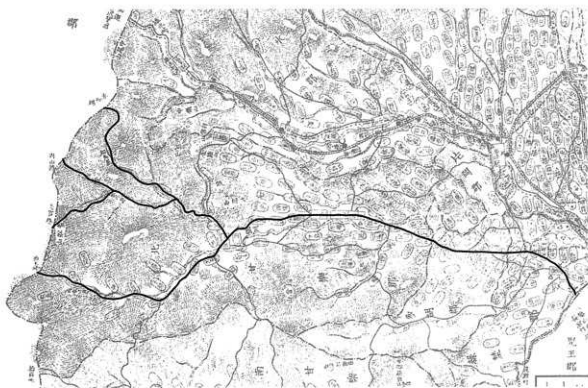
昭和三年十一月一日発行の「北甘樂郡史」に道路の項目があり、交通路の説明をした後に――

續つて陸路の関門を説かむか。本郡には二つの関所ありき。一は西牧の間にして、一は南牧の関所なり。西牧の関所は同村の記事にも載せし如く、西牧村大字本宿字岡所裏にありき。此道は上小坂村より漆置村を経て根古屋に出するもの、所謂女街道なり。

本文の記述は右の一事のみである。また郡内各町村の記載の中に「所謂女街道たる此の甘樂の通路」というように述べている。

従つて甘樂の道路のいわば俗称が女街道だと本書「北甘樂郡史」著者本多亀三氏は述べているのであつて、正式名称ではないと言つたために所謂という冠称をいつも付けていたのであろう。

そこで俗称であり、一面からは面白い名称が富岡史や、群馬県地誌の諸書に散見するようになったのであるが、その源点に立戻つて先ず藤岡宿から本街道を走破して、下仁田への道は「下仁田道」と称するのを妥当と考えたのである。



明治十八年地図から

## 二、宿駅と関所

甘楽郡を東西に結ぶ下仁田みちの本通りと考えられるのは、中山道本庄宿から藤岡、吉井、福島、富岡、七日市、一ノ宮、宮崎、下仁田、本宿、初鳥屋を経て和美峠を越えて中山道追分宿へ合流する道路である。

江戸時代の中期から次第に商品流通が盛んとなり、峠を越えて信州からの商品が輸送されてくるにつれ、多くの峠道が開発されてきた。

峠を数えあげれば、北は本通りと考えられる和美峠から、発地越え、矢川峠、志賀越え、内山峠、田口峠、余地峠となり、西南に走る大仁田峠がある。

藤岡宿は中世には鎌倉街道と土地で呼ぶ一つの街道の宿であったと伝えられている。ここに中世芦田氏が城郭を築き、城下町を設定したのである。大戸町、

笹木町、勸堂町、新町（緑町）の街区をなして近世初期から朝市として繁栄したと伝える。藤岡宿は交通路が四通し単に下仁田みちのみではないので、

本陣と呼ばれる家もあり、本陣は笹木町名主星野兵四郎家があったり、問屋は笹木町の星野金左衛門、勸堂町諸星七左衛門の二軒であった。

吉井宿は吉井陣屋の城下で問屋は名主秋山三左衛門が勤めていた。

福島宿は下仁田みちの一宿として開けたよきで、古く二日市などの地名にうかがうことができるが、宿として江戸時代初期に形成された。「北甘楽郡史」

によれば、問屋は根岸家が創設されたが、六代で上原家に継いだと伝えられている。その名は基左衛門（万治二年）から半右衛門、治右衛門の二軒（万延元年）と変遷している。

富岡宿は上、中、下の三町が交代で問屋職を勤めてきた。上町は松浦家、

中町は高橋家、下町（瀬下）は高橋家と黒沢家が問屋であった。宿は慶長十六（一六一一）年に代官中野七藏を宮崎宿から移転させて富岡新田町を都市計画し、開発させたと伝えられている。その都市計画から上町松浦家と、中町高



I 下仁田道の概観

橋家を移住させ、草分けとして間屋役を命じたのであった。瀬下の寛分の高橋家と竹田分の黒沢家は旧米土着の有力者であったので間屋を命ぜられたものであった。

この地域の旅籠は「信州蜜種商人定宿帳」などに出てくるものを列記すれば次の通りである（『下田秀吉氏稿上州の諸街道分相』）。

追分 越後や新兵衛

初鳥屋 つるや太三郎

根古屋 かどや七兵衛

本宿 夷屋三衛門 中や太兵衛 糸屋右衛門

中小坂 麻田源兵衛

下仁田 松原五郎右衛門 福田や茂兵衛

小沢 和泉屋衆助

南蛇井 大黒や安治郎

一宮 笠原太兵衛 こくや十兵衛 湊屋長兵衛 笠原三郎右衛門

宮崎 堀口吉右衛門 夷や松五右衛門

富岡 青木彦太郎 青木善兵衛 矢島治右衛門 古沢清左衛門 清水や長

吉

福島 こくや文治郎

権現堂 よし田屋広吉

吉井 関根半左衛門 三浦や小三郎 結城屋庄兵衛 いせや佐五郎 野沢

や四郎兵衛

藤岡 浜田や吉右衛門 柏や四郎右衛門 島崎利七

本庄 もろ井喜治郎 広木や久兵衛

関所は南牧関所と西牧関所があった。

南牧関所 南牧村大字砥沢にあった。砥沢御番所あるいは砥沢村御関所とも呼ばれていた。元禄二年巳十一月の規定を示す。

定

一 御関所昼夜無懈怠相守可申候、朝六ツ時暮六ツ時迄、可令往行、雖然無提子細有之夜中過候ハハ、不叶儀有之候ハハ、当村名主江可待差遣候事

一 女人ハ手形無之者一切不可通、此外手無候ハハ、捕置、此方江可令注進、若見のがし仕後日頭候ハハ、急度御仕置ニ可被仰付事

附 当谷之女人ハ谷中江参候ハハ、前々より手形無之通來候事

一 不依何事御番職ニ不可致損、尤人あつめ仕間敷候、御法度之誦勝負かた不可仕事

右之條々堅可相守者也  
元禄貳年巳十一月  
（群馬県史資料編 9）

関所役人は市川五郎兵衛で、関所勤めは本人のほか、家来の足軽一人、中間二人の三人に勤めさせていた。幕府御用砥の取締りもあり、武器類は三、矢五十本のほか鉄砲二挺その他が書上げられている。

西牧関所 下仁田町大字本宿字藤井。文禄二（一五九三）年十二月に創設されたという。翌文禄三年に檢地があり大久保石見守、伊奈備前守、中野七藏の三人が当った。番頭は森平村儀兵衛、本宿村文吉、根古屋村治郎左衛門

の三人、下役は村民が交代であつた。大坂の陣の時は代官中野七藏が陣頭指揮で番頭は勿論、百姓全員が出て関所を固め、関所の建物の中かに仮番所まで建てて詰めた。その時はやりが五筋、鉄砲が二十五挺あつた。

西牧の関所という名称は寛水八（一六三二）年の関所控書にも、明暦三（一六五七年）の裁許状にも、元禄十六（一七〇三）年の書類にも関所と書かれている。こうしたことを関所由緒書に記すということは関所としては極めて小規模のものであつたことであらう。しかし、多くの峠を越えてくる道が、この西牧関所か南牧関所を通過するので、関所の任務として抜道などのないように漆室村に番所を置いたりしていた。

### 三、砥石のみち

南牧村大字砥沢の砥石は中世から砥石の製品として切出されてきたようである。近世においては幕府の御用砥として、幕府の保護政策のもとで採掘が実施されてきた。この砥石を「御産砥」とよび、江戸へ輸送した。下仁田みちはこの御産砥を輸送するための道路でもあった。

砥石山の伝説は「藤岡町史」に狼の物語が記されている。砥沢村に狼笑山という山が高くそびえている。大昔、この山に人の大きき程の狼がいて刃物を研くような手真似をして、カラカラと高笑いをする。それを見て野人が山刀を研いだところ、よく刃がつくので、それから砥石を切り出すようになったという。

地元で砥石として使ってきたのは古いことであろう。戦国時代になると相当地元のようになつたと考えられる。地元の土着市川氏は一時武田氏に従っていたというから、その頃には武田氏の砥石山として珍重したことであろう。

江戸幕府の確立と共に砥石支配が始まり、寛文九（一六六九）年三月の文書に

一 砥山申渡候年数者当年四拾八年己前之戌之年二而候事

とある（長野県北佐久郡浅科村市川家文書）。四十八年前の戌年は元和八（一六二二）年にあたる。

また、南牧村砥沢の浅川彪太郎家文書の「砥山品々御尋ニ付御讀書上帳」によれば上野砥山の由緒を書き上げている。

市川家は元和九年から享保十三年まで百七十年間にわたり砥山経営をしていた。この間、市川家は四代に及ぶ。それ以前は江戸の奈良屋の一族と考えられる彦次郎が請負経営していたと伝えるが内容的なことは不明である。

市川家は文禄二（一五九三）年に領内開発権を許可され、砥石山経営を始めたという。寛永二十（一六四三）年から宝永六（一七二〇）年まで江戸の由比平右衛門が共同経営に加わっている。

砥山経営は生産額により一定額の運上金を幕府に上納している。

砥石の生産は寛文七（一六六七）年に二万五四八二駄、運上金八二六貫文余を最高として、年々二万駄程度を生産してきた。運上金は元和九年から享保十三年までの百七十年間に五万八千両という。

生産は享保三、四年ころから減少し、最盛期の四分の一に過ぎなくなった。その頃になると、伊豆砥、伊予砥が方々へ出回ったというのである。

砥石の採掘は市川家配下の砥切百姓一二軒があった。そのうちの七一軒は砥切株を持つている砥石専業者で、他の五〇軒は砥切株を持つているが小作農林業に従事している。

砥石山から掘出した砥石は、砥山名主がいて砥切、納入事務を取扱い、代官の家来が砥役人として常駐して製品の検査にあたっていた。

砥石は下仁田宿の砥石問屋福田文右衛門から富岡宿、藤岡宿を経て本庄宿へ出て陸路を中山道をのほるものと、藤岡宿から藤木河岸、八丁河岸で舟荷として江戸へ送るものがあった。

富岡宿の砥屋数は満願寺の東にあたるころにあった。この附近に砥山経営をしていた江戸の奈良屋彦次郎の所有地があったという。ここに砥産屋敷一反式拾歩があった。この中に砥産二棟があり、一時的保存と輸送に従事していた。

砥石は幕府の御用砥として納入した以外は江戸深川に集荷し、由比平右衛門が販売していた。後に寛延年間に千田庄兵衛、寛政年間には白子屋を始め九軒があつていった。

地元上野国では下仁田宿福田家を始め、富岡宿では中町問屋重次郎が享保年間まで従事し、その後は篠、高橋の三軒が交代制で明和年間まで、

次に松浦家から黒沢家に移っている。

藤岡宿では山下四郎右衛門から星野左衛門となり、星野家は砥山経営に乗り出している。寛政三、四年は川楯八、同五年から吉田半兵衛に移っている。

この間、砥石山での採掘に盛衰があったが、砥石の質が当時としては最高のものであったことから、下仁田みちは「砥石のみち」の役割としても重要な意義をもっていた。

#### 四、こめのみち

下仁田みちは信州佐久郡の米が峠を越えて来て売買された。峠を越える信州から下仁田への道は正にこめの道として重要であった。南牧谷砥沢の市川五郎兵衛が砥沢の土養として砥山の権利を持つと、その利益金を投入して信州に新田を開墾して米の生産に努力するとうように上州側では米の生産は不可能に近く、信州の米産に頼るところが多かった。五郎兵衛新田が示すように信州は米の産地であり、上州は消費地であった。そこで米が峠を越えて本宿や下仁田宿で取引市場の開催となるのである。

天明五（一七八五）年から現下仁田町の市野萱村で市を開くことが伝えられてきた。本宿村はこれに驚いて訴えている。本宿村にすれば、自分の村より峠に近い市野萱村と三ツ瀬村が共同して市を開いては本宿村の衰微につながりかねないので反対せざるを得ない。

市野萱村では信州の村々から送られてくる荷物が残らず村内で荷解きされ、預けて置いて、春になり穀物が高値になった頃に本宿村で申合せて非分の取計らいをしていると言っているのである。天明年間には浅間堰で上信国境が閉鎖になったり、佐久米の不作などの社会情勢に便乗して高収入をあげようという計らいがあったと言っているのである。

こうしたことから近隣の村々から頼まれて米を売ってきた。この販売が天明四年の秋から多くなってきたので本年（天明五年）二月から新市を開くことを願出したという。本宿村では当村は往古からずっと市を開いてきた。その市に支障がある、村中の難儀となってしまうと反対した。

本宿村では一か月に九日ずつ市を開いてきたという。市野萱村で市を開けば、自然に本宿村の市が立たなくなると、数度にわたる申出があり、市野萱市場の閉鎖となっている。

天明七（一七八七）年にも市野萱市場の開設について申請している。これは本宿村だけの市場だと値段の操作が可能で、米価変動につながりやすいということ、また市野萱村で荷解きをするところで小売りを可能にしてほしいといったことなどを含めて問題をこじらせている。

本宿村では古来からの先例があるのでゆるすわけにはいかないということであらう。

とにかく、こうした論争の中で本宿村では米市を開き、市野萱村では米の小売りをすることによって佐久米が販売されてきたのであった。

こうした峠下の町に甘楽谷の各地の米穀商が集まり、下仁田みちを運搬したのである。平野から米を搬入するという常識は、江戸時代を通じてなかった。米は峠の一番奥の山中から購入してくるということであった。下仁田みちは米の道だったのである。

#### 五、こんにやくとねぎ

年次がわからないが下仁田市場についての文書に

当町市場売買之品々之内、紙、楮、蒟蒻并葦簾之類、近年売買銀り二相成候様とある。下仁田町市立てについての取決めが乱れたので確認すべきであるということになったのであらう。



古きよき時代の下仁田町

文政十二（一八一九）年二月の下仁田市立ての取決めは次の通りである。

下仁田宿の上町中町下町の三町の市場は先年から決まってい

ることを守り、勝手な行動をしないようにする。荷受宿一同が合せをして守ることとした。

一、先見被仰付歟御ヶ条書、不洩様急度相守可申事  
 といった条項で自分勝手に売買するといった日に決った品物を売買するといったことを述べているのである。

この商取引が活発になるにつれて、商品の輸送も多くなってくる。甘栗の地域の特産物として搬出されるものとしては生糸、繭、絹、麻、煙草、紙、こんにやくといったものをあげることができるであろう。

養蚕はこの地域の特産物であり、絹、太織が盛んであった。絹売出、綿売出が地域の水納、小物成として上納されている。紙もまた秋煙紙や下仁田紙として販売されていた。これは楮としても搬出された。

富岡宿本治兵衛のような商人は絹や麻を江戸、京都、名古屋、江州などへ売るまで成長していった。また、麻問屋も成長していったように、この地の商人は特産物の販売を通じて大きく成長し、一加部、三佐羽、三鈴木という三鈴木が宮崎宿の名主問屋であったような分限者が成長したのである。

この地の特産物であるこんにやくが下仁田みちの盛衰にどのように関係があったか、極めて資料の少ないところであるが、「ねぎとこんにやく下仁田名

産」と、上毛かるたにあるように有名なこんにやくである。

『北甘栗郡史』はこんにやくについて四百余年前に大日向村の茂水平兵衛の先祖である和惣兵衛正峰という人が紀州からこんにやくを請い受けて来て畑地に植えたと書いている。これは永正二（一五〇五）年のことであるという。これは自家用にしたが、明治二十二年頃になって利潤があがるので販売するようになったと伝えられている。

宝永五（一七〇八）年に三波川村のこんにやく畑の被害の報告がある。猪の被害によるものであるが相当こんにやくを栽培していたことがわかる。

しかし、こんにやく売買は下仁田宿での取引品目の中にある紙、楮、こんにやくとあることにより下仁田市場で取扱っていたことがわかるがどの程度の数量になるか不明である。多くの記述が『北甘栗郡史』の域を出ていない。ねぎもまた特徴ある産物の一つである。殿様葱というのはねぎの中の殿様という意味であろうか。この下仁田ねぎの輸送の一例を示せば

覚

一ねぎ 貳百本 葱芫位之処

一きぬ 三疋半

右之品々急々御用ニ候ニ付、可被相運候、ねぎ買相かかり候而茂不吉候間、少も早相運候様取斗可被申候

一御用金も無滞、当月朔日着相納申候、右証文は跡に相達可申候、其節猶又委細可申達候、右急ぎ早々此段申達候、以上

十一月八日

（文化二年）

西野 奉之進徳行無印  
 田口 伊兵衛印

大日向村外麻本代官御用留（下仁田町桜井家文書）による。下仁田ねぎの季節になって、急に思ひ出されたので急いで出荷してほしいという。ねぎの代金は高くてもよろしい、とにかく早く送ってほしいという文書である。下仁田ねぎの評価が高く、江戸においても知られていた文化二（一八〇五）年の資料である。

## 六、往來の人々

下仁田みちを往來した人びとの中から、記録にとどめた幾つかを取上げてみたいと思ふ。

伊能忠敬 幕府の天文方で全国を踏査し、日本全国の奥測図を完成した。

この測量のために前後四回にわたって上州行脚を試みている。その第四回目にあたる文化十一(一八一四)年五月八日に和美峠を越えて上州に入った。

この旅行は既に文化八年十一月二十五日に出発し、足かけ四年の歳月を九州方面の調査に費やした帰路であった。伊能忠敬も七十歳を重ねようとしている時である。さすがに帰路にかかったのであるから、和美峠の新緑もこの老学者をさわやかに迎えたことであろう。初鳥屋の間屋文蔵方に泊った。西牧の関所を過ぎ、宮崎宿に泊った。十日は雨。一ノ宮の貫前神社を参詣し、富岡から小輪に行き昼食し、吉井宿間屋三右衛門に泊った。

以廻状申達候 就而測量御用御役人伊能勘解由様より通行筋村役人へ相達候様

に御文書に有之候間廻状御覽之上、早々御出御書付等拜見被成候而御認方も可

有御座候間若御心得違も御座候而ハ相済申間敷と被成候、又以廻状差出申候、

且又曾木村には別段舟渡し御座候に付御書上方御文書御座候間、廻状御覽之上

御出可被成候(下略)

五月五日

富岡上町中町瀬下福島金井三長根

御名主衆中

一ノ宮間屋 茂木 嘉助

伊能忠敬の測量調査旅行について関係宿役人中はこの廻状によって相談をし、更に五月八日昼夜相談をして九日の九ツ(昼)までに済書をして書類を調えた。

翌十日に伊能忠敬一行十七名が来て、全役員が附添って案内をした。

天文測量御用建立人馬出高

一馬八疋

内四疋 上町中町両町より

四疋 瀬下町より

廿八 瀬下町より

外 七人 幸領同町より

役人 一人 同町より

役人代 二人 中下両町より

円空 江戸時代初期に全国を遍歴して、多くの円空仏といわれる特異な仏像を遺した円空は、群馬県での足跡を近藤義雄氏から池田秀夫氏の研究で次第に明らかにされてきた。

その資料の一つに一宮貫前神社旧蔵の写経奥書に

天明徳四年霜月初五日書之了

奉身

利那転読心般若 上野ノ一ノ宮 今吉新

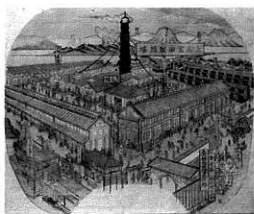
いくたひもく連る法ノ車仁ソ一代蔵そ転クトロケ

延宝九年辛酉四月丁酉十四日辰時見終也

壬申年生美濃国円空(花押)

円空研究家は池田秀夫氏の研究により生年が壬申年生という寛永九(一六三二)年と決定されたことに大きな意義をもった。

円空は延宝九(一六八二)年四月十四日に一宮に來ている。延宝八年九月には三重県の志摩地方に居たとのことで、上州へはどう入ってきたのであろうか。和美峠を越えてきたのであろうか。妙義山から一の宮へ來たのであろうか。延宝九年は九月二十九日に天和元年に改元されている。その天和二年の足跡もわからないとすれば上州一の宮から上州各地を遍歴したのが兩年にわたることであろう。



創立当時の富岡製糸所（関口高次郎氏所蔵）

平沢旭山 天明二（一七八二）年四月、紀行文学の江戸時代における第一人者といわれる平沢旭山が甘楽の谷を旅した。下仁田宿に高橋道齋を訪ねたのである。道齋の家で造る酒は酔にして名ありと、道齋の書物は万巻、家にみちみちており、書をたしなむ。旭山はここに宿泊して上毛山水の勝をここに集めて見るようだと述べている。

遊行上人 時宗の本山相州藤

沢の遊行寺の上人は旅に布教の最も重要な意義を求めていた。一行四〜五〇人にのぼるといふ行列であるが、明和六（一七六九）年、文化九（一八一二年）、天保六（一八三五）年、嘉永元（一八四八）年と数度に及ぶ遊行があったという。

その他 碓石山の奉行や一宮御普請奉行、学者、文人、蠶製法人御用役から天狗党などの往来があった。明治時代になり、富岡製糸場建設には多くの技師、職員、従業員、従業員の往来があり、英照皇太后と照憲皇太后の来場もあった。島崎藤村の『下仁田の宿』もまた、ここに旅した記録から生れた。下仁田町下小坂には藤村の詩塚も建てられている。

過し世をしずかにおもえ

百年もきのうの如し

島崎藤村

## II 道の確定



藤岡神流川付近の旧道



藤岡一丁目T字路 左手角に道しるべが建っていた  
(今は増信寺にある)

下仁田道の群馬県側の起点は対岸の埼玉県児玉郡上里町からの道の延長で、神流川の河原の中であつたと思われるが、河原の中は草が生い茂り昔の面影

### 一、道の確定

#### 1 神流川から藤岡町へ

## II 道の確定

を見ることはできない。道は河原の中から土手を横切り東京コンクリート工業株式会社工場の敷地内の中央部に残る道につながつたと思われる。工場敷地内をでると道はコンクリートの農業用水路の橋を渡り二メートルほどのじやり道が五〇メートル近く続く。このあたりは大変よく旧道の面影を残している。やがて舗装された道となりやや北にカーブしながら藤岡コンクリート工業株式会社の前を通る。そこからまた農業用水路を渡るとゆるやかな上りとなり、やや左にカーブしながら住宅地の中を西に進み、五〇〇メートルほどで国道二五四号線に合流する。このあたりの道幅は三メートルほどに広がり舗装となつているが、比較的旧道の面影を感じることができ。

国道にでた道は「第一軍管地方迅測図」(明治十三十七年、参謀本部陸軍部測量局、二万分の一)の藤岡町や付近の人の話によると国道とはほぼ同一であることがわかる。国道にでた道は北西に三〇〇メートル進むと西にカーブしながら国鉄八高線を横切り西へ進む。線路を横切るとすぐ左手の道祖神のわきに、五〇センチほどの道しるべを見つけることができる。昭和二十年四月建立と新しいが、埼玉、新町、鬼石を教え、さらにおもしろいことに矢印で八高線群馬藤岡駅を教えている。この前を西に三〇〇メートルほど進むと一丁目のT字路に出る。出た左角の田中喜太郎氏宅の道際には昭和二十五年ごろまで立派な古い道しるべが建つていた。今は近くの浄土宗増信寺入口に移されている。このT字路を道は右へ折れ、真つすぐ北に国道を進む。このあたりは一丁目から四丁目の商店街で土、日曜日には東京ナンバーをつけた車で混雑するところである。T字路から四〇〇メートル行くと四丁目の十字路に

でる。左手角に高さ三メートルの道しるべ(里程標)が建っている。この十字路を左へ折れ、藤岡の商店街の中心を通り(ところどころに古い蔵が散見できるが、一キロ近く西へ進むと左にカーブしながら緑町に入り三〇〇メートルほどで日野方面への分岐点にでる。この分岐点に電柱や広告に隠れて約一メートルの古い道しるべが建っている。歩いていてはうっかり見のがしましうその道しるべであるが、当時としては大変重要な道しるべであったと思われる。この三差路を左へ進むと平井、金井、日野方面へと続く県道上日野、藤岡線であるが、下仁田道はこの道しるべを左手に見て西南西の方向に国道二五四号線を進んでいく。

## 2 藤岡町から吉井宿へ

藤岡市緑町の三差路から、富岡の手前で鑛川を渡るまでの下仁田道は、ほぼ国道二五四号線と一致する。但し、下仁田道が曲折している部分や、狭い道路で家が立ち並び、拡幅できにくい部分一か所に新しい道路が付け変えられている。

藤岡市緑町の文化元(一八〇四)に建てられた道標のある三差路を左へ進むと、東平井、西平井、金井、日野と続いているが、旧道は右手の国道二五四号線に沿って進む。左側の市光工業を過ぎて間もなく、約三〇〇メートルにわたって付け替えられ、旧道はへの字に右側畑中を通り再び国道に合する。最大移動幅は約五〇メートルほどで、この間旧道は耕地化されているため通行不能である。間もなく上大塚集落に入る。上大塚の信号機のある十字路を過ぎて間もなく、火の見やぐらが南側にあるが、その火の見やぐらと農産物臨時検査場との間を左へ一〇メートルほど進み、すぐ右へ折れ五〇メートルほどの国道に合する。上大塚の集落を出ると間もなく旧道は二〇〇メートルほど右側を迂回する。東半分は水田の中の小径として残っているが西半分は砂利採取場となり消えている。



藤岡市緑町の交差点

おり、その間隔は最大一〇メートルほどである。

郷土の集落を過ぎ、鑛川の上位段丘面から段丘崖を斜めに下位段丘面に下り、旧道は右に分かれ、有効幅員一メートルほどの水田の中の小道を曲がりながら進む。二〇〇メートルほど行くとT字路となる。そこは富岡道とも言われた新町と吉井町を結ぶ道で現在は県道となっている。そのT字路を一〇〇メートル西へ進むと国道二五四号線に合流する。ここが小串の集落である。小串の集落をぬけると土合川に出合。土合川の手前約五〇メートル南側に農協がある。農協前の埋め立て地を北へ約六〇メートル、そこに古い橋の橋脚だけが石積で残っており、そこに東京へ送られるガスバイプラインが通っている。

土合川の岸には段丘の礫層がよく露出している。土合川から西には二メートルほどの小道が続き忠霊塔の南側をぬけると段丘崖の上に出る。そこを更

旧道は鑛川を現在の多野橋の下流(北側)で渡る。鎌倉街道であった白石の信号を横切って二〇〇メートルほどして、旧道はくの字のように左の集落の中を迂回する。ガソリンスタンドの地点より左に曲がり、飯玉神社の参道の起点となる立派な鳥居と常夜灯の前を通りすぎると間もなくY字路となり、そこを右へ曲がり、三〇〇メートルほど進むと国道に合する。国道に合して間もなく二〇〇メートルほど左の旧道は左側をわずかに迂回する。新旧両道はほぼ並行して



## II 道の確定



小串への旧道(中央水田の中)と新道



矢田川を渡る下仁田道



観現堂の旧道



富岡東 甘楽橋(三代の橋の変遷がわかる)

に西へ二〇メートルほど行くと国道二五四号線に出る。石神の集落である。信号機のある丁字路の東一〇メートルの地点で国道を横切り南へ一〇メートル、ここは家が出来て通行不能、多比良への道を西へ横切り、旧道は民家の庭として利用されながら残っており、約一〇〇メートルほど西で逆Y字型に国道に会す。

水田の中の道をしばらく進むと信号機がある。北へ行くと多胡碑のある御門集落へ出る。この信号の手前(東)約五〇メートルの地点から旧道はY字型に分かれ右へ進む。その旧道上にそば屋など二戸家が建てられ、通行不能である。信号の北約一〇メートルの地点をほぼ国道と並行して西へ進む。道幅四メートルほどでコンクリート舗装されている。やがて矢田川にさしかかるが橋はない。代りに東京へのガスパイプラインが通っている。矢田川を越えたと矢田の集落である。ここから約二〇〇メートル進むと国道二五四号線

に出る。国道を南へ横切り一〇メートル程進み西へ行き五〇メートルほど先の西谷川の橋の手前で国道に会す。

吉井宿の前は、今も昔もほぼ同じである。

### 3 吉井宿から富岡町(鋪川)へ

吉井宿西の大沢川から約五〇〇メートル先の白井集落地内で、旧道は約二〇〇メートルの間南へカーブしていたが、昭和四十年頃直線道路に付け替えた。

長根宿を通り過ぎ、やがて道は右へカーブして甘楽町植現堂の集落に入る。旧道は更に右に曲がり分かれるが、左へゆるやかにカーブしながら約一〇〇メートル先で再び国道に会す。道幅は四メートルほどの狭い道路である。間もなく天引川である。

天引川を越えると金井の宿が始まる。金井と福島間は条里制の良く残っている地域で道路も比較的直つてすぐであるがやや蛇行していた。それが今日では直線に近くなつたが、それは道路の付け替えというほどではなく、道路の拡幅によって消える程度のもので、旧道はほぼ国道と同一であると考へてよい。

福島宿を過ぎるとやがて富岡市下田線の集落に入る。間もなく鑛川にかかると甘楽橋にさしかかるが、旧道はこの手前一〇〇メートルの所に右に折れ河原に下りて行き、現在の土信電鉄の鉄橋付近で鑛川を渡つた。

#### 4 富岡町（鑛川）から宮崎へ

鑛川を渡ると高い断崖の岸を上り土信電鉄の下をくぐるように上の道に出る。三〇メートルほどで右折、ゆるい坂を上り一〇〇メートルほど行くと国道二五号線と合流する三差路に出る。ここからは国道を通り、ゆるいカーブを経て三〇〇メートルでバイパスとの分岐点になる。ここに左折する細い道があり、ゆるく曲り舗装した広い道になる。この間は一五〇メートルばかりであるが、旧態をとどめている。一〇〇メートルほどで右に少し曲る。ここから旧国道二五号線を進む。この辺から人家が多くなり富岡市中に入つて行く。小舟神社前を通過する直線の道で、富岡警察署前まで一キロも直線が続く。富岡警察署前を左折、五〇メートルで再び右折する。三五〇メートル直線の広い道が続く。ここで右折する。直進する道はせまく、突当りは富岡製糸所（片倉工業）である。やや道はせまくなるが、小売商店が続く急になぎやかな道になる。約三〇〇メートルで諏訪神社前に出て国道と合流する。国道は直線の道で土蔵造りの店舗などを見る。四〇〇メートルで道が食違つている場所がある。旧七日市藩の一の木戸があつたので、ここから七日市に入る。角に昔からおさく茶屋と呼ばれた家が残っている。一ノ木戸から直線の広い道が八〇〇メートル続く。途中に中ノ木戸があつたが位置が確認でき



富岡市入口會木



富岡と七日市の境（旧藩一の木戸）

ない。七日市旧藩邸の大手門前を左折する。右手は旧武家屋敷のあつた所で、それに直線の四メートル幅の道が二〇〇メートル続く。三差路を右折して、ゆるくカーブして蛇宮神社境内に沿って進む。この間は四〇〇メートルばかりある。鑛川を眼下に川に沿って進む細い道があり、左折してこの道に入る。道幅三メートルほどの鑛川の崖上の道で、土信電鉄の線路を通過してすぐ国道へ出る。この間は五〇〇メートル余もある。国道と共に進むのは四〇〇メートルで、太子堂古墳の所を左折、五〇メートルで新バイパスを横断して、一〇〇メートルほどで再び国道へ出る。国道と共に二〇〇メートル行くと右折して急な坂を上る道がある。お女郎坂と云われ、貫前神社を参詣して宮崎宿へ出る道もある。坂の上り口からすこしカーブして一ノ宮の町並を二五〇メートル行くと三差路に出る。直進すると丹生を経て妙楽への道で、ここを左折する。曲つて一〇〇メートルで国道と分かれて右折する。ゆるいカーブ



宮崎宿への坂



田吉田村の旧道



下仁田旧道の土蔵造り

の道を二〇〇メートル行くと坂になる。カーブする舗装道路から直進する未舗装の急坂の道があり、一〇〇メートルばかりであるが、旧状のままである。再び舗装道路に出て坂道をカーブしながら二五〇メートル進み、上りつめると、二〇〇メートル直線の道が続く。三差路を左折、すぐに右折すると宮崎宿の広い直線の道が宿尻まで三五〇メートル続く。

5 宮崎宿から下仁田町へ

宮崎宿の宿尻に鈴木家の土蔵造りの大きな家があり、その横を左折すると正面に同じ土蔵造りの一軒屋があり、カーブして回り込み家を右折しながら回り五〇メートルで四つ角に出る。左折して急坂のヘアピンカーブを二か所通り、平らな三差路へ出る。この間三〇〇メートルばかりである。三差路から四〇〇メートル山裾の道が直線とゆるいカーブで連続する。中程には山がせ

り出し岩はだを見せている。弁才天と道祖神のある四つ角へ出る。直進する道は再び山裾を進むが兩側に人家が立ち並び、舗装道であるが旧状が所々残っている。山の谷なりにカーブして六〇〇メートル行くと三差路がある。宇兵衛社から山裾の道はカーブの連続で古い家が立ち並び旧状が残っている。四〇〇メートル進むと山際の岩が崖のようになり、左手には池と庚申塔が一〇基ほど見られる。ここから四五〇メートルは依然として山裾の道で、山なりにカーブしている。道幅も旧道のままの所もあり、未舗装で旧道の保存状態がよい。人家がなくなり一〇〇メートルほどで三差路を左折する。ここから島田橋を渡り蚊沼川に沿って進む。五〇〇メートルほどの道は旧道そのまま、道幅二メートル弱の舗装道に出る。三差路には同名の島田橋があり、左折して二〇メートルで四つ角を右折する。右手は畑、左は田で、カーブしながら田や畑なりに進む五〇〇メートルで左折して中沢川を渡る。人家の間

の道をゆるくカーブして南蛇井駅へ通する直線の広い道へ出る。ここは三差路で、角に道しるべがあり、左折して二五〇メートル南蛇井駅の方へ進み、踏切の手前の吉田公民館の所を右折する。道幅もせまくなり、カーブの連続する道が続く。道祖神が二一三〇〇メートル毎にあり、旧状をとどめている場所も各所に見られる。一キロほど行くと最興寺の門前四つ角に出る。この四つ角から一〇〇メートルは人家もなく上信電鉄の線路を渡り二〇〇メートルで二十軒ほどの集落があり、クラック状に

曲った道を通きると直線の道が千平駅の手前まで三〇〇メートル続く。千平の駅から上信電鉄の線路に沿って二〇〇メートル、カーブしながら進み、三差路を右折して踏切を渡る。そこから五〇メートルほどで左へ少しカーブして旧道へ入るのであるが、ここから小坂峠を越えて下仁田町の伊勢山下の四つ角まで、山の中に数か所、一〇メートルたらずで旧道と思われる所があるのみで、旧道は完全に失われている。下仁田の伊勢山下の四つ角を少し食違つて斜めに町の中へ入る。南北に少しカーブしながら鑄川と南牧川が合流する所まで進む。この道は下仁田町の中心の大通りで、土蔵造りの店など見る事ができる。鑄川を渡る橋の手前で右折して河原へ下る。ここから川を渡り対岸を上って南牧への道へ出る。下仁田町の大通りと並行して裏通りになった古い道がある。伊勢山下四つ角から少し西牧寄りに行き西牧から左折して細い道に入る。水路が道に沿っており、ゆるくカーブしながら諏訪神社裏に出て鑄川を急坂で下り対岸の崖を斜めに上り、墓地の横を通り四つ角へ出る。ここを左折し坂を下り南牧道へ出る。

#### 6 下仁田町から藤井関所へ

小坂峠からの下仁田道は国道二五四号線の信号にでると西へ今の国道のところを通む。このあたりは南牧、信州への道の分岐点だったので古い道しるべがあったそうだが、今はなく大正七（一九一八）年の道しるべがひっそりと国道南側に建っている。ここから四〇〇メートル進むと、国道より分かれ西牧川に沿う旧道に入る。七〇〇メートルで国道を横切り山の上のふもとにのぞく旧道を北西に進む。やがて田中の集落に入り橋を渡ると梅沢峠越えを教える道しるべ大正十（一九二一）年がある。旧道は国道を横切り南からすぐ西へカーブし西牧川に沿って進む。やがて右折して国道にてだ道は西に一〇〇メートル進む。地藏尊や庚申塔などが立ち並びお後ろを通り、山の中腹をほぼ西に安尊寺集落まで進む。安尊寺の坂の手前で国道にて二〇〇メートルは



田中の旧道

ど進んで中井橋からまた右に入り山あいの道を町立小坂小学校の手前まで進む。国道にて、大里屋の少し手前を左斜めに下って小坂川に突きだした岩盤に橋をかけ渡つたようである。やがて国道にて少し行くところの十字路の信号にでる。右手向こう側の岸下に道しるべ二基が建っている。古い常夜燈兼道しるべ安永七（一七七八）年と明治四十四（一九一）年建立の道しるべが妙義方面、信州方面を教えている。もとは丁字路の中央部にあったもので道路改修で移動した。旧道はここより山際の道を一五〇メートル進み左折し国道を横切り西牧川に沿って一五〇メートルほど上り、右折し国道馬落橋にてまた山際の道を



小河原の旧道

西に進む。神戸建設事務所裏を通り沢にあたり左折して西牧川沿いの草の中を上流に向かう。右にカーブしながら落沢橋の入口手前約二〇〇メートルの大平集落の国道にでる。国道を四〇〇メートル進みバス停の先から左斜め

## II 道の確定



本宿の分岐点 右初鳥屋 左市野萱



清水沢の旧道

に下る。二メートル余りのじやり道を三〇〇メートル進むと天台宗水舟の山門前を通り、西牧川にかかる橋に渡るが、橋を渡らず右岸は通行不能なところもあるが七〇〇メートルで国道にでる。ここから国道を一〇〇メートル行き斜めに上り稲荷神社参道前から町立東野牧小学校の下を通り校庭の出口の坂から右上方に坂道を上っていく。旧道の面影を十分残しているじやり道を六〇〇メートルほどで国道にでる。二〇〇メートル余り進むと坂道バス停の先から旧道は左折し西牧川に沿って進む。二〇〇メートルほどで堀にでて、渡ると「下仁田町指定史跡 藤井関所跡 下仁田町教育委員会」と記された標識板が建っている。

### 7 藤井関所から和美峠・香坂峠へ

関所から初鳥屋・信州方面へは本宿を通るのが常であった。本宿へは堀に

沿った土手の道を山に向かい国道を横切ってホクドシとよばれる山際まで行き、山際を進み、やがて西牧川に向かって下がり川沿いに本宿の下宿中央ぐらゐまで進む。国道にでて本宿を西に進み、中宿古市商店の西の道を西牧川に下り川を渡って鎮神社右側の坂道から国道を横切り町立西中学校の右下の川沿いの道を通む。このあたりは畑も広がり眺めもよい。橋を渡り親福寺の東まで進む。寺の庭から県道下仁田・軽井沢線にでる。左折し、曲輪橋のたもと道しるべの手前を右折し土橋を渡り山の中腹を北西に進む。小出屋集落に入り、道は左に下り国道にでる。旧道はでまもなく富士橋の手前から川沿いに進む。右にまわって再び国道にでる。

これから先は矢川川に沿って県道に上りまた下りして滑岩に入ると川を渡って清水沢の百庚申前を通り、清水沢神明宮手前で川を渡り、県道の下方を川沿いに進む。矢川橋を渡らず大栗集落の下から瀬成集落にでたという。

さらに、町立西小学校の後ろを通り、芝ノ沢集落の裏側の崖の上を上流に向かい、人家のとぎれたところから左斜めに向かって県道に出る。下仁田道は現在の県道の右端を進み、やがて、芝ノ沢橋の手前から川を渡り、川沿いを上流に向かう。時丸からも川沿いを上り、初鳥屋集落の手前にでる。現在の道路より左方を通り、この集落の中央を流れる堀にあたってから右折し、堀沿いを進む今の道となる。亀屋の庭を通って堀を土橋で渡って八十八箇所霊場前から旧道を通り、今の県道にでて和美峠へ向かったという。

一方、香坂峠の道は、現在初鳥屋の中央にかかる橋より下方を渡り小平、萱倉・高立を経て香坂峠へ向かった。

### 8 藤井関所から市野萱集落へ

和美峠越えの街道から分岐して市野萱へ向かう道は、藤井の関所のところですぐに西牧川を渡る。川原からの坂道を上ると、民家の軒下をとおり、すぐに左に折れ、またすぐに右手にカーブして進む。そして、畑の中をゆるや



道 前 泉 館 船 荒



道 旧 の 瀬 三

かに蛇行しながら道は続いている。国道バイパスを横切った旧道は、細い道となつて諏訪神社の手前で左に曲がり、バイパスの左に出て谷川を渡り、再びバイパスと交差する。しばらくすると道は二手に分かれ、街道は右に進路をとる。旧国道に架かる横間橋の南側に出た旧道は、そのまま直進して、横間橋のやや上流で市野萱川を渡った。渡河地点の前は、草木が生い茂り判然としなない。

市野萱川の左岸に出た旧道は、そのまま川に沿って走り、目明石の天神様の下に出る。天神様のすぐ西に出た旧道は、国道を横切つて国道と川の間を進む。左手に松の木のある塚があり、しばらくして道は排水路工事のために消滅していた。このあと、道はやがて国道に合流して西に向かう。西光寺入口の石柱を右に見てしばらく行くと、物語山ハイキングコース入口の標識がある。旧道は国道から離れて、このコースをとり、市野萱川に架かる物語橋

の手前を、川沿いにそのまま直進していた。いまは深山温泉の旅館や、畑となつており、荒船館泉の建物の付近で、現国道といっしょになつていた。道路拡幅工事に伴つて移設された馬頭観音などを左手に見て、さらに進むと、国道は開通したばかりのバイパスにつながっている。バイパスと分かれて左に進み、数十メートルほどで旧国道とも分かれて、右手に入り野牧寺入口をすき、またすぐに旧国道に合する。吉野橋のやや上流で市野萱川を渡り、芦野平までは、旧国道のルートと全く一致する。芦野平のはずれにある、雨宝童子の碑の五〇メートルほど先で国道と分かれ川を渡った。三ツ瀬橋の下をくぐつて、ここから先は三ツ瀬集落の南側、川沿いに荒船神社の前まで旧道は続いていた。この付近は、当時の面影をよく残している。神社前で国道となつて、西牧南小学校の前では再び国道のルートからはなれて、左側の民家のところを一〇〇メートルほど走っていた。東平橋は、右へ大きくう回して沢を渡り、国道に戻つたあと、またしばらくの間、川沿いに道を進んでいた。

#### 9 市野萱集落から香坂通り日影新道へ

市野萱の手前には、「神津牧場ハイキングコース」という、大きな道路標識がある。このルートが、かつての香坂通り日影新道と呼ばれる旧街道と、ほぼ一致する。市野萱から屋敷までは、狭いながらも自動車の通行が可能である。屋敷は十数年前までは、村落の一キロほど手前までしか車が入れなかったが、その後、自動車道が村落の中心まで延長された。このときの新道は、急こう配の多い旧道を除け、う回しているのが両者は異なっている。旧道は小径として、今もたどることができるが、土砂に埋まつてしまった箇所も一部ある。

屋敷から神津牧場までは、快適なハイキングコースとなつている。牧場から峠までの間も、ほとんどが旧道と同一ルート上にハイキングコー

## II 道の確定



屋敷から神津牧場への道



市野萱から小屋場への道

スがある。途中、志賀越えへの道の分岐点には、台石に「右音坂、左志賀」と刻まれた馬頭観世音が建立されている。志賀越えの群馬県側旧道は、牧場の放牧地となって、その跡をたどることはできない。県境に建つ石仏が、かつてここが志賀越えの小径であったことを、教えてくれるのみである。

### 10 市野萱集落から内山峠へ

旧道は市野萱の集落を避けて、南側を内山峠に向かっていくが、旧街道は集落の中央で分岐し、屋敷川を渡って坂道を上り、人家のあるところを過ぎながら、旧道に下りていた。ここから小屋場までは、現在の旧道と全く一致している。

小屋場では、旧道は旧道とは異なり、民家の南側を通っていた。小屋場橋を渡ったところから、旧道のバイパスが完成しており、旧旧道の一部は廃道

となった。延長二、二五メートルの内山トンネルを含むこのバイパスは、昭和五十三年四月に完成したものである。旧街道は、このバイパスと旧旧道との分岐点付近で分かれて、左手に入り、内山峠に通じていた。昭和十七年に、峠越えの自動車道ができてからは、登山者や送電線の巡視員が利用するだけの道となり、さらにバイパスの工事で、土砂に埋まった場所もできていた。やがては消滅してしまふであろう。

### 11 下仁田町から磐戸宿へ

下仁田から分岐し南牧へ向かった道は牧口橋のたもとから西へ四軒目のところで県道下仁田・佐久線にぶつかる。

旧道はそこから約一五〇メートルほど先で左折し、川沿いを進み対岸の踏倉へわたったが、現在道は途中でなくなっている。

踏倉から青倉川をわたり、長源寺橋の信号の先で県道に合流する。

県道は大桑原の集落へ向かうが、旧道は集落の手前で左へ分岐し、約三〇〇メートルで再び県道に出る。そしてわずかの安井鉄工所をすぎたところで旧道は左に折れる。この細い道は約二〇〇メートル先でふたたび県道と合流するが、現在は途中からは通り道は、宮室に向かう。

大桑原をぬけた県道は、宮室に向かう。

宮室の集落手前で旧道は右に分かれ南牧川沿いに直進する。

やがて、県道に合流すると、すぐ県道を横切り山際の細い道へと進む。山際の小さな集落の中を回りこんだ旧道は、再び県道とぶつかる。そこは小さな堰があり、庚申塔などの石造物を見ることができ、旧道は県道を横切って川沿いに向かったが、現在は埋立てられてあとかたも見られない。

やがて、下仁田町、南牧川村の境界をすぎ南牧村小沢に入る。石灰工場を左に見ながら県道は大きく左にかへり、弁天橋を渡る。旧道は弁天橋の手前で左に折れ、すぐ右に折れて橋をわたり再び県道といっしょになる。



道しるべ(小沢地内)

川沿いの県道は次第に上り坂になり、のぼりつめると農協ガソリンスタンドが右に見える。旧道はガソリンスタンド内をぬけて、川沿いを通り再び県道に合流したが、そのあとは半分も残っていない。対岸には警戸小・中学校を見ることが出来る。

千原をぬけると警戸の宿に入る。自然休養村センターをはじめ商店もたらならび、にぎやかな町なみである。宿の中央には警戸神社も鎮座している。県道は宿のはずれで南牧川をわたる。警戸橋である。橋をわたらずに左に進むと松沢を経て多野郡上野村へぬけることができる。

## 12 警戸宿から雨沢集落へ

県道は警戸橋をわたり松平、笹平を通り稲荷橋へと向かう。旧道は稲荷橋の手前約一〇メートル手前(一本杉の地点)あたりで左にさがっていき、稲荷橋の下流で対岸にわたったと言われるが、現在そのほとんどは通行不能となっている。

稲荷橋をわたると大日向字門札になる。旧道は橋をわたりきった地点からすぐに右にさがる。この道もほとんど通行不能で旧状は残されていない。

県道はただらと上っていき、やがて右側に火の見やぐらを見るこができる。ここは旧道と県道が相寄った地点である。川をわたると安養寺である。橋や川原で毎年八月十四・十五日火とぼしの行事が行なわれる。旧道は更に



警戸から雨沢へ 雨沢のようす(雨沢)

川寄り到下っていき二〇〇メートルほど先で県道といっしょになる。しかし、旧道のほとんどはあと形もない。

雨沢に入ると家はたてこんでくる。大仁田川を渡る雨沢橋を中心に手前には大日向神社があり、先には南牧村役場、中央公民館などがある。橋の手前を左折しておりる細い道は、大仁田に向かう旧道である。中央公民館と県道をへだてた筋向かいに月形小学校、月形中学校が見える。

## 13 雨沢集落から砥沢宿へ

中央公民館の手前から左折する道が旧道である。県道より山側に寄った旧道は、公民館の建物のすぐ上を通りわけ細中を進むとやぶとなるが、やがて県道と出合う。

六車に至ると左側にガソリンスタンドがある。旧道はそのすぐ先を右にさがっていき、道はだんだんせまくなり、底瀬に至る橋の手前で県道といっしょになる。途中いくつかの馬頭観世音が見られる。

赤岩を経て尾沢の蟬橋に至る日影の道は、急坂や左右に曲りくねっていて、冬は難路である。

蟬の溪谷をわたると、庚申塔などの石造物が立ちならぶ旧道となる。旧道の橋は現在より下流にあったようで、明治三十六年には道路改修と共に上





砥沢の宿のようす



熊倉公民館わきをぬける旧道

流につくられ、現在はその中間に位置している。

南牧川を左に見ながら進むと、急に道が狭まった地点がある。ここが砥沢の関所あとと言われている所である。旧道はその先、道下の人麩神社の石段わきを通る。狭い道を進み砥沢の宿、浅川電機の前に出て県道といっしょになる。荒船酒造の先、佐々木実氏宅のところから左折しておりた旧道は関蔵堂橋の手前まで再び県道と重なり、すぐ右に分かれ、橋をわたり県道をぬうようにしてすぐ山城屋の南の細い道に入る。ここから田区公会堂までつづくが、ここは現在通行不能である。

#### 14 砥沢宿から余地峠へ

砥沢をぬけ羽沢に至る道は広くなったが、旧道は県道の北側上の山すそをまいていった。その一部は残っているが途中までしか通れない。羽沢の農協尾沢支所前をすぎ、すぐに左に折れ、川をわたり、尾沢小学校校門前に出る。

尾沢小学校前をすぎ、バス停上屋敷付近から旧道はふたたび左に折れる。

川をわたる。

合芳橋をわたりきつたところに旧道が出てくる。動態の集落は川をはさんで両側にならんでいるが、旧道は川の北側を通ったと思われる。

動態をすぎ熊倉までは県道を進む。熊倉公会堂の南を通る旧道がある。余地峠を越えるための最後の集落であり、馬頭観音他数多くの石造物が見られる。

熊倉の集落をすぎると、道は細くなり山道となる。

象ヶ滝の入口を右に見て進むと余地峠への一本道である。杉林の中を左右に上っていくと雑木林となり、やがて車の通行できるほどの林道に出る。

この林道を進み、左に細い道を折れるとやがて峠の頂上に着く。ここから先は長野県である。

### 二、下仁田道と地形

下仁田道は武州との国境神流川を渡ってから信州国境に至るまで、多岐にわたる地形を通過している。おおまかにみると藤岡の洪積台地、白石から千

平間の鑛川の河岸段丘面、千平・下仁田間の丘陵地、下仁田から和美峠・矢川峠・香坂峠・内山峠・余地峠の各峠間は西牧川、または南牧川の段丘面から氾濫原そして山地へと移行する。これを東部より考察する。

神流川の沖積低地は幅五〇〇メートルほどであるが、間もなく藤岡台地と呼ばれる洪積台地となる。この台地は神流川と鮎川によってつくられた隆起扇状地で、両河川の水系から流出した古生層三波川系変成岩の礫層から成り、上部をローム層がおい、その一部が粘土層である。この粘土層は古くは埴輪に焼かれ、今日は瓦となり藤岡市の大事な地場産業と

なっている。

上大塚の集落を過ぎると鮎川の沖積低地となる。鮎川の沖積低地は右岸のみに発達する。左岸は一〇メートルを越える崖で、すぐに鑛川の段丘面となる。二段の段丘面（一部三段）とその南側に二段の丘陵が断続的に千平まで続く。

鮎川にかかる多野橋を渡った所は白石段丘と名付けられた上位段丘面で、標高はほぼ二〇メートルほどである。南を見ると約八〇メートルの急崖の上に河岸段丘面の名残と思われる浸食面があり、ゴルフ場となっている。下仁田道は白石段丘面を斜めに横切り、二〇メートルほどの段丘崖を斜めに下り、下位段丘三つ木段丘面に出る。そこに小串の集落がある。

土合川を渡ると石神である。ここは下位段丘面の幅が二〇メートルほどしかなく、その下に最下位の段丘面が発達する。その段丘崖上の下位段丘面を西へ進む。南側には標高一四〇メートルほどの深沢段丘面が四〇メートルほどの崖上に見られる。

吉井町は多胡段丘崖下に発達した集落である。しかし、下位段丘面上にあるため井戸は一三メートルと深く共同井戸も多かった。しかし、段丘崖下のため地下水の心配はない。

吉井以西の上位段丘崖下には鎌倉道が通り、古い板碑や馬頭尊からその位置を知ることができる。下仁田道は権現堂から段丘崖を離れる。金井・福島はいずれも下位段丘面上に造られた宿である。下仁田道は雄川を避け、鑛川と合流したその下流で鑛川を渡り富岡段丘面に出る。そこに富岡の宿が造られた。

一筆公園は北に高田川、南に鑛川を望む上位段丘面で眺望が良い。その崖下を街道は通る。

鳥居前、一の宮は上位段丘崖下に作られた宿である。貫前神社へ参詣するには二〇メートルほど比高のある上位段丘面へ上って再び段丘崖を一〇



下位段丘から上位段丘崖を望む(吉井町長根宿南)



谷 合 集 落 (下仁田町大平)

メートルほど下る。段丘崖中程の平坦面に作られたためずらしい神社である。宮崎の宿は四〇メートル近い比高のある上位段丘面上に形成された集落であるが、これはその西に造られた山城・宮崎城の根小屋集落であり、富岡の母体となった古い集落である。下仁田道は比高四〇メートルの宮崎段丘を上ってまた下るといふ大変な努力を強いている。国道二五四号線は上位段丘を避けて南方へ八〇メートル迂回している。江戸時代の交通は歩くか馬の背に頼る交通であり、多少の高低はあろうとも二点間の最短コースを通ることが多い。一の宮・宮崎・神成丘陵南麓の村々がほぼ一直線になる。神成から千平までの街道は大方向山沿いの集落を通っている。千平から下仁田への道も、大きく曲流する鑛川沿いを避けて、両者を短距離で結ぶ二〇メートルの比高のある小坂坂(峠)を越えている。小坂坂北五〇〇メートルの地点に松沢峠がある。下小坂関口と梅沢の集落をほぼ送電線に沿って結ぶ道で、小坂峠

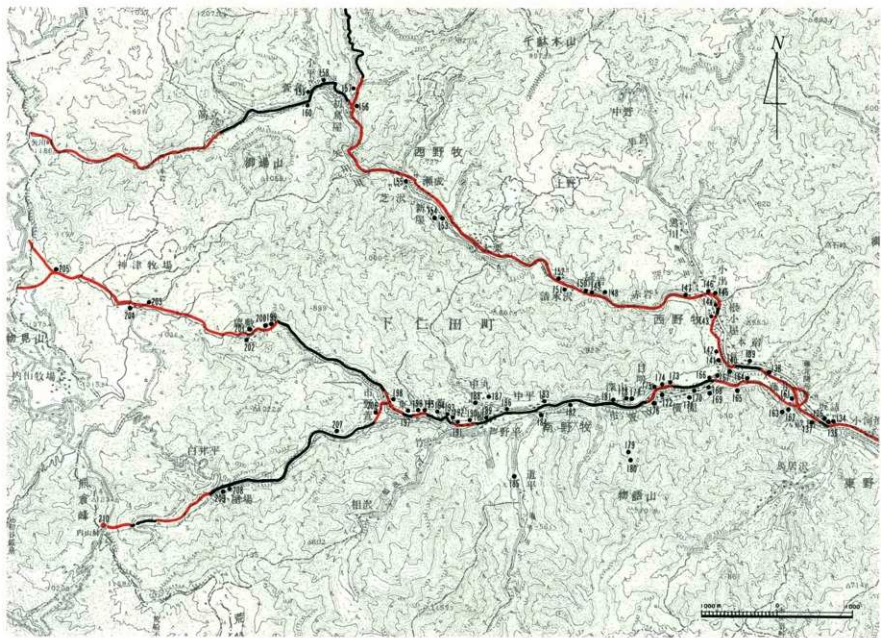




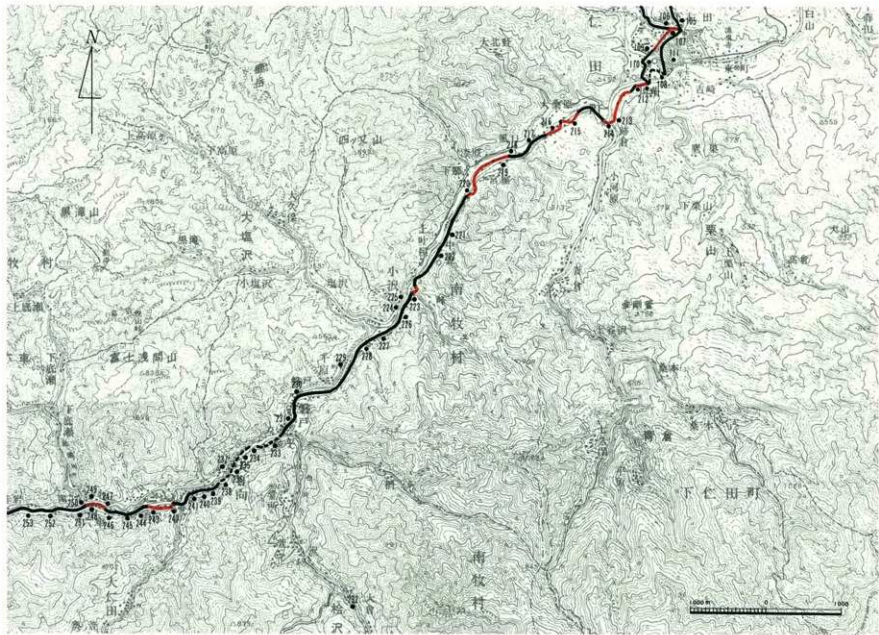


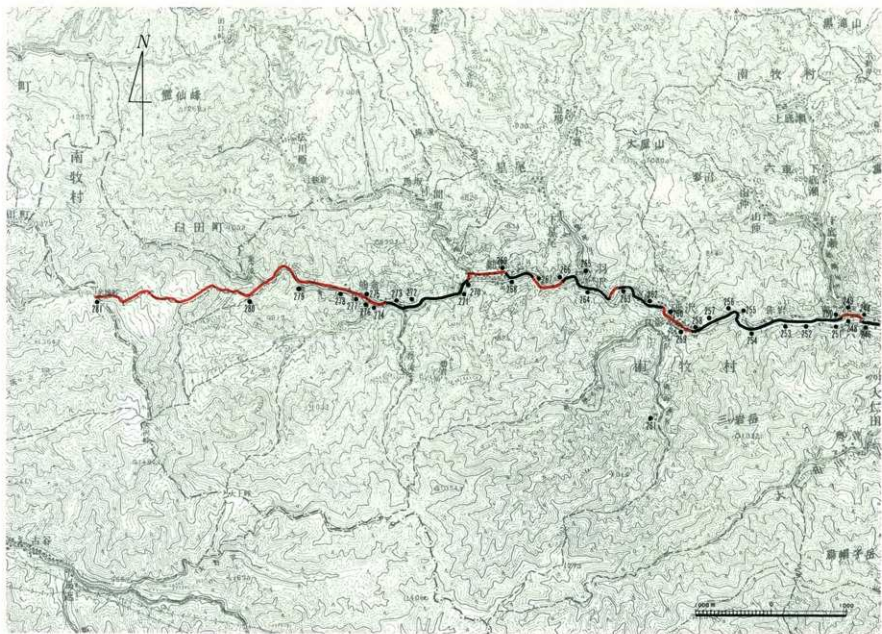












### III 下仁田道の現状と文化財

#### 一、神流川から藤岡町へ

下仁田道は神流川の河原の中から土手を横切り、土手下にある東京コンクリート工業株式会社の工場敷地の中央部を通り西に進む。この敷地内は今もこのあたりの農家の人々がヤカーや自転車で行っているのはっきりと道のあとが残っている。敷地をでると道はコンクリートの用水路の橋を渡り、旧道の二メートルほどのじり道が五〇メートル近く続く。ここは藤岡市緑町までのうちで旧道の面影を最もよく残しているところである。このあたりは左右に農家と麦畑、いちご栽培のハウスが見られる。

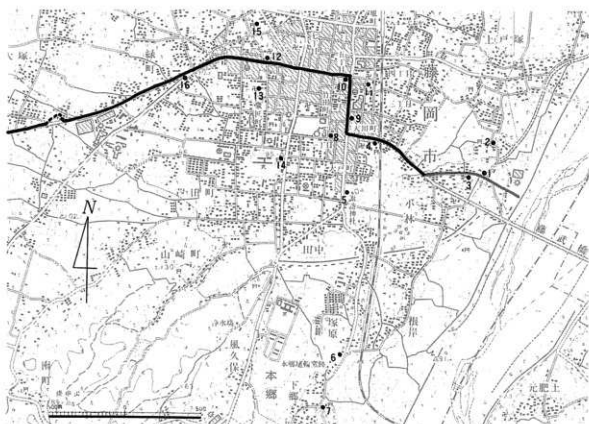
やがて、舗装道路になりやや北にカーブしながら藤岡コンクリート工業株式会社の前を通り、また用水路を渡ると右手に小林氏館遺跡の高台が目に入る。このわずかな高台が平安時代末期の遺跡といわれ、先程の二つの用水路は外堀、内堀の場だそうだが、わずかばかりの昔の面影を見ることができ、今は住宅地や畑、栗林になっている。この館跡から北三〇メートルのところに菅原道真公を祭神とする大塔寺天満宮があり、様式は「一間社流山権現破風造り」と称され江戸中期ごろ形成された新しい神社様式をとっている。ここは今でも学問、病気の神様として住民の厚い信仰を受けている。また、すぐ東の三本社に如意輪観音の二十二夜塔宝曆十一（一七六一）年が静かに建っている。白石が下に埋まっているが影りのきれいなものである。ここも安産の神様として今でも盛んにこの付近の人々がお参りしていると古老は話している。

た。

この館遺跡の前の道はやや左にカーブし、住宅地の中を西に進む。道幅は三メートルほどに広がり舗装になっている。一〇メートルほど進むと右に「蛇の神様」を祭った小さな社がある。このあたりは青大将が多く生息し、昔養蚕が盛んでまゆを食べるねずみ退治に蛇を使ったという。そのため蛇のいい地方や家から蛇を借りにお参りにくる人が多かったと古老は話していた。今でも年二回四月二十七日と八月二十七日に蛇の好きな卵を沢山供えてお祭りをしてい。また道のすぐ南に薬師堂があり、中世の板碑、宝篋印塔（応永年間建立）、地藏菩薩などがある。古くからこのあたりは開けていたことが察せられる。

やがて、西へ四〇〇メートルあまり進むと国道二五四号線に合流する。旧道はかなり広げられているが、この国道とはほぼ同一である。この道を北西に三〇〇メートル進むと西にカーブしながら国鉄八高線の路線を横切る。横切るとすぐ左手天川町公会堂西に一メートルほどの自然石の道祖神寛政九（一七九七）年を見ることができ、そのすぐ南に五〇センチほどの道しるべが建っている。よく見ると「第二十二区独立記念、昭和二十年四月」と書かれ、西向きに「右増玉泉二至、左新町鬼石通」、北向きに矢印で「群馬藤岡駅二至」と書かれ、おもしろいことに矢印で八高線群馬藤岡駅を教えている。またすぐ南に市指定史跡「雲符殿古墳」があり、八高線の敷設で一部切断されたものである。

線路から三〇〇メートル西に進むと一丁目のT字路にでる。このT字路東



藤岡一丁目の道しるべ  
(増信寺にある)天保3(1832)年建立

南角の田中喜太郎氏宅の一隅に昭和二十五年ごろまで立派な道しるべが建っていた。自動車交通の発達に伴い、今は近くの浄土宗増信寺境内に移され、寺入口左手にその勇姿を見ることができ(8)る。

全長約二メートル、加工された台石の上に角の石柱を据え、上部は防雨のため屋根を刻み付けた立派なものである。建立年は天保三(一八三二)年で、正面に「左江戸、本庄、八輪山」右側面に「右秩父、渡瀬、鬼石」と記し、左側面に「左妙義、榛名、高崎、吉井」と刻

### III 下仁田道の現状と文化財



藤岡の古い家並 高井商店



藤岡の町並 四丁目十字路口から吉井方面への道

まれ、藤岡を訪れる人々に親切に行先がわかるようにしてある。この道しるべの裏面に漢文で「行人路を取りて岐に遇うや旁えれを疑う。而して街路人馬錯雑の際に於て動もすれば転角不用意誤行敢里にして帰る者多し。郷人といえども亦一々審問に指南する違あらず。故に相識りて義碑を建て、迷途莫からしめんと欲す」と建立の由来を記しているのも面白い。また、増信寺には市指定重要文化財の「応永の塔」応永十一（一四〇四）年建立は特筆すべきものである。きれいな仏像彫刻の宝篋印塔には目をひかされる。この丁字路から道は右へ折れ、真直ぐに北に国道を進む。途中一五〇メートルほど行くと、右手の亀屋染物店庭には安中の漢詩人遠藤鶴池句碑（のどかさや松にも声やありながら）が建っているが、建立年は残念ながらわからないが江戸末期らしい。

さらに、道を北に進むと左手に藤岡地酒蔵（いわお）の造り酒屋高井商店



藤岡四丁目十字路口の道標（里程標）

店など一〇〇軒近く知られている。

さらに、二〇〇メートル進むと四丁目十字路口にでる。左手の角、交番のわ

きに高さ三メートルの立派な里程標大正四（一九一五）年十一月十日御大典記念建立が建っている。南向きに「自藤岡町、至前橋市五里二十四町、至東京市二十五里」、北向きに「自藤岡町、至各町村、神流村十八町、新町一里四町、小野村一里、八幡村一里十四町、美土里村二十四町、平井村一里二町、美九里村一里、鬼石町三里、三波川村五里、吉井町一里十八町、多胡村三里十二町、入野村一里三十二町、日野村四里、美原村五里三町、神川村八里十九町、中里村十一里十八町、上野村十三里二十一町」とあり、当時ここは藤岡町の中心で、ここから親切に前橋、東京、近くの一七か町村までの距離を教えていた。

この十字路から東へ一五〇メートルほどのところに浄土宗成道寺の墓地があり、ここには江戸末期の一流浮世絵師として名を馳せた菊川英山の墓がある。この墓は昭和十三年四月に郷土史家故本多夏彦氏が発見したもので、当時中央の浮世絵研究者間では大変なニュースになったといわれている。菊川英山は天明七（一七八七）年江戸市が谷に生まれ、名は俊信、通称方五郎、

の立派な母屋格子窓や白壁の蔵を見ることが出来る。

この商店は十一屋と呼ばれ、今の戸主高井作右衛門氏の祖先は近江滋賀県の出身である。

藤岡は場所もよかつたせいもあって近江商人が多く定住している。十一屋の他に丸手、井沢酒

英山と号した。江戸麹町に住んで北斎流から歌麿風に似せて板刻の美人画を多く描いた。娘トヨが藤岡の呉服屋峯家(家系断絶)に嫁いだので、晩年娘を頼って移住し、藤岡で慶応三(一八六七)年数え八十一歳で没した。墓石は、ごく普通のもので、正面に「歿訃昌道英翁博士」、側面に「慶応三卯年六月十六日卒 行年八十一 江戸産 俗称菊川万五郎 号英山」と刻まれている。

英山の藤岡での主な作品をあげてみると、

「神風日記のさし絵」文久三(一八六二)年二月完 武井修氏所有

「観桜舟遊の図」市指定重要文化財 島田医院所有

「源頼朝放生会の図」諏訪神社絵馬

「藤岡又六の図」

「祭礼絵巻」 漢岡神社所有

この墓地から南へ二〇〇メートルの武井修氏宅には江戸末期高名な歌人新井玉世の伊勢参宮を書いた「神風日記」(九冊)が大切に保存されている。

里程標のところまで来た道は左へ折れ真つすぐ西へ進む。商店街の中を五〇〇メートルほど進むと天台宗龍源寺の参道にでる。この寺は三夜標ともいわれ、六月二十三日の祭りには今でもこの長い参道は夜店でよくにぎわっている。また毎年



藤岡緑町にある道しるべ

一月二十三日にはだるま市も開かれていて、

さらに道を二〇〇メートル進

むと右手に浄土宗一行寺入口にでる。寺に向か

って左手に常夜燈一基享和三(一八〇三)年を見ることができ、正面に「遠州秋葉大権現」と刻まれ、火伏せの神を祭っており、裏面に「信州高遠住石工田中惣八」とある。ここから南東方向一キロの地にある諏訪神社入口にも一対の三メートル余りの立派な常夜燈天保二(一八三一)年建立も高遠石工平沢英來の作である。この道すじではこれだけ確認できなかったが、名前まで入れているのが珍しいので実際には多くの作品を残しているであろう。また、一行寺墓地には酒のみの歌碑「南無阿弥陀かさのようなさかづきでとっくりとっくりとのむが願楽(近世の建碑らしい)が建っている。

ここから南西一キロにある曹洞宗良信寺には村上鬼城句碑「うら枯や御門さしたる良信寺」昭和三十年建立や、彫りのしつかりして大変きれいな如意輪観音の二十二夜塔文化五(一八〇八)年などがあ

この良信寺から南東五〇〇メートルにある河田城跡には算聖之碑(関孝和の碑)昭和三(一九一〇)年建立が建っている。高さ六メートルほどの大変大きな碑で藤岡に生まれた関孝和を記念したものである。

道は一行寺入口の前から今の国道三五四号線を西へ行くことやが緑町に入り、六〇〇メートルほど進むと日野方面への分岐点にでる。道は真直ぐ今の国道のところを進むが、分岐点には電柱に隠れて道しるべが建っている。高さ約一メートルの四角柱頂部角錐型で、文化元(一八〇四)年建立とわかる。

「右一ノ宮五里半、妙義八里、吉井二里半、富岡五里、下仁田八里」もう一面に「左平井、金井、日野道」とあり、文字もお家流であざやかに書かれている。

道は西南西の方向に藤岡市緑町から上大塚へと通んで行く。

1 神流川から藤岡町へ		No	名 称	年 号	備 考
1	小林氏館道跡			平安末期	



たら良いのだろうか。

上大塚の信号を北へ五〇〇メートル行き西へ入った村のはずれに、中大塚縄文時代敷石遺構が保存され土地所有者の町田松太郎さんが管理している。互の原料の粘土を採取している時に発見したという。この遺構は扁平丸味のある川原石を全面に敷きつめ、その形は六角形に近い。縄文時代中期末の祭祀遺構と考証され県指定史跡となっている。

上大塚の信号機より西へ一〇〇メートル行った所に火の跡がある。旧道はこの火の跡と農産物臨時検査所の間を左へ曲がり一〇メートル、そこから右へ五〇メートルで国道に合している。この新道は昭和九年につくられた。上大塚の集落から出て間もなく旧道は右側に分かれて行く。ここから約三〇〇メートルの間旧道は国道の北方を迂回していた。その東半分は現在も水田の中に残っている。その道幅は三メートルもない。西半分は砂利採取場の砂利の下に消えている。このあたりは鮎川の沖積低地であり、鮎川を渡ったのは現在の多野橋よりやや下流である。昔の多野橋はもつと低い橋であったので、橋の近くは急坂で荷車を押し上げるのが大変であったという。

このあたりは白石段丘と呼ばれる鑛川の上位段丘面であり、白石古墳群が散在する。鮎川から四〇〇メートルの所に信号機のある十字路があり、右角



上大塚の道祖神

には農協のガソリ  
ンスタンドがある。  
ここを北へ行く道  
は鎌倉街道で約二  
キロほど北に、国  
指定史跡の七興山  
古墳がある。全長  
一四五メートルの  
荘大俊美な前方後



上大塚地内の田道(右)と新道(左)



白石地内の田道と飯玉神社の御神燈

円墳で二重の堀をめぐらしている。七興山古墳の北方に、県指定史跡の伊勢塚古墳がある。直経二四メートルの円墳で、両袖型の棒状の緑泥片岩と珪岩を積んだ驚異的な石室を有している。

白石十字路を逆に南へ行き緑塗一四四番地斎藤家の墓地に藤岡市指定重要文化財の子部供養塔がある。天明三年の浅間山大爆發の模様とその被害状況を刻んだ異色の供養塔であり貴重である。

白石十字路から国道を北西へ一五〇メートルほど進んだ所で、旧道は九〇度近く左へ折れる。その旧道沿いに家並が続く。樫の生垣が続き舗装はしてあるが、道幅は三メートルほどで昔の面影を残す。二〇〇メートルほど進むと、右側に葺き替えられたばかりの銅葺きの鳥居と、慶応二(一八六六)年に建てられた高さ二メートルをこえる御神燈が一対建てられている。ここが北方にある飯玉神社参道の起点である。旧道は鳥居から五〇メートルほど先



### III 下仁田道の現状と文化財

で右へ曲がり、右側へゆるやかなカーブを描きながら三〇〇メートル先で国道に合する。この間も道幅は三メートル足らずで昔のままである。このこのバイパスも昭和九年に完成している。

国道に会した旧道は間もなく左へ分かれる。ほぼ二〇〇メートルの間、国道の約一〇メートル南側を並行して走り国道に合する。この旧道は昭和四十年まで利用されていた。道幅は五メートルほどに広げられているが砂利道である。両方を見ても七〇メートルほどの段丘崖の上に古い段丘面が連なり、そこはゴルフ場となっている。

吉井町郷土をすぎ、しばらくして段丘崖を斜めに下りて行く。段丘崖を下りきる手前で旧道は右下へ下って行く。水田の中を蛇行する道で、有効幅員は二メートルほどで昔のままである。この道は昭和九年には県道として使用されていた。やがて丁字路となる。その道は富岡道ともいわれ、新町・本庄の河岸と吉井・富岡を結ぶ街道であった。その丁字路の西角に緑泥片岩の馬頭尊がある。その名も「狐旋馬頭尊」である。明治四十(一九〇七)年三月に入野村有志によって建てられたもので日露戦争帰還を併せ祝ったものであろう。丁字路を西へ八〇メートルほど行くと信号機があり、ここで国道と合流する。この新道は昭和二十七年の地形図に初めて載っている。

小串の集落をぬけると、やがて土合川にさしかかる。橋の手前五〇メートルほどの所、農協の北側の埋立て地を北へ六〇メートル行つた所に古い橋の橋脚だけが石積で残っている。

その橋脚の上を新潟から東京へ送られる天然ガスのパイプラインが不似合に通っている。土合川左岸には段丘の礫層が露出している。土合川から西へ進む旧道は幅二メートルほどで昔のままである。忠霊塔の南をぬけると段丘崖の上に出る。南側の土手の上に木造の金毘羅宮があり、昭和三十六年まで地元のひとつが祭っていたといふ<sup>25)</sup>。二間四方ほどの境内だが、そこには「庚申塔」「若八幡宮」「狼田彦大神」、地藏様、石祠などがあり、くすれかけた御神

燈には万延二(一八六一)年三月の文字が刻まれている。ここから昔ながらの道を西へ約二〇〇メートルで国道に合する。この新道は昭和初期に作られたと地元のひとつが言っているが、昭和四年の地図には載っている。その少し前であらうか。

旧道は石神の信号機の東一〇メートルの所で国道を横切る。ここは現在家が立ち並び通行不能である。信号機南一〇メートルの地点を西へ進み、約一〇〇メートル先で国道に合するが、この間は農家の庭のように利用されながらも残っている。

石神の集落の南の深沢段丘西にある入野中学校校庭に県指定史跡入野道跡がある<sup>26)</sup>。古墳文化期(六世紀半ばから七世紀半ば)の集落跡で、昭和二十六年中学校校庭建設の折に発見された。四〇余戸の大集落跡でその内一七基が発掘調査された。



金 毘 羅 宮 (石神地内)



石 神 地 内 の 旧 道

県指定史跡馬庭念流道場<sup>(20)</sup>へ行くのには土合川西詰め<sup>(21)</sup>の信号を北へ行くのが便利である。

石神の集落を西へぬけると水田が広がる。やがて信号機がある道路に多胡石や灯籠などが置かれ、石の町吉井に入ったことを教える。この信号を北へ行くと国指定史跡多胡碑のある御門の集落へ行けるが、車で来たひとは道幅が狭いので吉井の街を北上したほうが良い。この信号機東五〇メートルの地点から旧道はY字型に右へ分かれるが、その道路の上にはまばらな二軒家が建てられ通行不能である。信号機北約一〇メートルの地点を西へ国道とは平行して進む。道幅は四メートルほどでコンクリート舗装されている。やがて矢田川にさしかかるが橋はない。昔は土橋が架かっていたというが、今はガスパイプラインが真中を通っている。

矢田川を越えると矢田の集落である。鎌倉道も矢田を南から北へ通っていた。吉井町の母体は矢田であり、矢田は古くからの集落である。矢田は段丘崖下<sup>(22)</sup>にあり、下位段丘面としては水が得やすかったためである。

矢田川から二〇〇メートルほどで旧道は国道を横切るが、その間に庚申供養塔、念仏供養塔、道祖神が各一基ある。供養塔は二基とも砂岩多胡石で造られている。一つは高さ一六〇センチほどで梵字五つと華造立庚申供養と記



矢田の道祖神

され、下には三猿が浮き彫りされた立派なもので元禄二二(一六八八)年建立のものである。もう一基は高さ一メートルほどの四角柱で、奉造立念仏供養の文字が見

られるが、建立年代は記されていない。風化の進み具合からかなり古いものと思われる。国道と旧道との三差路に建てられた道祖神は、小型の文字塔で、安永五(一七七六)年十月の建立である。この道祖神の所で昭和三十三年までどんと焼きが行なわれていたという。祭が絶えて久しい。信号機南一〇メートル、多比良への道端に巳待塔と庚申塔がある。巳待塔は安永元(一七七二)年、庚申塔は享和元(一八〇一)年建立で何故か庚申の翌年である。この道が多比良から平井を通過して見玉へぬける鎌倉道である。旧道は巳待塔のわきから西へ進み、一〇〇メートルほど先の西谷川の手前で国道に合している。この旧道は昭和四年の地図では県道として利用されていた。昭和九年の大演習の時に天皇陛下が富岡に行幸されたが、この時に各地の道路整備がなされたが、この新道もこの時に作られたものであろう。

多胡段丘の段丘崖下を左へ回り込むと吉井の街並がはじまる。その最初の信号を右へ曲がると多胡の碑<sup>(23)</sup>へ行ける。

多胡碑は和銅四(七一二年)に多胡郡が設置されたことを示す記念の碑である。多胡郡は外来人を主体として新設された関東地方では最初の郡である。薬研形の美しい文字は江戸時代から鑑賞され、書の手本として拓本も高価で売られていたようである。碑文の読み方は多くの学者で論じられて来た。

吉井の集落は天正十八(一五九〇)年、矢田郷を分郷して生まれた。菅沼定利が吉井に對せられ、付近一帯が塚原であった所に新規に町割をした。そして四八軒が矢田宿より移り住んだのである。元和元(一六一五)年頃には早くも二九六軒となっていた。吉井城は菅沼忠政が加納に移封後慶長十五(一六〇一)年に廃止された。

吉井藩は一七世紀後半一萬石として置かれ、延宝三(一六七四)年松平信平がここに對され吉井氏が始まり吉井信謹が明治二(一八四九)年封を上げた。陣屋の位置は上信電鉄の線路より南、小学校校庭の中央から東方、中央公民館の一つ北の通りまでの旧陣と呼ばれている地域である。陣屋内にあった

### III 下仁田道の現状と文化財



吉井藩陣屋内の旧宅

武士の居宅長屋が一種駅の南東に残っている。草葺屋根にカラートタンの覆いを掛けているが、当時の様子をしのばせてくれる。

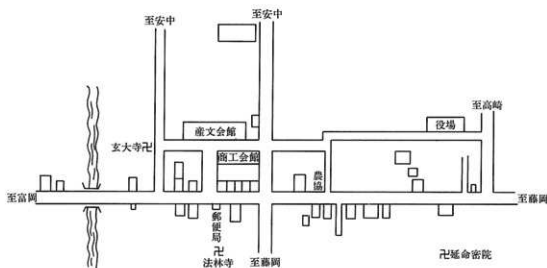
吉井宿は現在の国道沿いで、町割が高されていたのは大沢川から、県道高崎・吉井線信号の一つ東の路地までの約七〇〇メートルである。この両側には現在約二二〇戸の家が立ち並んでおり、銀行や農協等が何戸分かの敷地を有している。江戸時代より表通りの戸数は減少している。

つ頃のか不明であるが、書上帳より抜き書きしてみる。

家数は百三拾貳軒で、男二八七人、女二四五人と男が多い。馬九疋、牛無し。出家人二人、山伏二人、僧家男八六人、女七四人、男合わせて三七七人、女合わせて三二四人、合計七〇一人である。男女農開稼、見世、小売、こま物、煙草売買、酒造並に茶屋、旅籠屋等渡世仕候

一、月六霜市日二八の近在より絹大織額持出し売仕候  
一、旅籠屋四軒茶屋七軒、飯盛女等一切無之何れも平旅人宿に御座候  
とある。静かな田舎町であったようである。

明治三十七年に発行された群馬県営業便覧を見ると、煙草製造業者が四戸、仲買業者が一戸、次いで糸繭商、呉服太物の店が多く、江戸時代より明治時代まで周辺の畠地で栽培される良質なたばこと、農家によって作られる繭、絹織物の取引が吉井宿の機能の一つであった。



吉井町 昔の面影を残す家屋

明治に東京葉煙草専売局吉井出張所が出来た。その跡地は富岡高校吉井分校となり、現在は中央公民館や産業文化会館、郷土資料館、体育館などに生まれ変わっている。

吉井宿は小輪・七日市二藩の人馬、貨物の継立をしていたので、宿または駅といわれていた。住民は町人と言われ、前に記したように兼業農家が主体であったが、専業を営み、藩中はもちろん付近村落に対し、日用品を供給し、宿内には間屋、御用宿、飛脚屋などの世帯の業務に従うものがあった。

吉井宿の発展のためには絹市が大きな役割を果たしてきた。しかし、高崎、富岡、藤岡

三市の結東により賣え、何度かの訴え、陳情のいかにも絹市を再興することはできなかつた。現在も糸織問屋もあるが、その数は少ない。

江戸時代吉井の特産物に「火打がね」があった。関東の人々が善光寺参りをする時に吉井を通り、「吉井鍔」の名前は高まったが、信越線の開通により賣え、マツチの発明により昔話となった。

下仁田道として人の流れは本庄―藤岡―吉井であったが、物資の流れは舟運が便利で河岸出しが多かつた。

吉井から河岸出しの荷物は藤岡継立の定めであったが、近道である裏街道を通じて河岸までの付通しをする事が多くなつた。このため藤岡は、吉井宿や、本庄の三友や新井河岸を相手とつて享保十四（一七二九）年訴えをおこした。この時は両者の中間を取つた形で和談になつたが、この約束が守られなかつたため、再び争いとなり、寛政六（一七九四）年付通しを一切認めない裁定が下つている。しかし、これも守られず十年後文化二（一八〇五）年三度争いがおきている。継立をすると荷いたみができる事や時間がかかることなどから各宿間で談合により付通しがかかり一般化していったようである。

戦後吉井町で急速に発展したものに石村業がある。戦前から天引石を砥石や礎石として利用してきたが、戦後、燈籠や建材、多胡タイルとして需要



吉井町の古い倉

が伸び、ついに多胡石として全国に知られるようになった。昭和四十年代をピークとして今は沈静しているが、なお二一の事業所で三二七人の人々が働き二八億



道標を兼ねる馬頭尊と庚申塔（吉井町資料館入口）



吉井藩陣屋表門

円の売上があり、それは吉井町全売上の約二割を占めている。

吉井の街並もいよいよ変わっていく。幕末外国貿易を行い横浜に店を出し、すでに繁栄していた根岸家の立ち並ぶ蔵とうだつても昭和三十九年に取りこわされ、ガソリンスタンドに生れ変わった。吉井町には蔵造りの家、および蔵が多い。表は現代化しても中は昔のままの蔵造りである。一見古そうな家も尋ねてみると昭和初期で江戸までさかのぼれる家は数少ない。また極く古い家は空屋となつている。上町の菓子製造業であつた福島さんの家の蔵造りは立派であり明治初期か、幕末までさかのぼれるであろう。現在の郵便局の相向いの角から二軒目の布川化粧品店は、明治初期は河内屋の屋号を持った呉服売物商で、りっぱな蔵造りである。うち現在の傷が残ることから少なくとも明治初期までさかのぼれよう。この家も現在空屋である。農協前の蔵造りの家も古い空屋となり取り壊されようとしている。竹屋呉服店の蔵造りも古そうであるが、どこまでさかのぼれるものであろうか。

III 下仁田道の現状と文化財

No	名称	年号	備考
17	道祖神	寛政一〇年	
18	供養塔	文化四年	
19	庚申	万延元年	緑泥片岩
20	首無し地蔵	不詳	
21	百堂巡礼供養塔	享保六年	
22	調談般若塔		
23	中大塚縄文時代敷石道		県指定史跡
24	七輿山古墳	六世紀	国指定史跡
25	伊勢塚古墳		県指定史跡
26	千部供養塔	寛政四年	藤岡市指定重要文化財

道路の整備、交通機関の発達によりかつてのこの地域の核心都市として栄えていた吉井が、高崎のベッドタウン化しつつある現在、街並は空屋が目立ち衰えを感じるが、それ故に最開発されていない。現在昔の姿を良くとどめていると言える。

吉井町郷土資料館は鉄筋コンクリート二階建てで資料も整い県下などの市にも見られない充実した資料館である。この資料館の入口のわきに、二つの道標が置かれている。一つは吉井町の川上医院前にあったもので、表に「庚申塔」左右には「左ちちぶ道」、「右みやうき」の宮道」と二行に記されている。もう一つは吉井南東、多比良の向平の三差路にあったもので、表に「馬頭観世音」とその左右に「右ちちぶ道」「左ひらい道」右側の面に「西吉井道明和九年三月」左側の面に「東秩父道」と記されている。資料館前には旧吉井藩陣屋の表門が復元されて威容を誇っている。

大沢川近くの玄大寺の厄除観世音の境内には石造物が多い。庚申塔、巳待塔、二十二夜と民間信仰に関するものが主である。この中に上町子供と記された庚申塔はめずらしい。子供中心の庚申塔があったのだろうか。

2 藤岡町から吉井宿へ

No	名称	年号	備考
27	入野道跡	万延二年	県指定史跡
28	馬延念流道場	不詳	県指定史跡
29	庚申供養	元禄二年	
30	道祖神	安永五年	
31	巳待塔	安永元年	
32	多胡碑	享和元年	
33	宝篋印供養塔	和銅四年	国指定史跡
	南無阿弥陀仏	嘉永四年	他に書面金剛像、大乗妙典、定礎
	御神燈	天明八年	供養塔、二十二夜像(年次不詳)
	庚申塔	天明四年	
	庚申供養	延享元年	
	庚申塔上町小供	元文五年	
	春造立庚申供養塔	寛政二年	
	庚申塔	寛政二年	他に年次不詳
	二十二夜像一基	寛政二年	
	厄除観世音菩薩	文政九年	
	吉井藩陣屋表門	明和八年	
	庚申塔	復元	道しるべ
	馬頭観世音	不詳	道しるべ
		明和九年	

三、吉井宿から富岡(鏡川)へ

大沢川を渡ると長根である。

下長根の新井医院入口には二つの石造物がある。五六年三月、道路の拡幅



下長根村の仏像と御神燈

のため少し移動したが、一つは砂岩でできた首の無い仏像である。摩滅が激しいが数百年を経て、脇に立つ多胡石の「御神燈」は文政元（一八二〇）年に建て

られたもので、側面に「諸国眼病人中」と記され、眼病を治す仏であろうか。灯袋には白い半紙が張られており、現在も参詣するひとがあるようである。

ここから三〇〇メートルほど西へ行くと、左へ細い道が二〇〇メートルほどの孤を描いて再び国道に合っている。この細い道が旧道で昭和四〇年頃直線的な新道が出来使われなくなった。南側には神保段丘がせまっている。この段丘面に辛料神社がある。辛料神社は轉牧郷の焼化人によって祭られた神社で、大室年間（七〇一―七〇三）に創建されたといわれ、今も養蚕・織物の神として人々の尊敬を集めている。

長根宿の成立は早く、その南に三五メートルほどの段丘崖上に築かれた長根城の根小屋集落として戦国時代発生した。今日なおお宿の名で呼ばれその歴史を物語っている。城跡は上野場の集落の一部となっている。

この長根宿以西の山沿いには、鎌倉道が通っている。下平の北、新田の北、大類、笹、小川、二日市、上田縣、原田縣、井戸沢、高瀬と西進する。この鎌倉街道沿いには馬頭尊、道祖神、庚神塔、板碑などの石造物が多い。その数は下仁田道の数倍の数である。江戸期のもも鎌倉道に多く、両道が共に利用されて来た証であろう。この石造物の中で特筆すべきものは小川にある板碑である。碑身の高さは三・五メートルの緑泥片岩で明治十四年まで鎌倉



長根宿の旧道

街道の石橋として利用されていたため摩滅が激しいが、仁治三（二二四二）年の建立したもので板碑として県内第二の古さをもっている。

長根宿からやがて権現堂に至る。権現堂の旧道は幅四メートル程の道が良く残っている。昭和九年新道が出来て、それ以来静かな通りとなっている。

この集落の道祖神は北の村はずれにある。段丘上にあるこの集落の地下水は深く共同井戸が多かった。それも天引川のもれ水にたよっており、天引川上流に堰が出来て洗水量が減ってから水不足になやんでいたが、水道の完備により水不足は解消された。権現堂は、江戸時代に旅籠のあった集落である。

天引川を渡るが金井の集落に出る。金井の集落は明治六（一八七六）年大火にあい、家々はそのあとに作られたものである。しかし農村集落の金井は古さを残している。

金井の信号機を南へ一八〇〇メートル行つた右側に天引中宿の笠塔婆があ



天引中宿笠塔婆

### III 下仁田道の現状と文化財

る。笠塔婆三基と板碑一基である。いずれも正安四(一三〇二)年に造られた古いものである。

ここから南西へ五〇メートル、坂を上りつめた所倉内地内に正安元(一二九九)年の笠塔婆がある。笠塔婆は塔身上に笠をのせた塔婆で、碑身の正面に種子あるいは仏像を刻み、これを主尊として礼拝の対象とする点板碑と同じである。

金井の集落の北のはずれに百庚申がある。安政四(一八五七)年と新しいが、梵字十六字が刻まれているめずらしいものである。高さは礎石まで入れると二・五メートルに及ぶ大きなものでまわりに十九基の小さな庚申塔がまつられている。

金井の北約一キロの造石の村の東のはずれに地藏堂と釈迦堂がある。ここが重要文化財に指定された造石法華供養遺跡である。この地藏堂には凝灰岩の組石造りの半伽像があり、元和九(一六二二)年の銘が像の背中にある。境内には同期の玉塔もある。地元のはとは「べべ地藏」と愛称し、四月二十三日には春祭りが行なわれ、近郷の人々が集まり露店商も出てにぎわう。釈迦堂では五月八日に月おくれの甘茶会を造石の婦人総出で行なう。

金井・福島間の水田は条里制遺構がよく残っている。村落名には残っていないが、地積台帳には二反田から八反田までの地名が残っている。上信電鉄からも整然とした区画を見ることができ。

福島宿は甘栗谷の入口にあり、また下仁田道の宿として小規模ながらその機能を果たしてきた。問屋の屋号も二軒あり、伝馬や一般荷物の継立が行なわれていた。小沢村御用紙江戸送り駄賃帳には「ノミヤ」福島一六文、福島一吉井一四文と記され継立が行なわれていたことがわかる。この街道で重要な荷物である石炭、紙石も継立が行なわれていた。しかし荷物によっては一の幣より付通して吉井へ運ばれるものもあったようである。この時口銭あ

いは庭銭として、物によって二文あるいは二四文と銭を取っていたようである。

福島宿の一つの特色は鑛川の水運にある。倉賀野河岸は良く知られているが、鑛川にも水運が行なわれていた明和九(一七七二)年より下仁田と中間の福島そして森新田三か所に河岸をもうけて通船しあるいは木および竹の筏を流したのである。

天明五(一七八五)年の文書に安永三(一七七四)年に下仁田、福島、森新田三か所に川岸場を取立、船数艘で安永三(一七七四)年より通船を始めた所、安永四(一七七五)年二月下仁田村焼失の節船多数が焼失したのでしばらく通船を止める。しかし、下仁田村と福島町の両川岸はこれまでの通り船を通すとある。

寛政九(一七九七)年には下仁田、福島河岸筏竹木貢目御政の文書がある。安政五(一八五六)年の下仁田河岸筏改石銭取立帳には木筏が南蛇井から森新田まで大量に流されたことが記されている。竹筏はごく少ない。

安政五(一八五八)年の文書に嘉永三(一八五〇)年より通船していたが安政三(一八五六)年八月の洪水で川瀬が変り通船路がうまってしまったので多胡郡石神、小串の川縁りを借りて出稼していた所、去年(一八五七)の出水で船着場が悪くなったので多胡郡中島村地区を借りて当分出稼をしたという福島河岸営業移転願いが出ている。明治になっても通船はあったが、少い水量と洪水との戦いで大変な水運であったと言える。

福島宿東覚院には文化五(一八〇八)年の千部供養塔と文久三(一八六三)年の馬頭観世音が有る。福島宿の西端には火防の秋葉山の文字の入った水代常夜燈と馬頭観世音と庚申塔六基がある。常夜燈は高さ二メートルを超える大きいもので多胡石で作られている。灯袋には電球がつけられており電気の時代になっても利用されていた。

笹森橋荷境内には道祖神三基が集められている。いずれも文字塔である。

笹森古墳は長さ一〇二メートルの前方後円墳でその上に社がある。

福島宿の南二、五キロの地点に小幡城（陣屋）とその城下町がある。小幡の陣屋は雄川の蛇行をうまく利用して作られておりその庭園（楽山園）は前の丘陵を借景として、城は寛永十九（一六四二）



他燈夜常防火 西端宿島福

十九（一六四二）年完成した。城下町小幡は街並の道路の中央に二キロ上流より取り入れた雄川の清水をとうとうと流し県下



水路と並ぶ古い家小幡町

にはその例を見ない。住民は今日なお日常の洗いに利用し、大切に管理保全している。また街全体が昔のまま保存されている。特に梅沢儀一宅のうだつは江戸時代そのまま残っており、近年まで時代劇のロケーションにも利用されてきた。道路はアスファルト舗装されたが近代化を住民がよく抑えて来てくれている。

福島宿から西へ向かうと、やがて富岡市下田篠に入る。下田篠の東の村境に庚申塚がある。昔はかなり高かったが、道路拡幅の時に

その土を利用してしまったという。ここには庚申塔三基と馬頭尊二基、それと庚申の文字の入った燈籠が一基ある。燈籠は多胡石で造られている。やがて鎮川に掛かる甘栗橋にさしかかるが旧道はその手前を下流、右側へ入り下って行き上信電鉄の鉄橋のあたりを舟で渡った。河原には古い橋の橋脚の一部が古い順に二種残っている。

3 曹井宿から富岡（鎮川）へ

No	名称	年号	備考
34	御神燈	文政三年	
35	仏像	不詳	
36	辛科神社	大正年間創建	
37	道隆神社	寛政二年	
38	笠塔婆三基	正安四年	県指定重要文化財
39	百庚申	正安元年	
40	造石法華供養遺跡	安政四年	
41	道祖神	元和九年	
42	道祖神	不詳	
43	おはこさま	不詳	
44	千部供養塔	文化五年	
45	馬頭観世音	文化三年	
46	庚申塔六基	万延元年	他に延宝八年一基、他は不詳
47	馬代常夜燈	天明四年	遠州秋葉山
48	道祖神	不詳	天引石
49	道祖神	寛政二年	他に安永二年
48	馬頭観世音一基	寛政二年	他は年次不詳
48	馬頭尊	天保一五年	他は年次不詳
48	馬頭尊	不詳	他九基



56	55	54	53	52	51	50
道祖神	庚申塔 馬頭観世音 三基	庚申塔 庚申供養塔	道祖神	馬頭観世音	百庚申 供養塔	板道祖神 碑
明治二八年	寛政二二年 文久二二年	元禄九年	不詳	昭和二七年	寛政二二年	仁治三年 宝曆五年
元文四年 不詳 不詳 不詳						
他は年次不詳						

四、富岡（鑛川）から宮崎宿へ

鑛川は舟で旅人を渡していたが、冬の間水量の少ない時に限って仮橋をかけるようになったのである。この様な事はかなり水い間行われてきたと思われ、明治になってもしばらくは続いていたのである。明治六年六月、昭憲皇太后の行啓に際して、急ぎよ、仮橋をかけたのであるが、二、三日前からの雨のため、この仮橋は役に立たず、近在から集めた舟を舳い、鑛川を渡っている。鑛川が見わたせる崖の上に石井家があり、明治以前からここに住んでいる。行啓時には休息所となり、家の前には「おのれの滝」と云う滝があり、悉くしに滝を眺め、

作りなす滝にはあらで面白く  
おのれと落つる音の涼しき

と歌っている。この歌碑が滝の所へ建てられたのは明治二十三年九月九日である。



曾木交差点

書家の名は從三位源朝臣素彦であり、異名撰取素彦であろう。碑文は八十三歳の新井守村である。石井家を出ると道は坂道となる。それほど急な坂ではないが「かねの坂」と呼ばれていた。おそらく坂を下って石井家の所から曲手に曲っていたのでそう呼んでいたであろう。坂の途中に馬頭尊の文字塔と神像がある。神像のものはこの近くで産出するらしい石のため、かなり破損している。坂を上った道はゆるくカーブして直線の道となる。五〇メートル

ばかり行つた右側に元文五（一七四〇）年の庚申供養塔、文化二（一八〇五）年の釈迦五鬼助、大峯歳参供養塔、外に庚申文字塔、如意輪観音像などがあり、大峯歳参の塔は二メートル余もある緑泥片岩の立派なものである。富岡市内に入ると広いバイパスと以前の道が分岐する手前に忘れられた様に左へ曲る細い道沿いに、道祖神の文字塔があり、曾木村とある。つき当りに公民館がある。公民館の横を通り抜けたと道幅は急にせまくなり、魔道同様である。二、三軒の家があるが、新道に面しているのほとんど利用する必要がなくなりました。途中新道にはさまれるように古墳があり、こぶだらけの古木が古墳の主であるかの様に枝を張っている。

新道と出合う所に馬頭尊が七体ほど整理されて列んでいる。中にはかなり破損しているものもあり、いつ建立されたかわからない。馬頭尊を過ぎて二〇メートルばかり行つた所に、大正四年建立の道しるべが建っている。左折す



富岡潮下の不動堂



富岡市内の土蔵造りの店

ると鑄川沿いに集落があり三差路になっている。

西一之宮町、東福島町、曾木村

この道しるべも道祖神と同じく曾木村とある。道祖神にも曾木村とあったが、現在は富岡市で東部の大字として名がのこっている。

やがてゆっくりカーブすると、道幅がやや広くなる。ここに庚申塔、百庚申塔、馬頭尊が建っている。庚申塔はこの地方の名筆家の筆になるものか大書で達筆である。左端に日清戦争の勇士を称揚する顕彰碑があり筆額を勝海舟が書いている。

まっすぐな広い道が続く。木立もなく新しく建てられた家並は古い街道の面影を失っている。道に沿って水路があったが、すっかり改修され水門があったと思われるあたりに小さな庚申塔が忘れられたように建っている。注意しなければ気が付かずに過ぎてしまふであらう。左側にこんもりと森が見えて来た。

小舟神社の森は広々とした現代的な町並の中にあつて落着きを取りもどした感がある。この社は古く上野神名帳にも名があり、貫兩神社の摂社として白鳳七年に勧請されたと云われている。当時は君川に通ずる字小舟にあつたが、万治二(一六五九)年に今の地に遷宮したものと云う。この辺は潮下と云うが、境内にある道祖神の文字塔がありそれには潮下とある。書家は球観と云う。天保六年の道祖神の祭の日の正月十四日の建立であるが、世話人三名の名は土に埋まって読みとれない。「和名抄」には潮下と書いた事もあると云う。文明頃の旅日記に「せしむが原」として書いていることから街道であつたのであらう。

小舟神社を過ぎると家並はますます近代的な造りになり、広々とした町が続くが意外に静かである。そんな通りに昔ながらの構をした家を見かける。屋根瓦を漆喰でおさえた模様が美しい。右側に土蔵造りの不動堂がある。少し奥まった所にあり、松の木が枝を張り暗いので見過してしまふそうである。漆喰の彫刻が一面にあり、古事にちなんだ彫物であるが、大分いたんでいる。しばらく修理をしていないとは近くに住む古老の話である。以前は東京から職人を呼んで修理したそうである。

直進した道は、クランク状に二つの角を曲がる。その角に警察署のいかめしい建物があり、細い道を隔ててレンガ造りの蔵が建っている。ばかに古く感じられるのは周囲の建物が新しいたのであらう。その道を左に直進すると小幡への道であるが、家数にして三軒ほどで再び右折する。

市の中心に近づいたのか、にぎやかさを増してきた。その中にうだつのある手のこんだ土蔵造りの家がある。白壁の塀に瓦をのせ、洋風の窓と門柱が少し気になるが、いくつかの棟をまとめ、落着のある風格を見せている。正面や左よりに少し変わった建物が見える。四つ辻になっているが、直進と左折する道はせまく、その直進路の二軒目の家がその建物である。江原時計店がそれであり、屋根の上に望楼がある。店の主人の話によると昭和六年に建

### III 下仁田道の現状と文化財



富岡市内 旧消防望楼

区より借用しているとの事であった。

四つ角を直進すると富岡製糸の建物を利用した片倉工業の正門につき当たる。赤煉瓦の大きな建物の中で明治維新により職を失った土族の子女が慣れない手つきで糸をひいていた事を思うと時代の経過と共に威容備わる建物であるが、暗い一まつ悲愴を感じざるを得ない。

旧街道は四つ角を右折する。急に町並は明るく、活気を呈する。にぎやかな町並のつき当りに対照的に落着いたふん囲気を感じさせる諏訪神社があり、すぐ隣の道を隔てて富岡市役所、消防署、富岡電報電話局があり、道祖神のある角を右折すると上信電鉄の富岡駅があり、行政、交通の中心地であり、商店街の活気もそのためである。

諏訪神社の前の四つ角を左折する。昔の街道が今は国道二五四号線になり、自動車の往来がはげしい。この道に面した商家は大商人らしく大きな構の家が目につく。土蔵をそのまま店舗にしている店、昔ながらの家の前面のみ近代的に見せている店、木造の三階家、そしてその間に銀行等の現代建築が建っていて時代の流れを見せている。やがて食違ひのある四つ角がある。

四つ角の角、左手は「おさく茶屋」と云う昔からおさくさんと云うおばあさんが茶店をやっていた。ここは七日市藩の一の木戸のあった所でもあるが、

たものであるが、市に常備消防が出来るまで消防分団があり、その望楼であったそうである。分団が常備消防へ移管されたのは区の所有管理となったそうで、

この四つ角を示すには「おさく茶屋」が通り名になっていて、誰も一の木戸とは呼ばない。この角の右側に、竜光寺、永心寺の浄土宗の二か寺が隣合せている。竜光寺は幼稚園もやっているので古めかしい寺の建物とは似つかず、甲高い子供達の声がびびく、本堂の左手に小さな建物がある。なかなか嚴重に出来ている。中をのぞくと奥指定の板碑が壁に入れられたように建っている。永心寺には寄棟の古い本堂の前にも新しいお堂が建ち、鐘楼もあって静かなたすまいは町寺とは思えない。

四つ角を過ぎるとやや道は広くなる。両側の家並も古い家が自立ち、落着いた感がある。中の木戸のあった辺はすっかり様子が変わり、どこにあったのか見当もつかない。この辺から間口がせまく奥行の長い家が続く。白壁の大きな土蔵が左手に道より少し入った所に見える。左手奥まった所に山門が見える。金剛院である。蛇宮山、慈眼寺と云う山号、寺号があるが、通称金剛



七日市の中木戸のあった付近



七日市 伊野家屋敷



七日市田藩家老 南保取長屋門

院で、山号にあるように、蛇宮神社の別当で明応元（一四九二）年九月の關山である。この寺にはオランダ通訳の稲部市五郎の墓がある。稲部市五郎はシールト事件のため七日市藩へ預けられた。天保十一（一八四〇）年八月二十日に故郷へ帰る事なくこの地で歿している。

七日市藩の藩邸はこの道の突当りにあった。そして、街道は藩邸を取巻く様であった。ここには通称「食違い木戸」と呼ばれた木戸があり、右折すると松井田道で、この道のつき当り丁字路に、石灯笼があり、奉納秋葉山大権現、石尊大権現とあり、文政十二（一八二六）年己丑九月廿二日建立之、北横町とある。昔から松井田道として多くの旅人があったと思われる。

下仁田道は木戸を左折する。武家屋敷の石垣の上にも倒れそうな木の塀がある。七日市藩邸は加賀百万石の分家の前田家で、一万石余の小大名であったので、藩邸、館と呼ばれる程度のものであり、街道に面した所にも塀や、土居らしいものはなく、石垣上の塀にも矢狭間や鉄砲狭間などなかったであろう。元治元（一八六四）年十一月、武田耕雲齋率いる水戸浪士と志を同じくする諸藩の浪士は京師に向かうべく、木崎本庄を経て下仁田道へ入った。諸藩の領地を避けての進軍で、その数、千人ほどであった。吉井に止宿して七日市藩領へ入らんとした。一同列を直し、旗を巻き、槍の穂には紙片を巻き、隠便に通行すべく一の木戸にせまつたのであるが、そこには藩の用人横尾鬼角

が麻上下で威儀を正して待ち受けていた。

「弊色は小藩、殊に主人在府中にて人数少く、陣屋前を異様な出立で通行されては、他日幕府に対して弁明の余地もなし。」

こうして通行を拒絶した。しかし随くまで事を構えるのは避けべく、

「間道を案内する故、そうされたい。」

と、一行もこれに従い、貫前神社に参拝して下仁田へ向かったのである。旧藩邸内には東立富岡高校があり、通称黒門と云われる東門や、旧藩当時の建物が保存されている。又旧藩当時代々家老職にあった保坂家が二軒あり、北保坂、南保坂と呼ばれ、南保坂の長屋門は天保十四（一八四三）年以後の建物で、北保坂の長屋門はそれより古いものであるが、年代ははっきりしない。

木戸を左折した街道は三差路に出る。ここに横尾鬼角の屋敷があったと云われている。今は古い井戸が残るのみである。三差路を右折して広い境内の蛇宮神社に接して進む。蛇宮神社は金剛院の開山慈眼法師の夢枕に鑄川の白蛇が出て「我を社に祀りなば、永く諸人を護らむ」と、法師はその奇夢に驚き、人々に謀ってここに社殿を営んだと云う。明応二（一四九三）年九月の鎮座と伝える。

蛇宮神社を過ぎると右手に大きな歌碑が建っている。七日市藩の家老南保坂の保坂正義の歌碑で、正気流剣法の開祖であり、歌の号を千文と云う。保坂家には今も道場があり、正気流が愛蔵されている。歌碑を通り過ぎ間もなく左折する細い道が鑄川の上を鑄川に沿って進む。舗装もなくせまい道が続く。鑄川が眼下に長蛇のごとく流れる。杉並木がつき工場間のせまい道を通りぬけると大きな桜の木が立っている。この木は一代目と云う。街道にぎやかな頃の木は枯れてしまい、その後には生えなると云う事であった。

桜の木を過ぎると急に道はせまくなり、車は勿論、自転車も一杯である。新しい道が出来たため利用する人もなく雑草におおわれて、人が歩く所だけ

### III 下仁田道の現状と文化財

の道としてのこっている。左は草葎であり、その先は鑛川の断崖である。上信電鉄の線路を渡る。簡単な標示があるのみである。線路を渡ると車の通りはげしい国道になる。

街道は国道の拡幅のため旧道の面影はなく両側に商店が立ち並び、右側の小高い所は一峰公園で高い塔が建っている。やがて妙義、松井田へ分岐する三差路があり、直進して二一三メートル行った左が古墳があり、そこを左折すると車いっばいの道がある。古墳は太子堂古墳と云い、古墳上に芭蕉句碑、雲裡坊句碑がある。芭蕉句碑は芭蕉門の支考の門人であった雲裡坊杉夫が上州に來杖、寛延三（一七五〇）年には一ノ宮の時鳥庵にあって鑛川の流域から東上州まで足を伸して蕉風宣布にあたっていた。そして翌四年、雲裡坊の指導のもと門人たちにより句碑が建てられた。その後下仁田の高橋道齊らによって雲裡坊の尽力を顕彰すべく雲裡坊の句碑が建立された。

古墳の横を通り鋪装された道は旧道の面影はないが、国道に比して車も通らず静かである。間もなく新しく出来た道路を横断するこの道はすっきり出来上っている様であるが未だ使用されていない。四車線の広い道は一ノ宮バイパスで、田島から直線へ抜けてくる道である。バイパスを過ぎて再び国道へ出る。

国道に出た正面に灯籠が目につく。天保三千辰（一八三二）年九月の建立で、寄附者の名が火袋の下に刻まれている。貫前神社の門前町として、街道の宿場の入口にふさわしいものであった。また那と云うほどのものではないが、近くに女郎屋もあり夜遊びの若物達の目印にもなったであろう。

一の宮の町並は貫前神社の門前町として栄えてきた。この辺は古く貫前郷、抜鋒（鋒）郷と呼ばれていた。「和名抄」にもその名があり、貫前と抜鋒の二神があったと云われている。中世以後は、貫前、抜鋒を同じ神と見たのか貫前の名はなく、抜鋒神社であったが、明治になって貫前が復活し、抜鋒の名は消えていった。



一の宮石灯籠

貫前神社の参道は二つあった。東にあったものは東参道と云う。国道から右折して上る坂道であるが、誰も東参道とは呼んでいない。お女郎坂、だるま坂と呼んでいた。道幅は四メートルに満たない急な坂道で、そこに七、八軒の女郎屋があった。道に面して格子戸があり開口が広く華やかであった昔を語ってくれる。しかし、ほとんどの家が建替ってしまったが、いまでも屋号で呼ばれている。

お女郎坂を上ると平らな場所へ出る。眺望のよい所で、ここには貫前神社の参詣客を相手に栄えていた。貫前神社は上町から再び石段で下った所にある。広い境内は数百年を経たような古木の森でうっ蒼とした中に社殿が鎮座している。千年以前から祭られていた神として、威厳と風格は一宮の名にふさわしいものである。

貫前神社を参詣した人々は西参道を下った人に、そのまま高台を宮崎宿へ向かった人に分かれる。峰づたいに野道を下る。それほど急な坂でもないから旅人には周囲の景色や、妙義山を眺めながらであった。そして下りきった所で丹生へ通する道と交差する。ここから少しすつ上りになる。道幅一メートルほどの野道で、宮崎宿への間道として利用されていた。宮崎の宿の手前で磯部街道と云われた道に出る。ここから宮崎の宿は一〇〇メートルばかりであ

る。宮崎に宿が出来る以前は、磯部街道を横切り、宮崎宿の北を通って宿はずれに出ていたが、今は農道として利用されているのみである。

東参道を上らず一宮の町並を通り抜ける。道幅も広く、間口の広い大きな家が目につく。町のはずれにかかった所に急坂ではあるが広い参道がある。この参道は昭和の初め頃に整地され新参道としてつくられたものであるが、その参道に接してもう一つの道がある。途中までで新参道にふさがれてしまうが、これが西参道で、いぬき坂、又はくりの木坂と呼ばれていた。道幅三メートルばかりで、しかも急坂であったが、一月七日の七草の日に貫前神社の行事として鬼退治の故事があり、その行列がこの坂を上っていた。

一宮へ来て貫前神社を参詣しない人は数少なかったであろうが、この道を常に利用していた者にとっては急な坂を上り下りするのは容易ではない。東参道へ上らず直進し西参道を過ぎ、三差路へ出る。直進する道は丹生への古い道があった。角の右手に間口の広い大きな家が一軒この角の見張り番であるかのように建っている。下仁田への道は左折して数軒の家を過ぎた所を右折する。ゆるいカーブの道に三差路があり、道祖神の文字塔が建っている。この土地の人達が大事にしているのであろう。白石をしっかりと固定している。年記があるが充分読みとれない。元禄子年八月七日、一宮町と何んとか読める。元禄の子年は元禄九年の丙子である。元禄の道祖神はかなり古い方に類するものである。

道祖神を過ぎると左へ大きくカーブし、すぐ右へ曲がる。道は広いが急坂である。旧道はこのカーブを直進した。当時は道もせまく荷車では通る事もできないほどの難所であった。そのために少し遠回りになるが、この急坂を避けて通った道もあった。崖下の坂道が続く、坂道が終ろうとする四つ角に、左に庚申塔、右に道祖神がある。庚申供養塔は元文五龍集庚申十二月吉日とあり、道祖神には年記がない。坂道を上ると広々とした台地へ出る。養蚕が盛んな事もあって桑畑が多い。眺望を防げるものもなく、この台地をめぐる



宮崎宿 家並



宮崎宿 鈴木家

山の景色が美しい。右手長い参道の奥に寺が見える。この寺の参道入口右手に浄土宗宮崎山龍光寺と石柱が建っている。聞いたような寺号と思うに、富岡市中の龍光寺の本寺であった。今は末寺のようになり、住職も富岡の寺の兼務であるが、富岡の寺も依然として宮崎山の山号を用いていると云う。左手には二メートル余もあろう石碑が建っているが、一見した位ではとても解説できそうにない。宮崎の宿はすぐ近くである。かつて宮崎宿がさかんな頃は、この様な寺が数か寺あったが、宿がすたれると同時にこれらの寺は移ってしまった。

宮崎宿の手前で磯部街道と合流する。三差路を左折、すぐに右折する広い道なりに曲る。とたんに広いまっすぐな道が続く。宮崎宿である。今も宿の家並を昔のままにとめていて、格子戸の家が今も残るが、多くの家は現代的な家に建て替えてしまった。宮崎宿を多くの旅人が往來した頃は、すべて

### III 下仁田道の現状と文化財

No	名称	年号	備考
57	庚申塔文字塔 大峯歳参供養塔	元文 五年 文化 二年	曾木村
58	道祖神文字塔 馬頭観音	年代不明	七体あり
59	庚申塔文字塔 百庚申塔	年代不明	同じ場所にある
60	馬頭観音	"	"
61	庚申塔文字塔 小舟神社	年代不明	白鳳七年に勧請
63	消防分団望楼	昭和 六年	端下と地名がある
64	富岡製糸場	明治 五年	
65	道祖神文字塔		富岡市役所前

#### 4 富岡(鎮川)から宮崎宿へ

の業種の商家が軒を連ね、この宿内で買ひ得ない日用品はなかった。今はひっそりとして時々自動車が行き過ぎる。宿のはずれに二、三軒大きな家がある。間口が広く昔ながらの格子戸の構えは旅館ではなかったかと思われ。宿の終りに高い火の見櫓が建っている。無用の長物とはこの事であらうが、火の見櫓の上から見ると宮崎宿は、まっすぐな広い道をはさんで、きまりよく立ち並ぶ家は実に壯麗である。火の見櫓の前に白壁造りの大きな家と蔵がある。これが、桐生の佐羽、大戸の加部と共に上州の三分限者の一人鈴木家の居宅である。道に面した広い間口はすべて白壁造りで窓と云う窓にはすべて格子の嵌殺して堂々とした構えを見せている。五間通しの幅一尺五寸もあらうか、櫓の框には、ぶちこわしの際に斧を打ちつけたさすがのこっている。しかし天下に聞えた鈴木家も今は住む人もなく荒れるにまかせている。土蔵の白壁は所々はげ落ち、大きな穴さえあいて木舞を通して中が見える。中には貴重な宝ものとはほど遠く投げ込まれたゴミだけであった。

66	電光寺	天保二年	県指定梵鐘、板碑
67	金剛院	文政二年	稲部市五郎墓
68	石灯笼		富岡高校
69	七日市藩邸		北保坂
70	七日市藩家老保坂家長		
71	七日市藩家老保坂家長	天保一四年	南保坂
72	芭蕉句碑	寛延 四年	太子堂古墳
73	雲裡坊句碑	天保 三年	
74	石灯笼		
75	貫前神社	元禄 九年	国指定重要文化財
76	道祖神文字塔	元文 五年	一ノ宮町
77	庚申塔文字塔	年記なし	
78	道祖神文字塔		宮崎電光寺門前

#### 五、宮崎宿から下仁田町へ

鈴木家の角を左折する。正面に土蔵造りの家が建っている。その家の前を右折、家数にして二、三軒で再び左折する。この角の石横の高い所に角柱の道しるべが建っていた。大正十一年の建立で、宮崎青年共鳴会の手になるものである。向右城町を経て作道、左一の宮、富岡、向左神農原、神成、南蛇井、下仁田道とある。ややわかりにくい道しるべであるが、角柱のそれぞれの面に向かつて立つとはっきりする。現在は四つ角であるが、道しるべを建てた当時は三差路であった。

道しるべを通り過ぎると道幅もややせまく下り坂になり、右に石段があり小さな寺を見る。乗願寺と云う。寺を過ぎると急な坂道になり、急カーブ二か所を過ぎて平地になる。二つ目のカーブの所に道祖神の文字塔がある。

石がばかに赤く見える。坂を下った三差路にも道祖神の文字塔があるが、個人庭の入口のすぐ前に建つてある。かなりじやまなものであろうが、勝手に移動するわけにもいかずそのままにしていると云つた感じである。

家の前は三差路で南へ向かい神農原の駅へ通ずる道がある。道祖神を建てるには場所を得ている。下仁田への道は直進するが、それほど広くない道に側溝があり、きれいな水が流れている。側溝の石積みの中に刻字した石を見つけた。道しるべである。他の石とちょうど同じ位の石なので、うまく積み並べてあり一面だけを見る事ができる。「向左神成蚊沼中沢」と読みとれる。顔を横にしなければならぬ。

南は広々として田畑が続く。北は道に沿って一列に家が立ち並び、すぐ後は山がせまっている。道の北側はわずかの桑畑があるだけで住宅が続いている。一〇軒ほど家が過ぎた辺に道祖神の文字塔が建っている。家並の間の少しばかりの空地にあるが、これも紅殻を塗られている。白石の上にきちんとおさまつた道祖神の前に自然石のまま一つ置かれている。上が平らな石なので供物するのに都合がよい。一月十四日の道祖神の日には多くの供物で石の上は山と積まれたであろう。子供達は、道祖神に紅殻を塗り、村落の家々を回り、餅やみかんを貰い歩いたと云う事であった。近頃ではそのような仕来りもなくなり、道祖神に塗られた赤い紅だけがなごりをとどめている。

山が急にせまってくる。家並みもきれて岩山が押し出したようでもある。道も岩山に沿つて曲がる。岩の中腹三メートルほどの高さの所の岩が削り取られたか。或は自然に平らな所があったのか、青面塔が祭つてある。正門に加工した石に青面尊と刻つてある。右には球形の石が火袋の上ののり、青面金剛の種子によく使われる「ウーシ」の梵字が刻つてあるように見える。左には何の仏像か知らぬが、坐像が一体、片膝を立てた様な形で祭られている。如意輪観音かと思えるが頭が丸い。おかしな仏様である。

道の両側に二、三軒の家があり、木立が陽をさえきり、ゆるくカーブした



富岡市根岸 青面尊



富岡市神成の土蔵の堂

道を暗くしている。急にひらけた明るい所へ出る。四つ角になっているが、右へ行く道は山の上の中学校が出来たので通学路として最近完成したのである。もともとは三差路で左の道はやはり神農原へ通ずる。この角に道祖神の文字塔二基を従えて弁才尊の石碑が建っている。弁才尊は享和二壬戌（一八〇二）年孟春、左の道祖神は道の字が行の中に首を書いた術の字で、天明元辛丑（一七八一）年十一月の年記がある。これらも紅殻が塗られているが、右手の道祖神は神の字が見えないほど土に埋られている。不思議に思つたのは弁才天である。弁才天を祭る以上とんかさな池でもありそうなのであるが、池らしいものは見当らない。土地の人に尋ねた所、少し南の方に以前池があり、そこに祭られていたとの事であった。その池は埋土されて田になり、弁天様の落着く所がなく道祖神と仲よく同居しているのだそうである。

道の両側に家が立ち並んでいる。右手の山も後へ下つて広くなっているの



### III 下仁田道の現状と文化財

で、風当りが弱く、陽ざしの良い所なので多くの家が建つたであろう。鎌ヶ谷と呼ばれたのはこの辺ではなからうか、家数は二、三〇軒も建っている。村落を出た三差路に白壁造りのお堂があるが、大分いみじい。左は神農原への野道である。お堂のまわりは墓地で、その前に石で二段に土止めした上に大きな白石を据えその上に庚申塔が建っている。大書した字は鎌書であろう。達筆であるが書家の名が見当らない。名のある書家であろうか、何かわけあって名を伏せたのであろう。

お堂を過ぎると右手は道路より一段と高くその石積の上に五、六軒の家がある。道も山裾の形なりにゆるく曲がる。左手はひらけて見通しがよく、道の近くは畑が多いが、その先は田が続いている。鑛川によって出来た穀倉地帯である。

右手にこんもりとした森が見える。道に接して広場があり、広場の上に宇雲神社(86)があり、広場も神社の境内であった。遠くから見えた森はこの神社である。石段を登る。木立は鬱蒼としてうす暗く、人影はなく静まりかえっている。石段が終った。やれやれと思つたらその先にまた石段が続く。神社までかなり登つて来た。ようやく社殿にたどりつく。なかなか立派な社である。入母屋に唐破風のついた権現造りの拝殿、流造りの本殿、それぞれに手の込んだ彫り物があり、社をめぐる大木はより奥床しさを感ぜさせる。宇雲神社は上野十二社の一社で白鳳時代に創建されたと伝える。この地は、赤城神社を祭つてあつた所と云われ、後に宇雲神社を祭つたと伝える。天明年間に火災のため社殿等一切焼失したが、その後復旧再建され今に及んでいる。

宇雲神社を過ぎ四、五軒の家を経てや、道がカーブする左手に文字塔、神像各一基の道祖神を見る。二基とも赤く塗られている。今まで見た道祖神の内特に赤く感じられる。文字塔が少し大きく、神像二体のものがより添うように白石の上に乗っている。しかし、よく見ると神像二体の道祖神は大分い



富岡市神成の道祖神

成はすべてこのような所を曲りくねつた道が続く。三差路になつて角に四角な用水池があり、その周囲に庚申塔が十基ほど建っている。しかし、完全なものではなくすべて破損し、白石もなく土に突きささる様に建っている。中には完全なものであつたらかなり大きく立派なものであつたろうと思われるものもある。この池は「吉田の池」または「吉田ヶ池」と云われつており、池の一部から清水が湧き出し以前はこの水を色々に利用していたと云うのであるが、清水もすっかり枯れて湧水がないため池の水も濁っている。宇雲神社は以前この近くにあつたと伝えられている。この池と宇雲神社と何か関係があつたのかも知れない。

山裾を通る道は依然としてカーブの連続である。山が近づき、遠く、近づいた所は岩が露出し、遠のいた所には少しばかりの畑があり家が建っている。神成集落も吉田の池を過ぎると両側に家が立ち並ぶが道幅はややせましく砂利道もあり、三メートル程の道幅の所もある。集落を出た所に三差路があ

たんではいはるが二体とも合掌しているように見える。鑛川流域には双体道祖神で二体とも合掌しているものをよく見かける。文字塔には文化十(一八一三)西正月吉日とあり、吉田は道祖神祭の日の十四日であろう。また建立は申成色とある。この辺を神成と云うのは宇雲神社がある故であろうか。右手は道路より一段と高い所に家がある。左手は道路より低い所まで山がせまつてかなり高い。神

る。右手は山裾に数枚の畑と広い墓地があり、左手角のやや高い所に道祖神の文字塔が建っている。年記はないが、神成邑とあり、この道祖神は、紅殻が塗られた様子がない。赤く塗る風習は神成地区の中の小字にのみあったものであろう。

道祖神を過ぎた所からの道は舗装も新しく最近整備したらしく、きれいな道が山裾を白い帯のように繞っている。この道は蚊沼の集落で県道南蛇井・安中線に出る。道祖神から五、六〇メートルばかり行った所で左折する道がある。車が一台やっと通れるほどの道で舗装もなく、砂利道に車のタイヤの二本線が窪み中心が高くなりいやでもそこを通らなければならぬ。その窪みを通る以外に通る所がない道なのである。左接してすぐ蚊沼川にかかる橋を渡る。島田橋と云う。一本道なので道なりに進む。橋を渡り右へカーブすると、上水道神成ポンプ操作場があり、ポンプ小屋とタンクが見える。道路ぎわの少し高くなった所である。せまい道が川に沿って進む。二、三軒の住宅がある。自動車が一台中置いてある。この道はここに住む人以外利用する人はなさそうである。

川に沿って進む。蚊沼川は小さな川であるが、兩岸が高く崖になつており、二メートルほど下に川が流れている。せまい道が終つて舗装したやや広い道に出る。そこにも橋があり、これも島田橋と云うようである。橋のたもと三差路に小さな道しるべが建っているが、注意しなければ気が付かないほどのもので、三差路のそれぞれ向いた面に「一の宮、富岡道」「南蛇井、下仁田道」「丹生、妙義道」とあり、四角の面のもう一面に「大正七年一月、吉田村青年会新地支会建之」と刻つてある。この辺が吉田と云う地名である事がわかつた。

三差路を左折するとすぐ広い道に出る。左は直線の道が遙かかなたまで続いている。近年出来た道であろう。右折すると二、三枚の田を経て右手は高台となり、桑畑が続く。左手はすべて田であるが、道に沿った所の先は畑に

なる。田が多いのはこの辺までで、これからはほとんど畑になつてゐる。気が付かぬ内にかなり上つていたのであつた。

左に中沢川の流れが見え川に沿つて十五メートルほど橋を渡り左折する。人家の間の細い道を右にカーブして、県道南蛇井・安中線に出る。すみや商店の角で、ここに道しるべが建つてゐる。今まで見た道しるべがすべて大正年間に建立されてゐるが、この道しるべだけはちがつて、大きく立派なものである。右一ノ宮、三十三丁、左の字は破損しているが、左の字があつたものであろう。松井田、三里とあり、嘉永七寅年十二月吉辰とある即ち安政元（一八五四）年である。他の面に寒行供養とあるのみで建立者がない。

道しるべの角を右折して再び中沢川を渡つた四つ角に道祖神が四角な台石の上にきちんと乗つた形で建つてゐる。鎮座したと云うように見える。この道祖神は行書体の字でかかれて遠筆のように思えるが、年記も建立者も見当らない。以前は少し先の煉瓦造りの倉庫の裏手にあつたと云う。当然、県道を横切る道もそこを通つていたのである。

道しるべの角を左折するとすぐ神社の鳥居が見える。鳥総神社と云う。右手奥に石段を上つた少し高い所にある。杉の木が一本際立つて大きく我者顔である。拝殿は彫刻をほどこした立派なものであるが、「飛房大明神」と云う額が掛けられている。本殿は彫刻に彩色し上屋がかけられてゐる。

鳥総神社を過ぎてまっすぐな道が南蛇井駅を通り国道二五四号線まで続いている。南蛇井とは變つた地名である。

上信電鉄の踏切の手前右側角に吉田公民館がある。その角を右折する。道はせまくなりゆるいカーブをした所に道祖神が一基あり、安永五（一七七六）申年五月吉日、茂木氏と年記がある。右折する細い道があり、三差路なのであろう。道の両側に人家が多い。大きな家が目につく。小さな四つ角左手にまた道祖神を見る。道祖神の多い所である。道祖神の信仰が盛んであつた事のであつたであろう。道祖神の外に馬頭尊と首のない地藏尊があり、もう一

### III 下仁田道の現状と文化財

体上半身が破損して何の仏様かわからぬ坐像がある道祖神は楷書であるが字が変つている。「道祖拽」とあり不門寺村と読める。かつて不門寺と云う寺があったのか、この辺の小字名である。裏に弘化二（一八四五）年乙巳三月良辰とある。

S字型に曲つた道は少し上りになる。そこには大きな構の農家があり、左には工場であろうが、二、三棟の大きな建物がある。農家には立派な土蔵がある。十数軒の家が密集した小高い所へ出る。四つ角になつてゐるが、左手の道は人家への私道のようにも見える。右手にも右折する細い道があり、道に沿つて小川があるが水量はあまりない。小川の上流は谷がやや深く奥まで入り込んでいる。稲荷沢と呼んでいる。この沢から流出した土砂により小高い台地が出来、そこに家が建ち、小川は天井川になつたのである。この小川も雨期にはかなり水量があるのである。この角にも例のごとく道祖神が祭られてゐる。宝暦十二年十一月十五日と読めるようであるが、十二年は午であり、未は十三（一七六三）年であるところから、読みちがえたのであろう。この角に以前は大きな機の水があり、広く木陰をつくつていたので、下仁田

からの荷車はここでいぶくしていったのであつた。

道はやや下りになり、桑畑の中をS字型に曲り、二・三〇軒ほどの家がついてゐる村落に入る。細い道を左折、再び右折すると上信電鉄と並行する。五・六〇メートルで四つ角に出る。ここに立つて右手を見ると大きな寺院が山を背にして建つてゐる。その構からして名刹であろう厳然とした風格がある。参道に神の字が土に埋つた道祖神が右手にあるが、道の字も破損して半分の字になつてゐる。上り坂の参道を行き山門前に立つて一見して神宗の感じを受ける。最興寺である。山門をくぐると眼前に寛げる様な楼門が目に入る。この寺を代表するかのようにとどろしとした楼門に圧倒されてしまった。石段を登ると、本堂は奇矯で楼門に比してやや貧弱な感じを受けるが、摩訶が立派なのは驚いてしまう。本堂は火災か何かで再興されたものであろうと

想像する。庫裡の棟は一メートルほどの高さはあろう。石段横の松の老樹が懸崖のようにおおい、緑を添えてバランスを整へてゐる。

寺の見える四つ角を過ぎると右手奥に鳥居が見える。鳥居の先には石段が見えるだけで、社は見えない。道路わきに一対の灯籠があり南西神社と書かれた石柱も建つてゐる。南西神社と云うのも珍しい。ナンサイと読むのが正しいようで、アイヌ語のナサイとも又、南牧、西牧の神を祭るとは土地の人の話である。那射、南蛇井と関係があるのか、いずれにしても変つた社名である。神社前を過ぎると少し下り、両側には田があり、その中を上信電鉄が通つてゐる。線路と並行してゐた道は踏切を渡ると、工場の前を通り、クラック状に曲る。その角に道祖神の双神像が建つてゐる。きれいに整地され、回りに小石が敷きつめられ、数本の小さな木が植つてゐるが最近植えられたのであろう。この道祖神は家形で破風が軒のように少し出て、浮彫の二神の内、男神像は幣束を持ち、女神像は、合掌してゐるように見えるが或は徳利



南蛇井最興寺楼門



南蛇井の道祖神



下仁田地内 旧道の石垣



下仁田伊勢山下百庚申と本誓寺下庚申

を持っているかも知れない。御幣を持った道祖神は、いくつかも知れられているが、鑄川の谷ではあまり見ないものであり珍しい。残念なのは、年記の部分破損しているため八月吉日とのみ読みとれるが、女神像の左に書かれた女申念仏供養の文字が何を意味するのであろう。御幣束は神であり念仏は当然仏で、これほどはっきりした神仏混淆道祖神は初めてである。以前は一〇〇メートルばかり上の三差路にあり、最近ここに移動して祭ったと云う事であった。工場の間を通り抜け、上信電鉄の線路を渡った三差路にも道祖神の文字塔が一基、田と畑にかこまれて建っている。

少し上り坂を上った所に小さな川がある。幅一メートルほどの兩岸に石を積み上げた川であるが水はない。土地の人達は満福寺川と呼んでいるが、川と云うには貧弱すぎる。この川の上流は深い谷が奥まであり。雨期には鉄砲水のように土砂が流れ出し、この辺一帯の台地を形成している。この川はその台地上を流れ、天井川となり、水無し川となったのである。ここにかか

橋は中井橋と云うが川幅より道幅が四倍ほどあり橋と云う感じが無い。ここに万延元（一八六〇）年の年記のある庚申塔が一基、少し下に川の石垣とまぢがえそやな庚申塔が忘れられたように置いてある。

橋を過ぎて三差路を右折する。古い家が数軒道の両側に建っている。ゆるいカーブを通ると千平の集落である。左側に門構の大きな家が三、四軒続く。この集落は十数軒の家数であるが、どの家も大きな家で、落ち着いた感じのする所で、その昔、街道が旅人でにぎわった頃は峠の上り口としてかなり栄えたと思われる。

千平の駅の手前、三差路を右折すると梅沢峠へと通ずる。直進すると小倉川を渡り千平の駅舎の横を通り、踏切のある三差路に出る。この三差路に道しるべがあり、四角い石柱のそれぞれの向いた面に、馬山道、下仁田道、一ノ宮道と刻っており、もう一面に大正七年一月、吉田青年会建之とある。馬山道は上信電鉄に沿って一〇〇メートルばかり行き左にカーブして鑄川をつり橋で渡る。そして対岸の馬山への道である。下仁田道は踏切を渡る。線路に沿いに小さな社がある。鳥居もあり、小さいながらもまわっている。線路を渡って三・四〇メートルで左折し梅沢川を渡り峠道へ入ったのであるが、今はこの道はなく、新しく道が開けた後は植林して面影すら残っていない。小坂峠の道も近年自動車を通る様な道が出来、旧街道は新道と並行しているが、所々に旧道と思われるような石垣の土止めや、山腹をけずった細い道を見かけるが、部分的でつながりがない。この山は植林が行届いているので、山へ入る事は多いと思われるが、現在は旧道を利用する必要がなくなったのも古い道が姿を消した原因であらう。

小坂峠を下り国道二五四号線に出る手前右手の山は伊勢山で、山裾道路沿いに百庚申がある。最近建替えられ、行儀よく並べられている。百庚申の反対側には本誓寺と云う小さな寺がある。無住寺のよう境内は草ぼうぼうになっている。道路わきには庚申塔が三基ほど建っているが、深く埋って塔の

### III 下仁田道の現状と文化財

字は見えない。石段を登ると右手に際立って大きい庚申塔が一基目につく。白石もあり他の庚申塔より別扱いの感じが、書家の名があり、金洞河三亥である。なるほどと納得する。市河米庵が書いたと云うだけでこれほど差がつくかと感心する。左には如意輪観音、地藏尊、僧像の三体があり、如意輪観音には宝冠に化仏があり共に彫りがよい。おそらく信州あたりの石工の作であろう。

国道と交差する所は食違いの四つ角になっており、右手角一段高い所に大書した影の深い庚申塔がある。寛政九丁に、大米原村中と読める。庚申塔の向かいには地藏堂あり、一メートル余もあろう地藏尊が安置されている。道のつき当たりには道しるべが建っているが木の枝がおい注意しなければ見落してしまう。向かって正面に、向右小坂村、西牧村、左青倉村、磐戸村、月形村、尾沢村とあり、右の面には、右青倉村、磐戸村、月形村、尾沢村と正面と同じく、左吉田村、一ノ宮町、富岡町高崎市道とある。今は国道二五四号線として拡幅され、この様な道標を必要としないが、伊勢山の山裾を通過して西牧へ向かう道が国道より少し高い所に残っているが、道幅二メートルたらずのせまい道である。しかしその当時から主要道が交差する重要な道であった事は道しるべに刻まれたのを見ても知れる。道しるべのすぐ隣には古い井戸も残り、桜井戸と云う。旅人のために飲料水を提供したものであろうが、このような井戸が、下仁田の主な道路にはいくつもあったのである。下仁田町を通過して南牧へ通ずる道は下仁田町を南北に縦貫して、への字のように少しカーブしながら南牧川と鑛川が合流する所へ向かって坂を下っていく。坂と云ってもそれほど急なものではなく、だから坂である。鑛川にかかる橋は牧口橋と云うが、その橋の手前右手に川へ降る道がある。坂の途中に道祖神、庚申塔の文字塔が各一基あり、二つ並んだ石塔は夫婦石のことく、注連縄が結んである。ここから対岸へ渡ったのであるが、対岸は工場や倉庫が立ち並び、田道の位置を知る事はできない。



下仁田伊勢峠 桜井戸



下仁田町並

下仁田町は度々の火災で焼失し貴重な財を失っている事もあって、町中に土蔵を多く見かける。また、税のある家もあり、通りに面しては普通の木造であったも、裏には土蔵の倉庫を持った家が多い。現在は裏通りになってしまうが、表通りと並行する古い道がある。伊勢山下の交差点から少し西牧寄りに進み、国道から左折して坂道になっている細い道がそれである。道に沿って道幅と同じ位の水路があり、土蔵が立ち並び、以前は馬を繋ぐ柵や、井戸が道端にあつたがこれ等はすべて見られぬ。警察署の裏に出た所で、西原間道と呼ばれる道と交差する。この道も古く、馬山方面から西牧へ向かう主要道であった。下仁田郵便局裏で交差する道は通称殿小路と云われ、間もなく下仁田農協の裏手へ出てくる。諏訪神社と下仁田幼稚園の間の道は急坂になり鑛川へ降りる。ここに弁才天、道祖神双神像を見える。双神像は小さなものであるが、家形で破風がある中に双神が浮彫りになっているが鑛谷の道祖神によく見かける。二神ともに合掌しているタイプである。諏訪神社は鑛川

崖上<sup>(10)</sup>にあり、合祭されている近戸神社と共に影物がすばらしく、天明八(一七八八)年、信州諏訪の宮本工天崎善次郎とその子の房之進、林之丞等によって建築されたものである。また境内には樹令六〇〇年と推定される大樫が境内をおおうように枝を張っている。

鑄川を渡り善福寺墓地に沿って急な坂を上る。旧道の面影がわずかに残っているが、鑄川の崖にはそれらしき道を見る事はできない。上りつめた所で左折、善福寺参道前を通り下り坂を行くと交差点に出る。ここに庚申塔や地藏尊が祭られている。左折して右折するような道である。道幅三、四メートルの道に両側住宅が並び、間もなく倉庫や工場の間を通るS字のカーブの道になり、急に明るく広い道に出る。南牧道である。南牧道に出る手前、石垣の上に忘れられたように馬頭尊の小さな石塔が半分ほどコンクリートに埋れて建っていた。

5 富崎宿から下仁田町へ

No	名称	年号	備考
79	道祖神文字塔		宮崎公園下
80	茂木家		宮崎公園 国指定重要文化財
81	道祖神文字塔	年記なし	宮崎公園下
82	道祖神文字塔	不明	
83	青面塔	不明	外に梵字のものあり
84	道祖神文字塔	天明元年	
85	弁才天文字塔	享和二年	
86	庚申文字塔	不明	
87	字雲神社	享保元年	復旧再建
88	双体道祖神	文化一〇年	
89	庚申文字塔	なし	双体像は合掌
90	道祖神文字塔	不明	約十基、すべて破損
	道祖神文字塔	天明年間	神成村
			蛟沼三差路

No	名称	年号	備考
91	道標	嘉永七年	南蛇井、寒行供養
92	道祖神文字塔	なし	南蛇井
93	鳥髯神社		
94	道祖神文字塔	安永五年	茂木氏
95	道祖神文字塔	弘化二年	不門寺村
96	馬頭観音	宝曆三年	
97	双体道祖神	不明	破損
98	道祖神文字塔	不明	楼門
99	最興寺	年記破損	幣束を持つ
100	双体道祖神	なし	
101	道祖神文字塔	万延元年	
102	庚申文字塔	なし	
103	月本回國供養塔	元文二年	石橋に使われていた
104	百庚神塔		伊勢山
105	庚申文字塔	寛政九年	市河米庵書
106	桜井戸		
107	道祖神文字塔	嘉永二年	伊勢山下四つ角
108	道祖神文字塔	嘉永二年	下仁田鑄川渡し場
109	弁才天	不明	
110	道祖神文字塔	天明八年	
111	近戸神社	不動尊像	下仁田上町
	青面文字塔		
	庚申文字塔	寛政九年	

六、下仁田町から藤井関所へ

小坂峠を通ってきた道は国道二五四号線の信号にでると西へ今の国道のと

### III 下仁田道の現状と文化財



下仁田町下町の分岐点  
(右 小坂峠、正面下仁田道、左南牧方面)



高崎藩士戦死之碑

ころを進む。信号から右手に立派な石垣を見ながら山の中腹を西へ四〇〇メートル進むと、国道より分かれ下り坂となって西牧川に沿う旧道に入る。道幅は四メートルほどで右に水路が走っている。五〇〇メートル余り行くと右崖下へ建つ高崎藩士戦死之碑の前に着く。この碑は天狗党と高崎藩の戦、下仁田戦争を記念して明治二十六年十一月に建てられたものである。海舟勝安芳の書いたもので、下仁田町に縁の深い市川寛齋の孫にあたる三兼万庵の筆による。この碑の左に彫りの深い立派な庚申塔文化三(一八〇六)年がある。当時書家として名をはせた先賢(角田無幻が)思い切り腕をふるった「庚申塔」の文字は雄大で目を見はるものがある。さらに崖の中腹には島崎藤村の詩碑と小杉放庵の歌碑を見ることが出来る。

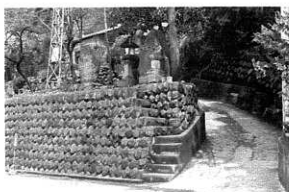
詩碑は藤村の「千曲川旅情のうた」の一部である「過し世をしづかにおもへ 百年もきのふの如し 島崎藤村」が黒石のかたい美しい自然石に刻まれている。この碑を建てた里見五山は若い頃から藤村に私淑し、詩碑の建設を

思い立ち、「千曲川旅情のうた」の揮毫を依頼した。送られてきた昭和六年三月に建立した。

歌碑「この国によき日照る日をみらはたの石になりても待たむぞおのれ放庵」は昭和二十七年同地の里見五山が日米講和条約発効を記念して独力で建設したものと言われている。

また、少し先左手の旧名主である里見哲夫家庭には句碑二基がある。一基は村上鬼城の「二三足落葉に遊ぶ雀かな」昭和六年里見五山建。もう一基は池内たけしの「草摘めるこの子どもらをそだてきて」昭和三十一年里見五山建。里見五山の五山は俳号、本名治雄で哲夫氏の父。元小学校長。里見氏は同地の旧族で、五山は若くして文学を愛し、特に島崎藤村の下仁田町取材の「下仁田の宿」(明治四十年ころの作)があることからファンとなったという。また、俳句にもかなり精通していた。

下仁田道はここから一〇〇メートルほどゆるやかな坂を進むと、国道二五四号線にてすぐ北に入り山のみとを北から北西にだらだら道を進む。道幅は二メートルほどでコンクリートで固めてある。国道にでたところから一〇メートル近く行くと、右にさらに左に用水路が走っている。このあたりはところどころ民家もあるが、左手にゆるやかな斜面を利用して桑畑や水田が広がっている。さらに二〇メートルほど進むと右手にNHK下小坂TV中継放送所の案内を見ることが出来る。また、右手先に古い土蔵をもつ農家が見られる。さらに一〇〇メートル近く行くと右手少し高台に道祖神、庚申塔などが建っている。このあたりから道はゆるやかな下り坂となりやがて田中の集落に入る。一〇〇メートルほどでコンクリート橋にでる。橋を渡った右手に高さ五〇センチの角柱の道しるべ大正十(一九二二)年建立がある。一、向左右下仁田町二至ル、左本宿村二至ル」と下仁田道を、「向左吉田村ヲ経テノ宮富岡(至ル)と梅沢峠を越えて富岡方面への道を教えている。この道しるべから一〇メートル近くで国道に合流し、旧道は国道を横切り南に下りすぐ



柿岩の旧道と庚申塔群

西へカーブする。国道を横切るあたりは古い土蔵をもつ家が見られ、昔の面影をとどめている。国道を渡ったすぐ右手の磯田亀太郎氏宅は磯田屋とよばれ、ここ下仁田道関口集落では唯一の宿として栄え、明治の初めまで営業していたという。つい最近まで「旅行御宿」の関札が残っていた。

西にカーブした旧道は梅沢に沿って左岸を北西に進む。この道は梅沢に沿った二メートル足らずの荒れたじり道になっている。

五〇メートルほどで左にカーブしたところに梅沢を渡る丸太橋があり、この道を通して対岸の桑畑のあぜ道から崖ふちをすつと西牧川に沿って進む。ところどころ笹で道がふさがれたり、岩が露出したりして廃道になっているところがある。やがて右折して一〇〇メートル近くで国道にでる。

国道にでた道は西に一〇〇メートルほど進むと、右手高台に二メートル余りの地藏尊や庚申塔寛政十(一七九八)年などが建っている。地藏尊は宝暦九(一七五九)年の建立だが、台石だけが残り、今本体は新しくなり昭和四十四年三月建立となっている。道はこの手前の坂道を上りきると民家の庭にあたり、この庭の南下の崖ふちの道をまっすぐ二〇メートルほど行くと国道に下る道を横切り石垣の上の道を進む。このあたりはほとんど廃道になっている。一〇〇メートルほど進むと左折し下り坂となる。この坂をすぐ右斜めに進んでいく。右手石垣上に馬頭観音「基明和四(一七六七)年、明治十三(一八八〇)年がひっそりと建っている。一〇〇メートルほど進むと民家へ



安導寺の旧道

通じる道にでるが一〇メートル近くで廃道になっている。そこから、少し下ると崖端(沢のはし)にでる。

でる右手に十七面観世音明治三十五(一九〇二)年が



春日田の薬師堂うらの崖に建つ石仏

石垣の上に乗っている。沢にでる道は沢沿いの上っていく。一〇〇メートルほど上ると民家がなくなるところから左折し坂道を上っていく。落葉や木の枝が道をふさぎ、いかにも旧道の面影をたっふりと味わせてくれるところである。上りきるとやや平坦な道となり左手下に梅の木、桑畑、人家とかなり眺望が開けてくる。

一〇〇メートル近く進むと国道に下るコンクリートの道にあたり五〇メートル国道寄りに下り、右折して二〇〇メートル余り西へ進むと「中小

坂鉄山入口」への道に合流する。さらに左手にカーブして五〇メートルほど下ると国道(安導寺の坂の手前)にでる。

国道にでてすぐ右手の民家西に立派な道祖神寛政六(一七九四)年が陽を浴びて建っている。国道の坂を上り約二〇〇メートル進むと中井橋に至る。





小坂川の渡渉点



平滑の交差点にある道しるべ

この橋の手前を右折し、少し上ると又休道祖神、庚申塔など数基が見える。道の右側に石段があり、これを上ると薬師堂がある。薬師堂の左後側の断崖下の洞窟の様な所に馬頭観音、揚柳観音、千手観音などの石仏が並んで建立されている。残念ながらかけてしまったり、紀年銘がないものもある。前の道際には立派な庚申塔享和元（一八〇一）年がひっそりと建っている。この下の道を三〇メートルほど行くと町立小坂小学校の手前で国道にでる。国道を小坂小学校の下まで行くと道は大黒屋の少し手前を左斜めに行くと進む。道幅二メートルほどのじやり道となり一〇〇メートル近く行くと、石垣のふもとで盛土した高台に庚申塔二基寛政十二（一八〇〇）年、万延元（一八六〇）年、馬頭観音一基寛政三（一七九二）年が見られる。古い道はこの前を左折して（麻道になっている）川にでて、滑染落から半島のように小坂川に突きだした岩盤にかけられていた橋を渡ったよう、対岸の岩盤には橋げたをとめたと思われる浅い凹地が見られる。また、水中から突起した岩も数箇所見られることからこの石を飛石として旅人は川を渡ったこともあったと思われる。出水のたびに橋が流されたため、のち二〇メートルほど上流の高いところに橋がかけられたと古老が話していた。そのため、のちの道はこの庚申塔群の前をまっすぐ進み、古い蔵の前を通る。そこから沢にかかる木

橋を渡って民家の庭先を通り少し上りつめると小坂川に突きあたり、ここから対岸に橋をかけたようだ。今対岸の道は上まではほとんど麻道になっている。橋げたをとめたと思われる凹地が残っている岩を道として上がったところに馬頭観音寛政三（一七九二）年、奉衣婆、閻魔大王の石仏が建っている（ともに年代不明、この前のじやり道を上りつめるとコンクリートでかためた道になる。道幅は二メートルぐらいで、まわりは古い民家と蔵が見られる。やがて国道にでて少し行くと滑のT字路の信号にでる。右折して進むと松井田、妙義方面であるが、右手向う側の崖下に道しるべ二基、道祖神、庚申塔、句碑などの石造物が安置されている。この位置は本来の建立された時点のところではなく道路改修のため現在地に安置したものである。本来はT字路の中央部あたりに建っていたものであろう。中でも安永七（一七七八）年建立の立派な常夜燈は珍しく、台石が道しるべとなっていて「右妙義道、左信濃道」と教えている。また、一番南の明治四十四（一九一一）年建の道しるべには「西本宿、信州追分、内山道、東下仁田、磐戸、一の宮、富岡道、北松井田、妙義、中の岳道」とあり、交通量の多い岐点として重要な道しるべであった。また、中ほどには「大桁山や一筋朝の霧の遣ふ、白雲金鶏金洞山や朝霞」という二句を刻んだ上原清涼の句碑昭和二十七年建立がある。

旧道はここより山際の一メートルほどの道（ほとんど麻道）を一五〇メートル進み左折し国道まで下る。国道を横切り西牧川に向かい約五〇メートルで民家の庭の石垣の下を右折し、西牧川を左下に見て旧道は上流に向かう。このあたりは道幅二メートルほどでこぼこしているが割とよく旧道

が残っている。一五〇メートルほどで右折する。国道馬落橋にてで橋の手前を横切り、一〇メートルで山際を左折し駐在所の裏の一メートルぐらい高いところを通り、神戸建設資材置場の中から同事務所の裏を通り沢にあたり左折する。国道まで下り西牧川に向かい川辺まで降り、川沿いの草の中を上流に向かう。二〇〇メートルほど進むと国道の石垣の下に古井戸がある。また、屋敷跡らしき石垣や梅の木数本がある。これより一五〇メートルで右にカーブしながら落沢橋の入口手前約二〇〇メートルの大平集落の国道にでる。途中岩の上に馬頭観音二基享和元（一八一〇）年、文政五（一八二二）年が川を見つめて寂しく建っている。国道山際の石垣の上方に庚申塔万延元（一八六〇）年、馬頭観音群などが見える。これは道路改修の際に道ばたにあつたものを上方に移動安置したものであろう。

大平集落から国道を約四〇〇メートル進みバス停の先から左斜めに下る。堀を渡ると左方に朽ちかけた薬師堂を見ながら二メートル余りのじやり道を二〇〇メートルほど進むと天台宗永寿寺田山門前にでる。永寿寺に向かつて山門右に法華経三千部明和四（一七六七）年、左に古い庚申塔宝永五（一七〇八）年と高さ二メートル五〇センチ余りの大きな庚申塔（年代不明）が建っている。この大きな庚申塔は彫りの深い雄大な書体で書かれ、左下に「高碕山影書」とある。

永寿寺境内の裏山中腹には大変古い芭蕉句碑「涅槃會や飯手合する珠数の音」元禄十五（一七〇二）年建立がある。また、裏山の墓地に中世の板碑十基ほどが放置されているのは残念である。

山門前を一〇〇メートル進むと西牧川にかかる橋にでるが橋を渡らず右岸を進む。木や竹が生える崖ふちのころは通行不可能であるが、四〇〇メートルほど進むと荒船神社の鳥居の下にでる。そのまま三〇〇メートル余り（今は麻道）進む、右上方にでると国道にあたる。国道にでるとすぐ左手に庚申塔（年代不明）、寒念仏養塔宝曆九（一七五九）年、双体道祖神が大きな石



大平の永寿寺にある芭蕉句碑  
元禄15 (1702) 年建立



市川米庵書の庚申塔  
(山口の稲荷神社参道)

雄大な書体が刻まれている。そばには石燈籠や十二夜塔が建っている。山際の道は幅一メートル足らずのじやり道で旧道の面影を大変よく残している。四〇〇メートル進むと、堀を渡り約一〇〇メートルで右上に墓地、高根神社参道下にて。この先約五〇メートルで左折し、五〇メートルほど下り国道に出て右に二〇〇メートル余り進む。途中右手国道沿いに立派な庚申塔三基享保七（一七二二）年、明和九（一七七二）年、万延元（一八六〇）年建が見られる。下仁田道は坂詰バス停の先から左折し西牧川に向かい下る。右に見える土蔵の家の前を上流に向かうと二〇〇メートルほどで草の中に馬

の上には建っている。ここから国道を一〇〇メートル行き右斜めに上り稲荷神社の参道前から町立東野小学校の下を通り、校庭の出口の坂の所から右上方に狭い坂道を上っていく。稲荷神社参道前には高さ三メートルほどの立派な庚申塔万延元（一八六〇）年がある。これは江戸末期の書家として知られた市川米庵が腕をふるった



137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126
馬頭觀世音	馬頭觀世音	念仏百万偏塔 庚申塔三基	安宅神元柱 五輪塔	如意輪觀世音	双体道祖神二基 庚申塔二基	石灯籠 二十一夜塔	寒念仏供養 庚申塔	青面尊 板碑十基	芭蕉句碑 庚申供養	法華經三千部 二十三夜塔	馬頭觀音 庚申塔
寛政七年	寛政七年	文政八年	文政七年	中世	天明三年	天明三年	天明五年	文政二年	中世	天明四年	天明三年
文化七年	寛政七年	文政八年	文政七年	中世	天明三年	天明三年	天明五年	文政二年	中世	天明四年	天明三年
馬頭觀世音	馬頭觀世音	他に明和九年、万延元年	他に明和九年、万延元年	他に享保一四年	他に享保一四年	市川末庵書	他に双体祖神	他に双体祖神	他に双体祖神	上原清涼句碑 他に文政五年	上原清涼句碑 他に文政五年

七、藤井関所から和美峠・香坂峠へ

関所で通行を許可された旅人はここから左右に分かれる。市ノ葦から信州方面へ向かう人は関所の下から橋を渡って、藤井の集落から横間の集落へと

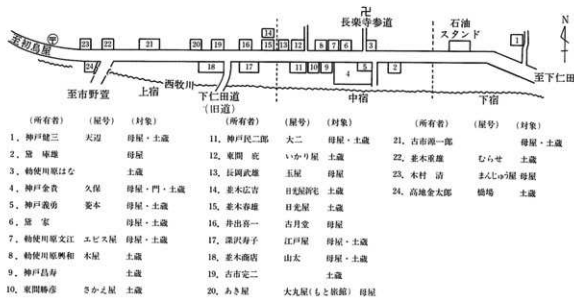
進んだ。初鳥屋を経て信州邊分方面へ向かう人は関所から本宿へた、本宿へは堀に沿った土手の道を山に向かい一〇〇メートル進むと桑畑になる。今の国道のところを横切ってホクドシとよばれる山際まで行き、左折して山際の本や草が生い茂った道を一〇〇メートルほど進む。左斜めに西牧川に向かって下り、途中国道を横切って川沿いに上流に向かう。約三〇〇メートルほどで堀を渡って右斜めに本宿の下宿にでる。途中林の中の道やら、ダムでしゃ断されたり、堀で麻道になっているところもある。

下宿にでる手前の堀を渡ると、右手に立派な自然石の三戸塔寛政十二（一八〇〇）年、寒夜唱号寛政四（一七九二）年が建っている。

下宿にでてから国道を二〇〇メートルほど進み、中宿の古市商店の西の道を西牧川に向かい斜めに下り、川を渡って鎮神社の右側の坂道を上っていく。本宿はいかにも宿場を思わせるような家並、とくに古い母屋、土蔵が多く格子子窓の家も、三軒見受けられた。

鎮神社の境内の右側を通り、国道を横切り町立西中学校の右下の川沿いの道を進むと、左手に双体道祖神などが見られる。さらに行くと立派な寒念仏寛政六（一七九四）年が石垣に倒れたまま固定されている。約四〇〇メートルで矢川川を渡り根小屋集落にでて左折し天台宗観福寺の東まで進む。寺の庭から参道を通り県道下仁田・軽井沢線にでる。左折し根小屋集落の下の曲輪橋に至る。橋のたもとに南向きに「右小坂村下仁田至、左矢川村ヲ経テ長野県ニ至」東向きに「中之嶽ヲ経テ妙義町ニ至」という道しるべ大正十一（一九二二）年がある。ここで右折し、土橋を渡り右斜めに約一〇〇メートルで小出屋集落の境の堀の土手に着く。堀を渡り小出屋集落に入ると右手に庚申塔、双体道祖神が建っている。県道を眼下に見ると珍しく屋根を杉皮でふいて石をのせた家が軒見える。右斜めに坂を上るとまもなく道が分かれる。石灯籠、供養塔などの前を左に下ると県道にでる。旧道はでてもまもなく富士橋の手前から左下の川沿いに進み、川を渡って竹藪の下を右にまわって上の

### III 下仁田道の現状と文化財



下仁田町本宿に残る古い民家の分布

沢集落の中央を通り神明宮の手前五〇メートルから川を渡った。対岸の岩盤には橋の親柱を建てた穴が今残されている。下仁田道は現在の県道の下方を川沿いに進み現在の矢川橋を渡らず大栗集落の下を通り瀬成の集落にでたという。新屋集落には慶徳寺という寺があり、現在跡地となっているが、蓮弁



本宿の町立西中北の旧道

けることができる。また、百庚申の一隅に小堂があり、中に板碑二基が置かれ、一基は建治二(一一七六)年と極めて古く町内板碑中逸品である。ここから清水



本宿の家並

県道に出る。出た少し先に庚申塔群が、さらに五〇メートル先左手に佛人上原清涼の碑昭和十二(一九三七)年を見ることができる。これから先は矢川に沿って県道にでたり下ったりして滑岩集落に入る。川を渡り清水沢の百庚申場の前に出る。壮大な百庚申数とこの人々の信仰の深さにつたぐびつくりさせられる。この中で光劉(角田無幻)が思い切り腕をふるった力強い書体の庚申塔天保七(一一八三六)年を一基見



清水沢の百灰申



清水沢の旧道  
家の中(母屋と仕事場の間)を通る旧道



初鳥屋の集落 正面亀屋(もと旅館)右手つた屋



香坂峠

にのつた大きな馬頭観音の丸彫像が目につく。像身は一五〇センチ余りで頭の上にはいいねいに頭光が加えてある。三面八臂の巨大な像であるが背面にまわってみるともう一尊が刻まれている。建立は元治二(一八六五)年で、慶徳寺住職潤山が建てたことがわかる。建立当時は道路事情もかわり世の中の移り変わりを嘆いているように見える。ここには沢山の石仏が安置されている。

下仁田道は芝ノ沢集落を通り、時丸からも川沿いを上流に向かい初鳥屋集落の手前になる。現在の道路より左方を通り、初鳥屋の中央を流れる堀に行きあたったら右折し堀沿いを進み今の道となる。初鳥屋は和美峠下の集落として早くから開け、一日に信州から馬百頭分の米が運ばれ、ここで荷造りをして江戸方面に運び出されていた。今でも間屋、亀松屋、玉木屋、亀屋、つた屋などの屋号でよばれる家があり、当時をしのばせている。

和美峠へは亀屋(佐藤氏宅)の庭を通り堀を土橋で渡り八十八箇所霊場前を通り、旧道を進んで、やがて今の県道にでたという。旧道はほぼ今の県道のところを和美峠まで続いていた。

一方、香坂峠への道は今中央にかかる橋より少し下方を渡り、小平、菅倉、高立を経て香坂峠へ向かっていた。

7 藤井園所から和美峠・香坂峠へ

No	名称	年号	備考
138	寒夜塔号	寛政 四年	
	三戸塔	寛政 二年	
	寒念仏供養塔	延享 三年	
	地藏尊	延享 四年	
	石灯笼	寛政 二年	他に十九夜塔(年次不詳)





藤井の旧道



藤井名号塔、背面金剛等

一〇メートルほどはなれた、左手の山の中腹にある墓地にも、空居上人の筆になる大きな碑が見られる。高さ二・三メートルという「般若心経の碑」がそれで、天保七（一八三六）年の建立である。

空居上人は、口伝によると、天保五（一八三四）年にこの地を訪れた旅僧で、ここがたいへん気に入り、藤井村の名主の紹介で近くのお堂に居をかまえ、付近を行脚していたという。やがて僧は、阿唱念の不動庵に「阿唱念山吉祥院瑞光寺」を建立した。その後上人は、天保九（一八三八）年に、所用あつて京都へ去り、再び西牧の谷へ姿を見せることはなかった。阿唱念はいくたびかの洪水で荒れはて、今は石碑等が静かに残るだけである。藤井の集落をあとにして、街道はこんやく畑の間を蛇行しながら、北西へ向かう。コンクリート舗装になっている部分もあるが、道幅は当時のままである。国道バイパスを横切ると、杉の木の下に石宮を見て、西牧川右岸の

がけに近いところを街道は走る。右手の村岸には、本宿の家並が続いている。街道はお諏訪さまと呼ばれているお宮の前を通って、バイパスに達する。西牧川は、矢川川と市野萱川とが合流して名付けられた川で、このお宮の裏が合流点である。

バイパスに出た旧道は、左手に少し入って沢を渡り、大きな岩の上にボツンと置かれた馬頭観音を横に見ながら、再びバイパスを横切る。バイパスから一〇メートルほどのところで、道はY字路になる。右手が市野萱へ続く旧道で、横間橋の南側で国道とクロスする。その先は民家の軒下を通り、市野萱川のがけで終っている。そこは横間橋から五〇メートルほど上流のところまで、渡河地点の村岸の草むらには、四基の馬頭像（寛政・文化・文政・天明年間）が安置されている。街道は、ここから左岸沿いに、目明石の天神様の下まで西進した。道の右手、南向きのゆるやかな斜面には、こんやく畑がひろがり、旧道は農耕のために使われ、道幅は狭いがコンクリートで舗装されている。

天神様の手前五〇メートルほどのところに、道に張り出した岩があり、その岩のくり抜かれた穴の中に、高さ五〇センチあまりの如意輪観音と、二基の馬頭観音がある。如意輪観音には紀年銘がないが、馬頭のひとつは寛政五年の建立である。そこから少し先の木の下には、宝永五（一七〇八年）と紀銘のある笠つき庚申塔（背面金剛）があり、天神様のすぐ東にも、同様の庚申塔（享保六年）が建っている。旧道は天神様と呼ばれる神社の鳥居の前を通り、国道に合している。

さて、ここで少し街道をもとって、市野萱川の右岸、横間の集落を通る国道沿いに歩いてみることにする。横間橋の南方、一五〇メートルほどのところで、バイパスと合流した国道は、西へ向かって走っている。国道から少し右に入ったところには、元禄一六（一七〇三年）の石祠、六十六部供養塔がある。左手に庚申塔を見ながら、さらに進むと、国道の右側に旧道が残っている。



### III 下仁田道の現状と文化財

る部分があり、寒念仏、道祖神等が建っている。

石仏の写真集などによく紹介されている、横間の双体道祖神は、これより少し先の左側、民家の軒下に置かれている。国道は、ここから少し右にカーブし、天神橋に通じているが、左手の細い道が旧道で、両側には横間の家並が続いている。それらのほぼ中央に共同井戸があり、そばに猿田彦大神が建っている。家並のつきあたりを、右に折れば国道に出るが、旧道は左に曲がり、沢を渡って市野萱川の右岸につけられた小径は、阿唱念に通じている。

阿唱念は、深山鉦泉のところから橋を渡り、東にもとつても行くことができる。そして、西光寺の正面にあたる沢をさかのぼると、四〇分ほどで阿唱念の滝に到達する。

流れ落ちる水の音を聞くところに安置されている不動明王像（下仁田町指定重要文化財）<sup>(10)</sup>は、天保七丙申年三月二十八日の建立で、信州高遠桜井石工若林重藏の銘があり、立派な作品である。このほか、空居阿闍梨の碑、大日真言の梵字碑、<sup>(11)</sup>「半時の山の主人の夢の空」という句碑等、空居上人に関する碑が数基みられる。

目明石の天神様の前で、国道に達した旧道は、そのまま斜めに国道をクロスし、小径へと続いている。五〇メートルほど行くと、松の木のそびえる小



目明石 如意輪観音



阿唱念 不動明王像

供養塔天明三（一七八三）年、十九夜塔慶応二（一八六六）年などが見られる。前者は下仁田町内の月待塔としては、最も古いものである。また、国道の反対側には、元禄年間在地蔵が、忘れられたかのように置かれている。

西光寺から三〇〇メートルで、深山鉦泉に達する。この間は、旧街道が拡幅改良されて、国道となっており、途中、寒念仏文化五（一八〇八）年が右手に建っている。市野萱川を隔てた左手には、伝説で名高い物語山が、独特な姿を見せてくれる。

深山鉦泉の手前に、物語山ハイキングコース入口の案内板があり、これに沿って左に入るのが、かつての旧街道であった。そして、今は全く廃道となってしまったが、橋を渡らずに、旅館の裏を川沿いに西進し、今の荒船鉦泉のある地点を通り、その先で国道に合流していた。

荒船鉦泉の西方、山裾が川岸に向かってせり出している所では、道路改良工事に伴って移転を余儀なくされた石仏群が、一か所に集められ、道路端のコンクリートの上に安置されている。自然石に刻まれた梵字の庚申塔二基が目立ち、一方からは、享和の年号が読みとれる。また、すぐ脇には、昭和庚申の年にあたる昭和五年の庚申塔が建っている。昭和に建立された庚申塔は、このほか、西牧谷に数基みることができた。

きな塚があり、そこには庚申塔や、宝曆八（一七五八）年の双体道祖神が建っている。少し行くと、その小径は消滅し、その先で再び国道に合流していた。

天台宗西光寺は、往古火災にあい、その創建年月は不詳であるが、享保十九（一七三四）年、重海法師がこれを中興した、と記録されている。

国道から寺に至る参道には、二十二夜待

昭和五年に、中平から東平まで、国道バイパスが開通した。その起点は、前記石仏群から、一〇〇メートルほど西へ行ったところである。旧国道は進路を左にとり、中平の集落に入り、五〇メートルのところ、また二つに分岐している。右に入って旧国道よりもやや高い位置を走るのが旧道で、石積みアーチ橋を渡って、またすぐに旧国道に合流している。

アーチ橋手前の石段は、天台宗野苧寺に通じるものである。バイパスがこれを貫いて完成したため、寺のすぐ前は、自動車がひっきりなしに通るようになり、静かな寺から一変してしまった。野苧寺は、三ツ瀬の福蔵寺、市野苧の無量寿寺、それとここにあった法勝寺が合併して、昭和十七年に誕生したという経歴をもっている。伽藍は、法勝寺のものを模様替えして用い、大字名である南野苧の野苧をとって命名された。阿弥陀如来と不動明王を祭っている。



中平の庚申塔群

中平のはずれで道は市野苧川を渡り、右岸に移るが、川の手前を右に折れ、川沿いに中丸へ行く道がある。バイパスをくぐって行くと、集落の右手にあたるところに、



中丸の庚申塔

庚申塔群が見られる。このうち、寛政十二（一八〇〇）年の庚申塔は、高さ一六三センチの大きな自然石に、背面金剛を主尊とする梵字を大書した重量感あふれる碑である。また、集落の西の小高い山の上には八幡宮が祭られており、遠くからもその社を望むことができる。



三ツ瀬の旧道

市野苧方面に向かう旧道は、現在

の吉野橋の少し上流で、市野苧川を渡っている。橋を渡ったところで、左に折れる道があり、道平に通じている。分岐して約一五〇メートル、土木工場の一面には、諏訪神社が工場に隠れて置かれている。道平には薬師堂があり、馬頭観音群や、双体道祖神が見られる。

吉野橋で川を渡った旧道は、国道と同一ルートをとって西へ向かうが、市野苧の集落に入る手前に、六基の馬頭観音像と、十九夜塔（大正六年）、寒念仏が、コンクリート台に安置されている。

市野苧の家並が終わると、正面に三ツ瀬橋が見え、視線を上に向ければ、荒船山がその姿を横たえている。道の前には、石垣で囲まれた上に、七基の石碑が建立されている。「雨宝童子」と刻まれた空居上人の碑は、空居の高名と、天保六（一八三五）年六月吉日の紀年銘があり、高さ一五〇センチ、文字や、彫りも良く、立派なものである。その

### III 下仁田道の現状と文化財

隣には、「奉造立庚申待供養之塔」があり、元文四（一七三九）年の建立、二鶴三猿の基台にのっている。

芦野平からの旧道は、三ツ瀬橋より五〇メートル手前で、国道から分かれて右手の川原に降り、市野萱川を渡って三ツ瀬橋の下をくぐり、川に沿って荒船神社の前まで続いていた。この区間約四〇〇メートルは、道幅一〜二メートル程度で、旧状をよくとどめている。三ツ瀬橋から五〇メートルほどの地点に、一二基の石碑が一所にまとめられ、安置されている。庚申塔、馬頭観音、道祖神、二十三夜塔などがそれぞれである。

上三ツ瀬バス停留所の南には、福藏寺の跡がある。福藏寺は下仁田の常住寺の末派で、文亀元（一五〇一）年に清光法印によって創建され、宗派は天台宗である。この寺は、後に合併されて野牧寺となったことは、すでに述べたとおりである。近くには墓地も残っており、川沿いの旧道からの入口には、「法華一千部供養塔」が建ち、宝曆二壬申天十月吉日と刻まれている。

そこから、さらに数十メートルのところに、西牧村青年会が、大正十三年に建てた角型の道標がある。向右内山越志賀越ヲ経テ長野県、左下仁田ヲ経テ富岡町、他の一面には、右相沢ヲ経テ荒船嶺とあり、相沢へ向かう道は、かつてはここで分岐していたことがわかる。

川沿いに走って来た旧道は、荒船神社の前で再び国道に合流する。荒船神社は、荒船山頂にある奥宮に対し、里宮と称しており、祭神は経津主神となっている。白鳳の頃に、一ノ宮の眞前神社が荒船山へ宮柱を立て、白鳳二年に荒船神社の里宮として勧請し、山頂にある社を奥宮というようになつた、と伝えられている。

荒船神社の前から西へ行く道は、中萱の西牧南小学校の東で、左に大きくカーブする。このカーブする地点には、庚申塔が数基建立しており、また宝曆三（一七五三）年の銘のある三界萬靈等、十九夜塔なども見られる。明治三三年建立の句碑「花七日人は飛と日を、さかり可那 萱草」は、やや高い



東平の石仏

位置のところにある。

旧国道は小学校の南を走っているが、古い街道は、旧国道と市野萱川にはさまれた、民家のあるところを通っていた。そして、東平バス停留所のところで、左に下りる細い道があり、数十メートルで廃道となつてしまふが、その少し先で、再び旧国道に合していた。

川沿いの低い場所に家が多いのは、水車を利用した名残であろう。旧道には、明治期に建立された馬頭が、石積みの上に置かれているのが見える。

中平から芦野平、三ツ瀬の北側を大きく回して建設された国道バイパスは、近い将来、市野萱の西まで建設される予定であると聞く。このバイパスの建設に伴い、小学校の裏にあった天狗さまと呼ばれているお宮は、新しく作りかえられた。常夜燈には、天明七（一七八七）年の年号が見られる。

バイパスは東平橋の東側で、旧国道に接続されている。旧街道は、東平橋では北側にう回していた。旧道の端にある墓地には、宝水二乙酉天六月吉日（一七〇五年）銘のある三重の層塔があり、六十六部供養と刻まれている。バイパスの橋りょうの下で、旧道は溪流を渡り左に曲がるが、そこには、道祖神、文化三（一八〇六）年奉順禮百八十八所供養、寛政二（一八〇〇）年庚申塔、文政五（一八二二）年寒念仏、明和七（一七七〇）年庚申像が並んでいる。道路工事に伴い、移設されたものであろう。

旧道は、国道を五〇メートルほどのところでやや左手に沿う道を通った。

ここは、すぐに麻道となつてしまひ、市野菫バス停留所の手前で、国道と一致する。バス停の北西にあたるところに、上水道の配水池があり、ここには、「馬頭尊」と書かれた、彫りの深い像が見られる。慶応四（一八六八）年戊辰首夏吉祥日とあるから、年代的におもしろい。



市野菫 馬頭尊

市野菫の国道には、ハイキングコース神津牧場へ徒歩二時間、という大きな標識がある。これに従つて市野

菫の集落を通り、屋敷、神津牧場を経て、信州へ抜けるのが、香坂通り日影新道と呼ばれた旧道であった。

享保六（一七二二）年正月、香坂峠（園土地理院の五万分の一地図では、矢川峠と記されている）付近に大雪が降り、初鳥屋から同峠を越えて信州に通ずる街道が、通行不能となつた。このため、下仁田・初鳥屋・追分・岩村田の宿場が、香坂通り日影新道、公園の通路として当分の間使用したい旨を、奉行所に願ひ出、認可を受

けた。このルートは、下仁田から岩村田へ向かう場合は、初鳥屋のような難立地がなく、しかも最短距離であるため、「当分の間」という限定認可にもかかわらず、輸送量も年々増えてきた。このため、岩村田以東の中山道宿場では、荷が激減して大きな打撃をうけ、日影新道の使用禁止を訴えるなど、後々まで争いが続いた。

天明五（一七八五）年二月に至り、市野菫では、三・七・十の市日をもつ、米穀市場が開設された。日影新道が、係争の後に享保七（一七三二）年、道中奉行所より「従前より輸送していた商品に限り、輸送を認む」との定書を得、それ以後米穀類の動きは活発となり、また佐久地方農民の要望もあつて、市場が開かれるようになったのである。佐久側からすれば、市野菫で取引ができるようになれば、日帰りが可能になり、費用が節約できるので、これを願うのは、当然のことであつた。

ところが、従前より市場があつた本宿では、大打撃をうけることになるので、ただちに反対運動をおこした。この訴訟は認められて、奉行所は、市野菫市場の開鎖を命じたのである。その後、再開設の申請をなし、本宿の反対運動の中で開設は不許可となつたが、下仁田と本宿の市日以外であれば、少しずつの米を買い入れて、小売りしてもよいという例外が認められた。しかし、その後も何度か論争はくりかえされていた。

このような状況のなかで、市野菫は米の集散地として栄え、明治に入つてからも、これは続いていた。米を揃くための水車が、川沿いの集落には数多く見られ、今でも水路が残っているところもある。

市野菫の家並は、北西の方向に向かって、ゆるやかな坂道の両側につながつて開かれたことであつて、道幅だけは、往時とほとんどかわつていない。集落の北寄りのところには墓地があつて、大きな桜の木と、その下にはお室がある。



市野菫の家並

III 下仁田道の現状と文化財

No	名称	年号	備考
161	双体道祖神	明和九年	藤井橋の西
162	名号塔		空居書、他に青面金剛、三戸塔など六基
163	般若心経の碑	天保七年	お諏訪さま
164	お宮	不明	
165	馬頭観音	寛政四年	他に三基
166	馬頭観音	文化四年	他に二基
167	馬頭観音大土	元禄一六年	
168	石祠	不明	
169	庚申塔	不明	他に道祖神等
170	寒念仏	文政元年	
171	双体道祖神	不明	
172	庚申供養塔	享保一五年	他に寒念仏等三基
173	如意輪観音	不明	岩穴の中に安置、他に馬頭観音二基
174	青面金剛	宝水五年	
175	天神様	宝曆八年	目白石
176	双体道祖神		松の木のあま塚、他に庚申塔等
177	細入稲荷大明神		天台宗
178	西光寺	天明三年	西光寺参道、他に十九夜塔等
179	空居阿闍梨の碑		智師門空居阿闍梨、他に空居上人に関する碑が数基あり
180	不動明王像	天保七年	町指定重要文化財
181	寒念仏	文化五年	
182	庚申塔(梵字塔)	享和年間	他にも庚申塔、馬頭像等あり
183	諏訪神社		天台宗

市野萱から内山峠へ行く旧街道は、集落のほぼ中央を左に曲がり、坂道を下って屋敷川を渡り、再び高いところへ出て南に下り、国道に合流している。屋敷川を渡る手前には、天台宗無量寿寺の跡がある。

8 藤井関所から市野萱集落へ

185	薬師堂		道平地内、馬頭観音、双体道祖神がある
186	馬頭観音像		六基
187	庚申塔(梵字塔)	寛政一二年	中丸地内
188	八幡宮		
189	雨宝童子の碑	天保六年	空居上人
190	庚申塔群		他に庚申塔など六基
191	道標	大正一三年	一一基
192	荒船神社		祭神経津主神
193	庚申塔		他に十九夜塔、句碑など数基
194	お宮(天狗さま)	常夜燈(天明七年)	
195	六十六部供養	宝水二年	三重の層塔
196	道祖神		他に庚申像(明和七年)等四基
197	馬頭尊	慶応四年	
198	お堂		市野萱地内

九、市野萱集落から香坂通り日影新道へ

市野萱から先は、自動車がよくややく交換できるほどの山道で、屋敷川に沿って北西へ向かう。四〇〇メートルほど進むと、左手の小高いところに馬頭尊が見え、さらに行くと、左に大日如来登山口という標識がある。

石橋を渡ると左手は溪谷をなし、すぐに橋を渡り川の左に移る。右手は大きな岩の壁がせまってくる。

屋敷集落の手前、六〇〇メートルの所で、旧道は自動車道から分かれて、小さな橋を渡り、左手に入っていく。集落の中央までの自動車道が、十数年前にできるまでは、この地点が自動車の通る終点であった。ここから先の旧道は、歩く人は全くなく、一〇〇メートル位から、ほとんど廃道と化している。

草むらのなかには、地藏や、馬頭観音道供養などが、埋れるかのように放置されていた。馬頭には、寛政七卯（一七九五）年十一月大善日とあり、信州世話人と、上州世話人の名が刻まれている。旧道と新道と交差するところ



香坂越えと志賀越えとの分岐点にある



志賀越えの峠

十三年の十一面観世音などが置かれている。

薬種貯蔵の水室として名高い風穴は、屋敷集落の西のはずれにその跡がある。また、北の山の中腹には、産土様の建物が見える。自動車道終点の少し手前から、旧道は左に入るが、ここには、享保十一（一七二六）年の青面金剛像、庚申塔など四基が建立されている。屋敷から神津牧場までは、自動車の金く通れないハイキングコースとなっている。しかし、牧場の近辺は、作業用の車両などが通る

には、天保と文化の馬頭観音像二体を見ることができ

。ここから一〇〇メートルほどの間は、小径として、旧道が残っており、かたわらの大きな岩の上には、大正

ため、旧状をとどめてはいない。

神津牧場は、明治二十年につくられた近代的な牧場で、現存するものとしては、我国最古であるといわれている。創設者神津邦太郎の胸像は、牧場の中央にある公園に建立されている。その近くにはお釈迦様があり、毎年春には、神津牧場の山開きとあわせ、釈迦祭りを行なっている。

牧場から香坂峠（日影新道）へは、旧街道とは並行し、あるいは同一ルート上に、登山道が整備されている。牧場から一・三キロほどのところで、道は二つに分岐する。直進するのが香坂通り日影新道、左は志賀越えの通りである。ここには馬頭観世音が建っており、白石には「右ハ香坂、左ハ志賀」と道しるべも兼ねている。嘉永五（一八五二）年歳次壬子三月吉日、信州佐久郡出合馬持中と記されている。

裏妙義山塊を見わたす、峠（二二四〇メートル）の頂上には、佐久市観光協会の立てた観光案内標識があり、軽井沢から県境沿いに、内山峠へと走っている登山道と交差している。

一方、志賀越えの街道は、香坂通りから分岐したあと、すぐに牧場の柵でしや断されてしまふ。その内側は急な斜面の放牧地で、街道のこん跡は何ひとつ残っていない。放牧地の中央を、妙義荒船スノーバー林道が貫いている。牧場の柵は、志賀越えの県境に沿う部分まであり、その付近でようやく街道の跡を見ることが出来る。朽ちかけた観光案内標識と、草むらに埋もれる首のない石仏とが、かつてここに人の踏みしめた道があったことを教える唯一のものとなっている。

No.	名称	年号	備考
200	馬頭観音道供養	寛政七年	
199	馬頭観音像	天保二年	他一基
201	産土様		

9 市野重集落から香坂通り日影新道へ



小 屋 場 の 家 並

市野菫の西のはずれで、国道に合流した旧道は、国道と同一ルートをとりながら、小屋場へ向かう。途中、右手の林の中には、安永年間の馬頭像がひっそりと建っているのを見ることができ、

市野菫から一・二キロほどのところで、国道は西高畠に架けられた落合橋を渡る。この橋は、水面からはかなり高いところに位置しており、かつて

の旧道は、橋の手前からずっと下に降り、溪流を渡ったあと、また急坂を上って小屋場に向かっていった。

落合橋から先の道路は、こう配がやや急となり、断がいをはりつくりように進む。大きな岩の切り通し区間は、新道開削前は、その上をあえぐようにして、歩いたところである。

白井橋を渡ると、小屋場である。橋のたもとには、天保十(一八三九)年の馬頭観世音が建つ。旧道は国道と異なり、それよりも南側、

205	204	203	202
馬頭観世音像	馬頭観世音像	お歌海楼	青面金剛像
右ハ香坂、左ハ志賀、他に馬頭像	神津牧場	神津牧場	他に庚申塔等三基
嘉永五年	享保二年		

十、市野菫集落から内山峠へ

ら、バイパスを横切るまでの間は、旧道の痕跡は全く残っていない。この地点から先は、車の入れない、幅一間ほどの道である。

小屋場から八〇〇メートルほどのところ、内山峠バイパスの四号橋の下側付近から、旧道はほぼ廃道と化する。ここまでの区間は、送電線の巡視路として、多少利用されているが、これより先は、巡視路が溪流の左側に移ってしまふからである。そして、内山峠バイパスを横断する前後は埋めたられ、あるいは削りとられて、全くその跡を残していない。

旧道を内山峠へ向けて、さらにたどると、峠の手前五〇メートルほどは、現在ある山道より少し手前で右手に入り、旧国道に合流していた。峠の頂上は標高一〇六六メートル、右手のコンクリート壁の後側に、大きな馬頭観世音(文久四甲子(一八六四)年三月吉日)と、馬頭像(慶応二(一八六六)丙寅十一月日)が忘れられたかのように、置かれている。



内山峠 馬頭観世音

峠の茶店の前を通っていた。そして馬頭像三体を左に見て、小屋場橋の下で市野菫川を渡り、旧国道と国道バイパスを横切つて内山峠へと続いていた。馬頭像か

No	名称	年号	備考
206	庚申供養塔	元文五年	他に青面金剛塔など四基
207	馬頭観世音像	安永年間	
208	馬頭観世音	天保一〇年	白井橋の左手にあり

10 市野菫集落から内山峠へ

## 十一、下仁田町から磐戸宿へ

南牧川と西牧川の合流地点は、青岩とよばれる景観のすくれたところで、牧口橋からその全景を見渡すことができる。

下仁田町から西牧川を渡って栄町に入った道は、その牧口橋から約一〇〇メートル西の地点で県道にぶつかる。

旧道は約一五〇メートルで左折する。南牧川をはさんで対岸の大崩山(四六七メートル)は「根なし山」と言われ、青岩にみられる緑色片岩の基盤の上ののっているめずらしい山である。

川沿いの道祖神にある大崩村は、寛文二年・天保の郷帳にも見えないが、今でもこの地域は大崩で通っているそうである。

道は南牧川に沿って下っていき、やがて水車のコンクリート堤防にあたる。このあたりから道はなく堤防に沿って畑を進むそして、この堤防の西端付



橋 供 養 (跡倉)

近から橋で対岸の跡倉に渡った。対岸には橋を取付けたあとも残っている。この橋は明治四十三年の水害で流され、それ以後かけられなかったという。

そのため、川をわたらない道(現在の県道)がつけられた。

県道川井の三差路は鞍部となっていて、下仁田方面から上りあげて青倉へ下りながら川沿いを進むが、この坂は「きんたま坂」と呼ばれている。何ともユーモラスな名称だが、以前はもつと急坂で、きんたまをさするようだったからだと言った。

跡倉の村落の道を南牧川沿いから青倉川沿いに進み、青倉川の橋を渡る。橋の手前左側石垣沿いに道祖神と橋供養文化十三(一八一六)年がある。橋供養碑の裏には道しるべが刻まれているが、石垣が近すぎて一部しか判読できない。

石垣上には、昔は寺があったとのことであるが、現在は小さな堂が一つ建っているのみである。庭には一字一石塔、双体道祖神、二十三夜塔、飯糰植現など多くの石造物がたちならんでいる。

橋をわたると直前に岩山がある。道は岩山を右に回りこんで県道下仁田・小平線と交差し、直進して農協倉庫の後ろを通り、製茶工場の手前で県道(下仁田・佐久線)に出る。

岩山の上には、庚申塔三基、馬頭観音六基他黒滝山不動寺住職の諸法實相塔(享保丙辰)等多くの石碑を見ることができ(註)。

これより道はほぼ南牧川沿いに進み、県道とはほぼ同じ位置を走ることになる。

山根を大きく左に曲りこんで大桑原の村落に入る。村落の手前は「番匠免」と呼ばれ、この先から旧道は左斜めに進む。製材工場の後ろの辻に道祖神と風化した一字一石供養塔がある。この辺りの南側には武田信玄の子孫にまつわる言い伝えがあるが真偽は不明である。

火の見やぐら先で県道に出合くと、すぐ先の安井鉄工所辺りで直角に左折する細い道がある。大字大桑原井戸ノ上と呼ばれている地点で、この旧道は



III 下仁田道の現状と文化財

取水口が見られる。宮室山常光寺参道入口を左に見ながら直進すると、やがて県道に出る。そこを横切って山際の細い道に向かう。一五〇メートルほど回り込んで人家の終わるところを下ると、県道きわの滑沢に出る。堀の左側には庚申塔、道祖神等の石造物が数基建っている。堀を渡り、県道を横切ると川沿いの道となるが、ここは埋立てられてあとかたもなくなくなっている。宮室の村岸は風口、漆原、下郷の集落と続いている。風口には縄文式土器片が散見される。

約二〇〇メートルほどで下仁田町と南牧村の境界に至る。南牧自然休養村



道しるべ(中の賀)



八幡宮(大桑原)

二〇〇メートル先の道祖神、庚申塔がたちならぶ地点で県道と合流したが、現在は途中から人家の庭、畑となっていて通り抜けることはできない。

県道は大きく左にカーブし、右下の杉木立の中には八幡宮が見える。宮室に入ると、旧道は集落手前右側の杉林を見ながら右斜めに入る。川には鑛川用水の

の広告塔付近である。

南牧村小沢に入ると、すぐ青倉石灰工場がある。この工場の手前、県道右側に五基の石造物がある。そのうちの二つは南牧道では珍しい道しるべで、

(正面)

下仁田へ志り

一ノ宮へ三り

従是 妙義山へ四り 年参二十四人講

黒滝山へ志り半

砥山へ二り半

(右側)

嘉永元年

戊申十月吉日建

(左側)

発願主

田村久右衛門高光

と記されている。石灰工場の西隣、磐戸工業新工場を左に見ながら左にカーブすると、弁天橋という小さな橋を渡る。旧道はこの橋を渡らず左に直角にまがり、すぐ右折して橋を渡る。そして、小さい坂をのりあげて下ると県道に出る。

大塩沢から黒滝山へ通じる道は、小沢橋で分岐する。橋のたもと(旧道のあった位置)には、大きな道しるべ(昭和八年)が見られる。

黒滝山は標高八七〇メートル。中腹に黄檗宗不動寺(本尊不動明王伝行基作)があり、寺をめぐる山々は奇岩からなり、特に「九十九谷」の景勝はすばらしい。夏季は青少年各種団体、大学生の合宿でにぎわい、秋の紅葉シーズンには多くのハイカーが訪れる。

不動寺は山門、開山堂、座禅堂などの堂塔が奇岩の下にたちならび、延宝三(一六七五)年潮音道海が中興開山となつてから大いにさかえ、道場、末

寺は二〇〇余寺にのぼっていたという。境内には、大菩薩峠の中里介山の句碑「錦屏を立てめぐらして安居かな」、県指定の天然記念物の大ヌギ（樹齢推定数百年）もあって訪れる人を楽しませる。



慈眼寺 全景 (千原)



磐戸神社と常夜塔 (磐戸)

小沢から県道は次第にのぼり坂となり、のぼりつめた地点の橋の左側に道祖神、馬頭観音が見える。旧道はここから右側に見えるガソリンスタンドの中を通り、大千原橋の前を通って県道に合流したが、現在は一部の道しか残っていない。大千原橋を渡ればすぐ磐戸小中学校である。中学校のすぐ上の慈眼寺には、彰義隊副隊長長天野八郎（磐戸村出身）の墓碑がある。千原の集落は川の北岸（日向）に多くあり、古道はこちらにあつたかも知れない。

県道を西進すると、やがて家並みが濃くなり磐戸の宿に入る。宿の中心、右側に磐戸神社が鎮座している。鳥居左に大きな常夜燈がある。裏面には

寛政十年戊午冬十月

大願主 檜沢邑

小須田四郎右衛門

今井 虎 藏

石工

檜沢邑

栄助

信州高遠彌純治

とあり、右側面には、講中の村々として下仁田村、小坂村をはじめ南牧の千原村、塩沢村など二三か村、さらに山中の檜原村、塩之沢、檜沢、白井など七か村の文字が見える。

磐戸の宿は古くから多野郡との交流の中継基地として栄えたと言われ、この常夜燈からもうかがうことができる。昭和になって二度の大火に見舞われたが復興し、商店街もにぎわいをみせている。

宿をぬけて磐戸橋を渡れば川の北岸、檜平である。橋を渡らずに左に道をとおり、檜沢川に沿って上ると檜沢を経て塩ノ沢峠、檜沢峠を越え、多野郡上野村に至る。檜沢から左に行くと、磐石（建築石材）の採石場に至る。

11 下仁田町から磐戸宿へ

No	名称	年号	備考
211	道祖神	文化七年	大崩村
212	馬頭尊	不詳	
213	橋供養	文化一三年	表面は遺しるべ、他に道祖神
214	念仏供養塔	宝暦二年	関平村中、他に三基
	二十三夜塔	文化一三年	他に双体道祖神等三基
	馬頭尊	明和七年	他に五基
	双体道祖神	不詳	二基
	庚申塔	元文五年	寛政十二、万延元年もあり

III 下仁田道の現状と文化財

230	229	228	227	226	225	224	223		222	221		220	219	218	217	216	215										
警戸神社	慈眼寺	大通光祝神	馬頭尊	双体道祖神	道祖神	道祖神	常夜燈	道しるべ	算勝光碑	馬頭観世音	庚申塔	庚申供養	道しるべ	馬頭尊	庚申塔	勢至尊	双体道祖神	庚申塔	常光寺	庚申供養塔	庚申塔	八幡宮	馬頭観世音	庚申塔	道祖神	庚申供養塔	諸法実相塔
元禄一三年	明和六年	不詳	不詳	宝永七年	年号なし	寛政一二年	寛政一二年	寛政一二年	昭和五年	昭和二年	寛政一二年	宝永元年	嘉永元年	明和八年	寛政一二年	寛政一二年	貞享五年	明和八年	文政期	寛政一二年	寛政一二年	安永七年	寛保三年	貞享五年	貞享五年	貞享五年	享保元年
弘化二年再建立	他に天明五年			他に馬頭観世音(年次不詳)					他に宝曆四、文政八、寛政四、明治十七、三十五、〇水七年	矢島勝光(伊三郎)嘉永三年生		中之笠組九人講中	中野資村同行十四人	人馬二世安楽中野資村中	登願主田村久右衛門尚光	宮邑岩井辨之	南牧谷青木宮室村同行七人歌白	当村講中十五人									黒滝深羽黒之住僧臨濟正伝三十五世 親宗元通七十一歳手書 専祈智福寺園満(青倉神社内にある)



庚申塔(檜平)

門札の集落は泉道の両側にならんでいる。道は徐々に上っていき、のぼりきった右手に火の見やぐらがある。ここを右折して下ると南牧川をわたる大日向橋が

警戸橋は明治三十二年県下四番目の鉄橋として架設された評判の橋である。現在の橋はそのすぐ下流にかけられており、そこから昔の橋脚の穴が川底の岩盤に見ることができ、ここがかつての警戸村と月形村の境界であった。左側に一本の杉が見えるが、そこを左に下る細い道が旧道である。現在は払い下げられて人家の庭、畑、敷地となっていて通れない。川沿いに進み、稲荷橋の下流地点で対岸に渡ったという。笹渡<sup>(20)</sup>とも言われている。稲荷橋をわたると左に道祖神、稲荷様がならんでいる。右下に下る細い道が旧道である。この川沿いの道もやはり払い下げられて道の形跡はほとんどない。途中には高札場と呼ばれる場所もあったという。大日向門札である。

十二、警戸宿から雨沢集落へ

常夜燈	寛政一〇年	石工糟沢色家助、信州高遠弥祐活
百庚申	万延元年	
庚申供養塔	正徳三年	



大日向橋 安養寺入口から見た昔の道、石垣中段

ある。この橋のたもとに旧道が続いており、その遺構が石垣に残っている。その後、旧道も南側に寄って火の見やぐら下の道祖神、庚申塔等のたちならぶ道へと変化した。旧道は更に川沿いを通して果道へ合流した。現在は半分も残っていない。

大日向集落では「火とぼし」という行事が四〇〇年もの長い間続けられている。八月十四、十五日妻わらで松明をつくり、夕方に安養寺の向かいの山で大人子どもたちが集まり火をつけて振る。川でも村人が火を振り、この煙にまかれると病気をしないとわれ、夜おそくまでにきわう。

果道は宮の平を過ぎて月影の中心地、雨沢に入る。左にカーブし大日向神社を左に見て雨沢橋をわたる。橋の手前から左に折れる小径は大仁田川に沿って大仁田に至る旧道である。

大日向神社の境内には、弁財天、勢至尊、庚申塔などの石碑が散在している。

また、神社南の山の中腹には産泰様があり、毎年五月一日には大日向神社境内で産泰様の市がたつ。雨沢は南牧村の行政の中心で、役場、中央公民館、消防署があり、商店、飲食店、民宿もあってにぎわっている。

南牧村役場をすぎると、すぐ左に直角に折れる道がある。堂ノ沢と言われるところで旧道の入口でもある。弁財天や馬頭尊を左に見ながら西進すると、道は細くなりやや上って中央公民館の南側の高

いところを通過する。道はやぶで通れなくなるが、その中にもひっそりと馬頭観世音がたえずんでいて、道の名残をのこしている。

12 磐戸宿から雨沢集落へ

No	名称	年号	備考
231	庚申	万延元年	
232	楯沢神社		
233	馬頭尊	明和九年	頭部右欠損
234	道祖神	不詳	他に稲荷信仰きつね石遺あり
235	馬頭尊	宝曆一〇年	他に庚申
236	百番供養塔	天明六年	地主門札村
237	馬頭尊	文化一〇年	天下御成平 子孫長衆
238	百番供養塔	不詳	西国秩父坂東
239	馬頭尊	明治二年	他に昭和十二年
240	安養寺	万延元年	地主門札村中
241	安養寺	不詳	他に二十三夜塔
242	庚申塔	万延元年	大日向 講中 新田徳純書
243	六地藏	不詳	宮平 巖願主 市川常五郎、他
244	絹笠大明神	慶応三年	長業善祥書 市河休平立石
245	竹本義興神	大正五年	本名 市川半兵衛 竹本流義太夫
246	愛染明王	承応元年	
247	大日向神社	延享四年	雨沢連衆九〇 他寛政七年
248	百番供養塔	寛政四年	雨沢村薬師堂 願主 浄心
249	勢至尊	元治二年	黒滝卓道祥書
250	弁財天	無記名	二基
251	辨財天	安永一〇年	
252	馬頭観世音	寛政六年	寛政六龍舎甲寅講四月吉祥日
253	馬頭尊三基	天明五年	当所 茂木源八
254	馬頭観世音	安政七年	他は明治五年
255	馬頭尊	延享四年	他に寛政十、明治二年がある

245	石 祠 西国四國 供養塔	元禄一〇年 市川半右衛門
	馬頭尊	安政二年 当所 頼主 石井氏
	文化 元年	

十三、雨沢集落から砥沢宿へ

やがて県道といっしょになって六車に至る。ガソリンスタンドの下手に不説法華一千部塔、文化元(一八〇四年)が見える。そして、スタンドの北側を川に向かって下る六尺道がある。この旧道は細くなって県道と底瀬に向かう道の分岐点に上って県道と合わさるが、道端には馬頭尊などが石垣上にあつて旧態をよく残している。

そして、砥沢へと続く日影道はずっと県道と重なって上り、曲っている。底瀬橋をわたると、すぐ常夜燈天保三(一八三二)年につき当たる。文字のほりの中に塗泥がかすかに残っており立派なものである。以前、日影道にあつたのを移したものだと言われる。

また、常夜燈のすぐ東、底瀬川をわたると大雄寺がある。

橋の下には庚申塔や大雄寺に関する石造物がまともままと建てられている。

六車をすぎ人家が途切れると左の岩山上に馬頭観音五基、庚申塔一基がある。道は急勾配となる。通称万地の坂といわれ、冬は難所となる。

川向こうの日向側には二〇戸弱の家々が見える。赤岩とよばれる集落で、下の方は月形、上の一部は尾沢の分である。このあたりの道は山の中腹を行く感じでカーブの連続となる。やがて蟬の橋をわたり日向道となる。

蟬の橋の溪谷は兩岸が最も迫り、激流がその間をえぐり、昼なお暗い淵となっている。最も狭いところは、両手をひろげる程の幅しかなく、南牧村指定名勝となっている。

以前の橋は明治三十六年の道路改修と共にかけかえられ、更に前は一町は



馬頭尊(六車地内)



常夜燈(六車地内)

ど下流の長壽といわれるところにあつた。

芭蕉句碑「聞かさや岩にしみ入る蟬の声」安永(一七七三)年は橋をわたった右側の山の中腹にある。橋の近くには加州の俳人半可坊実円の「名月や蟬鈴宿か辛の先」の碑もあつて共に南谷社中の人々によって建てられており、江戸時代からの当地の俳句の隆盛を見る事ができる。

橋をわたりきつたところには、庚申塔など十五基がたちらび壯観である。広くなった県道を進むと、急に道はせばまってくる。このあたりが南牧関所(砥沢の関所)のあったところで、昭和三十年ころまで建物の一部が残っていたと言ふ。砥沢の宿の東端で北に山を負い、南は南牧川を臨む交通の要地である。代々羽沢の市川家が関所を守っていた。

すぐ西の左道下には人麿神社がある。旧道は石段のわきを下っていく。細い道だが人家の間を通りぬけ、通称水神様、水府龍神寛政五(一七九三)年

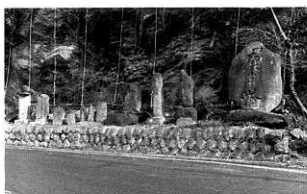
の石碑を右に見ながら上っていき、やがて右折して県道（浅川電機店前）に出る。

砥沢は「上野砥」(御蔵砥)として有名な砥石の産地であり、米市場として、また上信の交通の要地の宿でもあった。

砥石生産の歴史は古く、慶長年間奈良屋彦次郎や代官中野七藏によって開発され、元和九(一六二三)年市川家により本格的な経営が始まっている。

幕府の種々の保護と特権により、運上金を納め管理に南牧二十一か村の百姓を自由に使い、寛文七(一六六七)年をピークとして年々二万駄余りを生産した。享保以後から減少しはじめ、経営者も変遷している。

砥石は下仁田―富岡―藤岡を経て藤ノ木・八丁河岸から利根川で江戸に送られている。砥沢からの輸送はすべて馬で行なわれた。南牧道には馬頭観音の数が多いうもつなすける。



庚申塔などの石造物群(砥沢)



砥石をきり出す道具(現在は使っていない)

明治になって今戸に良質の砥脈が発見され、再び盛んとなったが、現在は合成砥におされ需要も少なくなり、三人で採掘を続けている状況である。やがて砥沢の砥石の火も消えていく運命にある。

砥山神社は砥切職人の氏神として古くから敬われている。幕府の保護により社殿の改造、祭典には毎年代官より幣帛料が出されていた。砥山の発見に由来する猿が祭られており、犬の入山も口ふえも禁忌とされている。祭礼は今も一月十一日と八月の一の申の日に行なわれている。

中道院(宝砥山蓮師寺)は砥山明神の別当として砥切百姓の安全祈願をしていたという。

砥沢の細い県道には、蔵や古い家並みが目立つ。荒船酒造のところで道は十字路となる。左に折れると砥沢大橋を渡り、日影の村落を経て中道院、砥山神社を通りぬけ、砥山に向かう。

直進して三軒目のところを左に下る細い道が旧道のすぐ左下を通っている。川を渡れば砥山に至る道に合流する。

旧道を上りあげ県道に入ると、すぐ小さな沢をわたる。右手には旧道の一部がとりのこされ、水道の記念碑と共に木々のかげにひっそりとたたずんでいる。

左には山城屋と呼ばれる家がある。旧道はそこから県道と分かれ山城屋の南、川ふちを通る細い道となる。約三〇〇メートル先の田区公食堂の敷地に出たが、現在はほとんどが通行不能である。

砥沢郵便局から先は、ほぼ県道と並行してすぐ左下が旧道であった。

駐在所をすぎると家並みは途切れ、右に大きくカーブする。また左にカーブするが、その直前右上にのぼる小径がある。県道を下に見てこの旧道は、すぐ先の製材所の向こうのコンクリートブロック積みのもようである。更に右斜面にのぼったようだが、道はのこっていない。

III 下仁田道の現状と文化財

No	名稱	年号	備考
246	不説法華一千部塔	文化元年	先祖菩提子基未久 六車村 小金沢 勤六
247	馬頭尊	宝曆三年	親音妙智力 能救世間苦
248	馬頭觀世音	文政六年	他に一基あり
249	大雄寺	文政年間	他に嘉永、明治二〇年がある
250	青面塔	天明六年	願主 日向村中
251	庚申塔	天明二年	他に明和三年、明和四年
252	百番供養塔	天明六年	金毘羅大権現、慈眼寺前住 八十五歳妙覺書
253	常夜燈	天保三年	
254	庚申	不詳	
255	馬頭尊	嘉永三年	他に三基(嘉永三、不詳二基)
256	馬頭尊三基	文化元年	他に(文化七、天保十三、不詳一)
257	庚申	寛政二年	光明山妙覺祥書講中二十人
258	馬頭尊	明和八年	他に安永九、不詳一
259	芭蕉句碑	安永二年	閑さや岩にしみ入る蟬の声
260	句碑	不詳	名月や蜻蛉宿かる卒の先
261	道祖神	不詳	他に馬頭尊三基(年次不詳)
262	寒念仏供養塔	元文九年	当郷 浅川氏
263	二十三夜塔	安永九年	砥沢日向村講中三拾三人他に宝曆二年
264	庚申供養塔二基	享保一年	他に万延元、不詳一
265	庚申塔二基	寛政二年	
266	青面金剛塔	寛政二年	藤原茂七
267	馬頭尊	嘉永元年	砥沢村市川弥十郎
268	南牧開所	明治二年	
269	水府龍神	寛政五年	
270	弁財尊天	寛延二年	砥山大明神 别当中道院
271	常夜燈	安政二年	
272	青面金剛塔	安永七年	砥沢日影郷中

13 兩沢集落から砥沢宿へ

261	中道院	砥山神社
262	馬頭觀世音	明治二年 土屋三五郎、他に不詳一基

十四、砥沢宿から余地峠へ

砥沢から羽沢に入り南牧農協砥沢支所をすぎると、旧道はすぐ建物の間を川におりる。星尾川をわたり、曾根隆太郎氏の庭をぬけ、尾沢小学校集会所の西側に出て県道といっしょになる。尾沢小学校の校門地点である。ここは三差路になっており、羽沢市川家の屋敷のあったところであった。

市川家は砥沢の関守でもあるが、信州浅科村の五郎兵衛新田の開発が有名である。

砥山を経営していた市川家は、五郎兵衛の代に浅科に用水を開削し、寛永八(一六三一)年新田開発に成功した。用水堰は五里にも及び高度の技術に支えられたもので、寛文頃から用水開削者の名をとって五郎兵衛新田と名づけられた。

五郎兵衛の墓は浅科村にあるが、羽沢市川家墓地(尾沢小学校北)にもある。

寛文五歳巳九月九日

鉄路園心大徳堂 市河五郎兵衛真親

また、かたわらには市川家累代の墓もならんでいる。

三差路を右に行くと星尾川と共にそ上し、星尾峠をこえ長野県佐久市内山にぬける。この道は内山道とも言われていた。

左に道をとり南牧川北岸を進む。バス停上堰敷手前から川をわたる旧道が残っている。岩の上をぬけ、やがて合芳橋の先に出る。県道はすこい絶壁で

岩がせり出しており、このため川をわたったのだろうか。



市川五郎兵衛墓（羽根沢）

合芳橋をわたると勸能の集落が川の両側に見えてくる。山の斜面は切りひらかれた段々畑と石垣の連続である。

県道は川の南側をほぼ真すぐに貫

いている。民家は北側に多く集まっているところから、旧道はこの集落の中を通っていたと考えられる。そして馬坂川、熊倉川の合流点（落合）で左にまがり熊倉へ進む。右に道をとると田口峠を経て長野県白田町に出る。

熊倉川を右に見て県道を進む。道は上り坂となりカーブが続く。右にあった川が左になり、しばらく進むと人家がぼつぼつと見えてくる。ここが南牧道最後の集落熊倉である。

山はいよいよせまり溪谷の美しさが増してくる。三段の滝、象ヶ滝などの名瀑もあって景観美を添える。

三段の滝入口の標識から約三〇〇メートル行くと人家に向かって左に下りる細い道がある。この旧道は熊倉公民館隣の川に沿って上り、急に右に回り込んで急坂となり県道と合わさる。

このあたり岩山が「鉾はずし」と言われているところで、道祖神、庚申塔、馬頭観音などが岩上に見える。「鉾はずし」とは水株六（一五六三）年余地峠をこえて上州に入った武田信玄の軍勢が突出した岩角と櫛の大樹のためあぶみが触れ、皆馬からおりて通過したと言われている坂である。

五〇メートルも進まぬうちに道は二つに分かれ、直進すれば余地峠へ、左折して橋を渡れば大上を経て矢沢峠、大上峠に出る。橋のたもとに岩上には、



熊倉集落内から余地峠へぬける道

庚申塔、供養塔外多くの石造物が建ちならび壯観である。

直進すると道はせまくなり、車の通行もやっとで人家のひさしの下を歩くようである。一〇〇メートルも行かぬうちに集落は終わりを告げ、あとは山道が続く。車の通行も不能となる。

やがて象ヶ滝の入口の小さな標識と細い道が見えてくる。このあたりから道はいよいよ急坂となり沢は小さくなって静かな山道となる。そして、道の右上の小さな馬頭観世首明治四（一八七二）年を最後に石造物は姿を見せなくなってしまう。

沢の流れに沿った道は、まもなく二つに分かれるが右の方の上りをとる。よく見るとかたわらに余地峠入口の標識がある。

ここからは道はあるもののほとんど人の通った形跡はなく、やぶになっていて通行は困難である。木の葉の落ちた十月末ころ、右に左にまがりながら



余地峠上の石造物





281	279	278
馬頭觀世音	馬頭尊 南無觀世音菩薩	住吉大明神 青面尊 大勢至菩薩 庚申供養塔 南無阿彌仏
大正二年	明治四年	文久三年 万延元年 嘉永五年 安政六年 天明三年
願主 日向喜代作立、他二基		安田保□□立 長野見意業善拜書上組十二人 天明三年癸卯秋檢深之除新開此路矣 <small>(カ)</small>

## あとがき

本年度の歴史の道調査は五街道という数多い街道調査であり、しかも調査員の数も限られた中で調査であった。そのため、調査員の方々には、前回までの調査以上に多くの負担をかけることになってしまった。それにもかかわらず、各街道について道の確定、道の現状、文化財の分布状況等適確に把握でき、初期の目的を達成することができた。

今回の調査においても、近代化の波の速さに驚かされるのが度々であった。年度当初の調査時と年度終了の際での写真を比較すると、わずか一年足らずの期間に、同じ場所でありながら全く異なる風景が各街道で写し出された。このことから歴史の道調査が時機を得た調査であるとともに、調査の重要性をも再認識させられた。

また、本年度調査対象街道は、県内でも臨街道的な存在であり、そのためこれまで未調査の部分が多い街道であった。今回の調査によって、これらの街道の道が確定できたことや、一連の文化財調査ができたことは、今後の街道研究上、大きな意義をもつものと思われる。

ここに本調査によって明確になった点をあげると、川と水田の低湿地の中に築かれた堤防上をくねくね曲がりながら、三メートル幅の旧道がはるか遠くまで続く古河往還。これは県内の他街道では見ることのできな光景である。

また、桐生の絹織物が江戸や上方へ搬出された道であった古戸・桐生道。新道と旧道を縄をなうように残されており、この旧道の一宿である道の中央に堀割を残す丸宿は印象的であった。

そして、中世には既に相当利用されていたが、江戸時代には口留番所が置かれ、ほとんど通行禁止となりながら、再三にわたり開閉願いが提出され、明治初年ようやく開通した時に築かれた峠付近に残る石垣。あるいは、佐渡奉行街道の中世から近世にかけての通路の変遷や、中山道から玉村宿に至る

数条の道筋。また、民家や水路に昔の宿場の面影をしとめる八木原、大久保、総社宿の景観。これらは貴重な街道資料である。

また、本調査では、最も長い距離をもつ下仁田道。下仁田地方の特産である紙沢紙しざし、こんにやく、ねぎ、和紙の搬出路として重要視されていた。現在でも旧道沿いの宿場町であった藤岡、吉井、富岡、下仁田、紙沢等には土蔵造りの商家あるいは旅館屋風の家々が往時の面影をどどめている。だが、国道十八号のバイパスの役割はましても変わらず、自動車の交通量は年々増加し、今後の保存対策が待たれる。

特に、この下仁田道の枝道ではあるが、甘楽町小幡の城下町としての道路中央を流れる堀割及び家並、陣屋内の石垣の続く道筋は保存状態が極めて良好であることが確認された。これは本年度調査の大きな成果といえよう。

これらの成果の除には幾多の労苦や協力があつた。これまで不明であつた旧道の道筋について、地元教育委員会の方や地元の方々に日曜日にもかかわらず、炎天下の中を一日中案内していただいたり、背丈より高い草むらをかきわけ橋脚の跡を教えていただいたり、種々お世話になつた。

また、調査も必ずしも順調に進んだわけではなかつた。樹木や光線の関係で冬季にと予定した写真撮影は、今冬まれにみる大雪のため、石仏等雪下に埋れ、雪どけまで撮影困難となつたこともあつた。あるいは、現在廃道になつた峠道を数時間かけてようやく上つたところ霧のため、まわりがさすんで写真撮影できなかつた等、数々の障害もみられた。

だが、調査員の方々の献身的な調査への参加により、課題を一つずつ克服し、ここに、本報告書を刊行することができた。協力いただいた方々に感謝する次第である。

この報告書が、今後の研究用資料として、さらに県民一般の街道探訪のハンドブックとして利用されれば幸いである。そして、調査本来の目的としての保存整備の基礎資料として、本調査で得られた資料をさらに詳細に分析し、十分検討していきたい。

(文化財保護課)

下 仁 田 道

---

印刷 昭和56年3月25日

発行 昭和56年3月31日

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1

TEL. 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 朝日印刷工業株式会社

---